

# 日 上 畝 山 古 墳 群 II

— 範圍確認調查報告書 —

津山市埋藏文化財発掘調査報告第78集

2007

津山市教育委員会





日上畝山古墳群遠景（西から）



日上畝山古墳群（東丘陵）遠景（南東から）





日上畝山古墳群出土須恵器



T 2-11 出土人物埴輪



T 5-7 出土馬形埴輪



## 序

津山市は岡山県の北部に位置し、市内には沼弥生住居址群、史跡美和山古墳群、史跡美作国分寺跡、史跡津山城跡など各時代の遺跡が数多く存在し、古来より美作の中心として発展しております。この内、市内東部の日上地区に所在する日上畝山古墳群は、県下でも有数の規模を誇る古墳群として、隣接する日上天王山古墳とあわせて岡山県指定の史跡となっております。

本古墳群につきましては、昭和42年に一部が調査され、墳丘の存在しない前方後円墳や円墳が確認されております。平成7年度からの測量調査、確認調査では、56基の古墳が現存する事、また出土した副葬品から古墳の時期もある程度判明しております。今回の調査はこれら古墳群の保存を目的として、既に古墳の墳丘の見られない畑や山林になっている部分を中心に調査をおこない、古墳の詳細な分布状況を把握いたしました。

調査は平成13年度から国・県の協力を得ながら実施してまいりました。その結果、11基の古墳を確認することができ、あわせて埴輪、須恵器など多くの遺物も出土しております。これら調査結果から本古墳群の重要性を再認識することができたのではないかと確信しております。

さて、本書はその成果をまとめたものです。今回の調査結果が、今後の美作地方の古墳研究の一助となれば幸いです。

なお、終わりにになりましたが、調査にあたりご協力いただきました地元地権者の皆様及び関係各位に対し敬意を表すとともに、厚くお礼申し上げます。

平成19年3月31日

津山市教育委員会

教育長 藤田長久



## 例 言

- 1 本書は岡山県指定史跡日上畝山古墳群ひのかみうぶやまの確認調査報告書である。平成9年度に「日上畝山古墳群」名で報告書を刊行しているため、本書はその2冊目である。
- 1 調査は国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等）として平成13年度から平成17年度まで津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター小郷利幸（1次から5次）、豊島雪絵（1次から2次）が担当して実施した。高、平成18年度は報告書の作成をおこなった。
- 1 調査に使用した座標は第V直角平面座標系で、X・Y座標数値はいずれも-で、X軸は上3桁、Y軸は上2桁を省略した。例えばX軸500は-105500、Y軸400は-27400を示し、単位はmである。高、前回調査時の座標を踏襲しているため、本座標は新座標ではなく旧座標である。方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 1 本書挿図には古墳以外の遺構に略称を用いている。略称は次のとおりである。  
SH：住居跡 SB：建物跡 SK：土塼 P：柱穴
- 1 本書の執筆は小郷・豊島・行田裕美が行い、文責は文末に示した。なお編集は小郷・平岡正宏がおこなった。
- 1 自然科学的分析として、岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「日上畝山古墳群出土埴輪・土器の胎土分析」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。
- 1 出土遺物及び図面等は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターで保管している。
- 1 本書は将来的にはオンラインでの公開も視野に入れ、本書の総てのデータをPDFフォーマット及びAdobe Indesign CS形式で保管している。



# 目 次

I. 位置と環境	1
1. 遺跡の立地	1
2. 周辺の遺跡	1
II. 調査の経過	5
1. 過去の調査履歴（従来の見解）	5
2. 調査経過	8
3. 調査体制	10
III. 調査の記録	13
1. 1次調査（平成13年度）	13
(1) トレンチの概要	13
(2) 出土遺物	22
a. 埴輪	22
b. 須恵器	22
(3) 小結	22
2. 2次調査（平成14年度）	24
(1) トレンチの概要	24
(2) 出土遺物	36
a. 埴輪	36
b. 須恵器、弥生土器	41
(3) 小結	44
3. 3次調査（平成15年度）	47
(1) トレンチの概要	47
(2) 出土遺物	57
a. 埴輪	57
b. 須恵器、土師器、弥生土器	63
(3) 小結	68
4. 4次調査（平成16年度）	71
(1) トレンチの概要	71
(2) 出土遺物	79
a. 土師器、鉄器、石器	79
(3) 小結	80
5. 5次調査（平成17年度）	81
(1) トレンチの概要	81
(2) 出土遺物	86
a. 埴輪	86
b. 須恵器、土師器、弥生土器	95
c. 石器	96
(3) 小結	97
IV. 過去の出土遺物	99
1. 埴輪	99
2. 須恵器、土師器	110
V. 自然科学的分析	119
1. 日上畝山古墳群出土埴輪・土器の胎土分析	119
VI. 考察	125
1. 日上畝山古墳群について	125
(1) 群構成と時期について	125
(2) 出土遺物について	127
(3) 集落跡について	135
2. 日上畝山古墳群をめぐる諸問題	138
(1) 美作の埴輪とその特質—加茂川流域のIV期～V期を中心として—	138
(2) 日上畝山古墳群の評価—その特質—	140



## 挿図・表目次

第1図	津山市位置図	1
第2図	日上畝山古墳群位置図 (S=1:5000)	2
第3図	日上畝山古墳群と周辺主要遺跡 (S=1:25000)	3
第4図	日上畝山古墳群(東丘陵)平面図 (S=1:1000)	11~12
第5図	平成13年度トレンチ配置図 (S=1:400)	14
第6図	トレンチ1~3 (T1-1~3) 平面・土層図 (S=1:100)	15
第7図	トレンチ4・5・8 (T1-4・5・8) 平面・土層図 (S=1:100)	16
第8図	トレンチ6・7・9 (T1-6・7・9) 平面・土層図 (S=1:100)	17~18
第9図	トレンチ10 (T1-10) 平面・土層図 (S=1:40)	19
第10図	トレンチ11 (T1-11) 平面・土層図 (S=1:40)	21
第11図	出土遺物 (埴輪、須恵器、S=1:4)	23
第12図	平成14・15・17年度トレンチ配置図 (S=1:400)	25~26
第13図	トレンチ1・2 (T2-1・2) 平面・土層図 (S=1:80)	27
第14図	日上畝山58号墳填丘復元図 (S=1:200)	29~30
第15図	トレンチ3・4 (T2-3・4) 平面・土層図 (S=1:80)	31
第16図	トレンチ5~8 (T2-5~8) 平面・土層図 (S=1:80)	32
第17図	トレンチ9~11 (T2-9~11) 平面・土層図 (S=1:80)	33
第18図	トレンチ12~14 (T2-12~14) 平面・土層図 (S=1:80)	35
第19図	出土遺物 (1) (埴輪、S=1:4)	37
第20図	出土遺物 (2) (埴輪、S=1:4)	38
第21図	出土遺物 (3) (埴輪、S=1:4)	39
第22図	出土遺物 (4) (埴輪、S=1:4)	40
第23図	出土遺物 (5) (須恵器、S=1:4)	41
第24図	出土遺物 (6) (須恵器、S=1:4)	42
第25図	出土遺物 (7) (須恵器ほか、S=1:4)	43
第26図	58号墳遺物出土位置図	45
第27図	トレンチ1~3 (T3-1~3) 平面・土層図 (S=1:80)	49~50
第28図	T3-1 周溝内遺物出土状況 (S=1:20)	51
第29図	T3-2 埋葬施設平面・断面図 (S=1:20)	51
第30図	トレンチ4~7 (T3-4~7) 平面・土層図 (S=1:80)	52
第31図	トレンチ8~11 (T3-8~11) 平面・土層図 (S=1:80)	53
第32図	トレンチ12~15 (T3-12~15) 平面・土層図 (S=1:80)	55~56
第33図	出土遺物 (1) (埴輪、S=1:4)	58
第34図	出土遺物 (2) (埴輪、S=1:4)	59
第35図	出土遺物 (3) (埴輪、S=1:4)	60
第36図	出土遺物 (4) (埴輪、S=1:4)	61
第37図	出土遺物 (5) (埴輪、S=1:4)	62
第38図	出土遺物 (6) (須恵器ほか、9…S=1:8、他はS=1:4)	64
第39図	出土遺物 (7) (須恵器、S=1:4)	65
第40図	出土遺物 (8) (須恵器、15~19…S=1:4、20~23…S=1:8)	66
第41図	出土遺物 (9) (須恵器、S=1:4)	67
第42図	日上畝山古墳群(西丘陵)平面図 (S=1:1500)	69~70
第43図	トレンチ1~4 (T4-1~4) 配置図 (S=1:200)	72
第44図	トレンチ1~4 (T4-1~4) 平面・土層図 (S=1:80)	73~74
第45図	トレンチ5~8 (T4-5~8) 配置図 (S=1:250)	76

第46図	トレンチ5～8 (T4-5～8) 平面・土層図 (S=1:80)	77
第47図	トレンチ9・10 (T4-9・10) 配置図 (S=1:200)	78
第48図	トレンチ9・10 (T4-9・10) 平面・土層図 (S=1:80)	78
第49図	出土遺物 (1～6…S=1:4, 7～10…S=1:2)	79
第50図	トレンチ1～3 (T5-1～3) 平面・土層図 (S=1:80)	83-84
第51図	T5-1土壌1平面・断面図 (S=1:20)	85
第52図	T5-2埋葬施設平面・断面図 (S=1:20)	85
第53図	トレンチ4・5 (T5-4・5) 平面・土層図 (S=1:80)	87-88
第54図	トレンチ6～10 (T5-6～10) 平面・土層図 (S=1:80)	89-90
第55図	出土遺物 (1) (埴輪, S=1:4)	91
第56図	出土遺物 (2) (埴輪, S=1:4)	92
第57図	出土遺物 (3) (埴輪, S=1:4)	93
第58図	出土遺物 (4) (須恵器ほか, S=1:4)	94
第59図	出土遺物 (5) (須恵器ほか, S=1:4)	95
第60図	出土遺物 (6) (石器, 1・2・4…S=1:2, 3…S=2:3)	97
第61図	旧調査出土遺物 (1) (埴輪, S=1:4)	100
第62図	旧調査出土遺物 (2) (埴輪, S=1:4)	101
第63図	旧調査出土遺物 (3) (埴輪, S=1:4)	102
第64図	旧調査出土遺物 (4) (埴輪, S=1:4)	103
第65図	旧調査出土遺物 (5) (埴輪, S=1:4)	104
第66図	旧調査出土遺物 (6) (埴輪, S=1:4)	105
第67図	旧調査出土遺物 (7) (埴輪, S=1:4)	106
第68図	旧調査出土遺物 (8) (埴輪, S=1:4)	107
第69図	3号墳出土遺物 (埴輪, S=1:4)	108
第70図	旧調査出土遺物 (9) (須恵器, S=1:4)	111
第71図	旧調査出土遺物 (10) (須恵器, S=1:4)	112
第72図	旧調査出土遺物 (11) (須恵器, S=1:4)	113
第73図	旧調査出土遺物 (12) (須恵器, S=1:4)	114
第74図	旧調査出土遺物 (13) (須恵器, S=1:4)	115
第75図	旧調査出土遺物 (14) (須恵器ほか, S=1:4)	116
第1図	埴輪の古墳別胎土の比較 (K <sub>2</sub> O-CaO散布図)	121
第2図	埴輪の古墳別胎土の比較 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> -TiO <sub>2</sub> 散布図)	121
第3図	埴輪の成形・調整別による胎土の比較 (K <sub>2</sub> O-CaO散布図)	122
第4図	埴輪の成形・調整別による胎土の比較 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> -TiO <sub>2</sub> 散布図)	122
第5図	日上畝山古墳群出土土器と吉備型甕の胎土比較 (K <sub>2</sub> O-CaO散布図)	123
第6図	日上畝山古墳群出土土器と吉備型甕の胎土比較 (TiO <sub>2</sub> -CaO散布図)	123
第76図	日上畝山古墳群 (東丘陵) 全体図 (S=1:1500)	126
第77図	円筒埴輪分類図	128
第78図	口縁に突帯をもつ円筒埴輪 (1) (岡山県内, S=1:8)	130
第79図	口縁に突帯をもつ円筒埴輪 (2) (畿内, S=1:8)	131
第80図	岡山県内出土石見型盾形埴輪 (S=1:10)	133
第81図	加茂川流域の円筒埴輪の変遷	139
第1表	日上畝山58号墳トレンチ各部の高さ	44
表1	日上畝山古墳群出土埴輪等分析一覧表	124
第2表	調査古墳一覧表	125
埴輪観察表		145
土器観察表		148
石器観察表		151
鉄器観察表		151

## 写真図版目次

巻頭図版 1-1	日上畝山古墳群遠景	2	同・蓋石取り外し後
	2 日上畝山古墳群(東丘陵)遠景	3	同上
巻頭図版 2-1	日上畝山古墳群出土須恵器	図版 13-1	同上
	2 T2-11出土人物埴輪	2	同・石棺側石と堀り方間の粘土断ち割り部
	3 T5-7出土馬形埴輪	3	同・南西部小口石と堀り方間の粘土
図版 1-1	日上畝山古墳群(東丘陵)遠景	図版 14-1	T2-1全景
	2 日上畝山古墳群(東丘陵)遠景	2	T2-2調査前
	3 日上畝山古墳群(西丘陵)遠景	3	同・65号墳周溝検出状況
図版 2-1	T1-1全景	図版 15-1	同・拡張前全景
	2 T1-2・3全景	2	同・拡張後全景
	3 T1-2全景	3	同・65号墳周溝
図版 3-1	T1-3全景	図版 16-1	同・65号墳周溝断面
	2 T1-2・364号墳周溝検出状況	2	T2-3全景
	3 同上	3	同・北壁面
図版 4-1	64号墳周溝検出状況	図版 17-1	同・拡張区全景
	2 T1-364号墳周溝断面西壁面	2	T2-4全景
	3 T1-4全景	3	同・周溝落ち込み
図版 5-1	T1-5全景	図版 18-1	T2-5全景
	2 T1-6全景	2	同・周溝断面
	3 同上	3	T2-6全景
図版 6-1	T1-7全景	図版 19-1	同・周溝断面
	2 同上	2	T2-7全景
	3 同上	3	同・周溝断面
図版 7-1	T1-7周溝断面	図版 20-1	T2-8全景
	2 T1-8全景	2	同・周溝断面
	3 T1-9全景	3	T2-9全景
図版 8-1	T1-9焼土面断ち割り状況	図版 21-1	同・周溝断面
	2 箱式石棺1調査前	2	T2-10全景
	3 同・蓋石検出状況	3	同・周溝断面
図版 9-1	同・アゼ取り外し後	図版 22-1	T2-11全景
	2 同・全景	2	同・周溝断面
	3 同・蓋石取り外し後	3	同・人物埴輪出土状況
図版 10-1	同・北東部枕石検出状況	図版 23-1	T2-12全景
	2 同・南西部検出状況	2	同・東壁面
	3 箱式石棺2調査前	3	T2-13全景
図版 11-1	同・検出状況	図版 24-1	同・周溝断面
	2 同・アゼ取り外し後	2	T2-14全景
	3 同上		
図版 12-1	同上		

- 3 同・周溝断面  
 図版 25-1 調査区全景  
 2 中学生の職場体験学習  
 3 現地説明会風景  
 図版 26-1 調査区遠景  
 2 T3-1全景  
 3 同・東周溝遺物出土状況  
 図版 27-1 同・西周溝土層  
 2 T3-2全景  
 3 同・埋葬施設  
 図版 28-1 T3-3全景  
 2 T3-4全景  
 3 T3-5全景  
 図版 29-1 T3-6全景  
 2 T3-7全景  
 3 同・遺物出土状況  
 図版 30-1 T3-8全景  
 2 T3-9全景  
 3 T3-10全景  
 図版 31-1 T3-11全景  
 2 T3-12全景  
 3 同・土層  
 図版 32-1 T3-13全景  
 2 T3-14全景  
 3 同・土層  
 図版 33-1 T3-15全景  
 2 T3-16全景  
 3 作業風景  
 図版 34-1 T4-1全景  
 2 同・土層  
 3 T4-2全景  
 図版 35-1 T4-3全景  
 2 同・住居跡  
 3 同・遺物出土状況  
 図版 36-1 T4-4全景  
 2 T4-5全景  
 3 T4-6全景  
 図版 37-1 同・土層  
 2 T4-7全景  
 3 T4-8全景  
 図版 38-1 63号墳の残丘  
 2 T4-9全景  
 3 T4-10全景  
 図版 39-1 T5-1全景  
 2 同・土壌1遺物出土状況  
 3 T5-2全景  
 図版 40-1 同・埋葬施設遺物出土状況  
 2 T5-3全景  
 3 T5-4全景  
 図版 41-1 同・全景  
 2 同・住居跡5土層  
 3 T5-5全景  
 図版 42-1 T5-6全景  
 2 T5-7全景  
 3 同・遺物出土状況  
 図版 43-1 同・土層  
 2 同・土層 (旧調査部分)  
 3 T5-8全景  
 図版 44-1 同・土層  
 2 T5-9全景  
 3 T5-10全景  
 図版 45 1 古冢碑全景  
 2 同・碑文  
 3 旧調査58号墳周溝  
 図版 46 出土遺物 (1)  
 図版 47 出土遺物 (2)  
 図版 48 出土遺物 (3)  
 図版 49 出土遺物 (4)  
 図版 50 出土遺物 (5)  
 図版 51 出土遺物 (6)  
 図版 52 出土遺物 (7)  
 図版 53 出土遺物 (8)  
 図版 54 出土遺物 (9)  
 図版 55 出土遺物 (10)  
 図版 56 出土遺物 (11)  
 図版 57 出土遺物 (12)  
 図版 58 出土遺物 (13)  
 図版 59 出土遺物 (14)  
 図版 60 出土遺物 (15)  
 図版 61 出土遺物 (16)

# I. 位置と環境

## 1. 遺跡の立地

日上畝山古墳群は岡山県津山市日上430-1番地ほかに所在する。津山市は岡山県の北部に位置し（第1図）、人口約11万人、面積506.36km<sup>2</sup>、この内山林が全体の約60%を占める。市内を一級河川の吉井川が加茂川、広戸川などの支流を従え瀬戸内海へと流路をとる。市内最高峰は鏡野町境にある天狗岩（標高1,196.6m）である。津山市は江戸時代以降、津山城の城下町とともに発展し、この市街地の東方、加茂川が吉井川に合流する地点は河岸段丘状の地形が続き、現在はほとんどがほぼ整備された水田地帯である。その北東側には独立した丘陵があり本古墳群はこの丘陵上に



第1図 津山市位置図

位置する（第2図）。この丘陵は南北に長く、南北およそ400m、東西200mの範囲内に古墳が存在し、その多くは南半分集中する。また北端の古墳の端は絶壁となり、眼下には加茂川を望む事ができ、また吉井川が大きく蛇行している南側川岸からは南端の古墳群を眺望する事ができる。この意味からかなり水運を意識した立地ともいえる。また、陸路を推測しても、東側には美作国分寺、国分尼寺が隣接して存在し、西側の国府方面に至るには、この辺りの河川を渡るのが最短のルートである。よって、この辺りが水陸とも交通の要衝であったといえる。

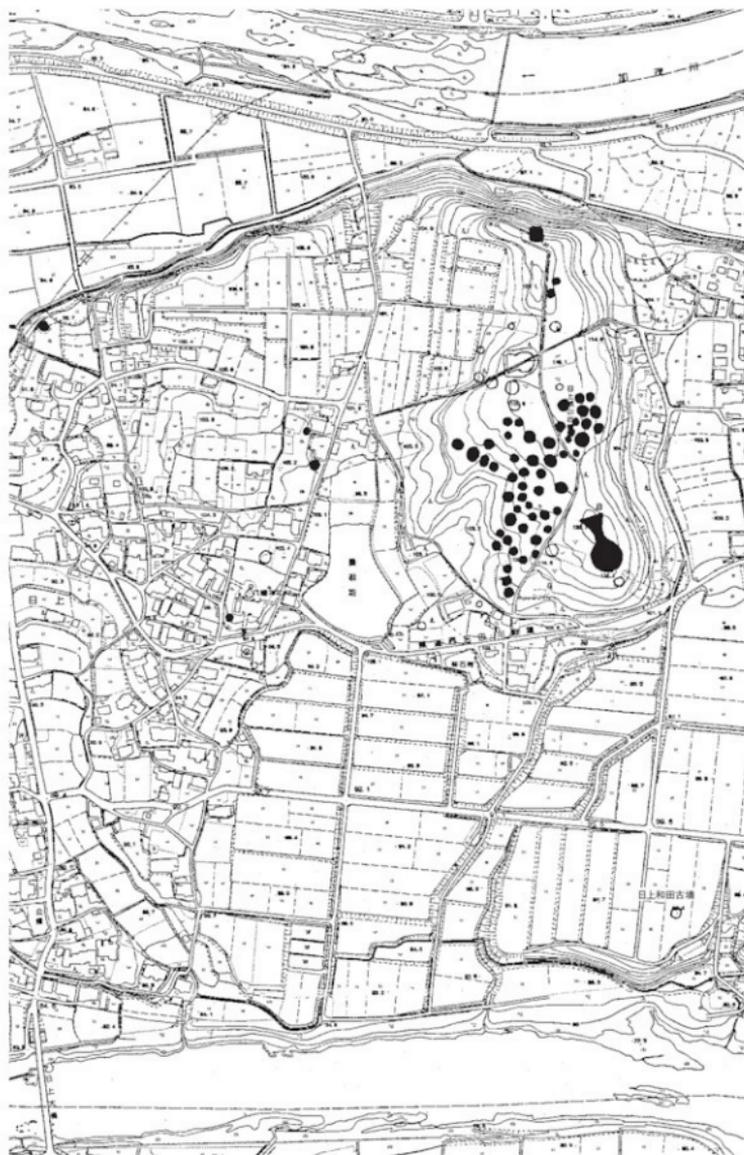
また、本丘陵の西側は溝造池の谷部をはさみ、比較的なだらかな低丘陵が続いている。この部分にも現在古墳がいくつか点在しており、この辺りが早くから開けて開墾されている事を勘案すると、この西側にもかなりの規模の古墳群が存在していた可能性は大きい。現在、県指定となっているのは、東側丘陵のみで、西側に点在する古墳群については、指定からはずれているが、岡山県遺跡地図では西側も同一の古墳群として取り扱っている。このため、古墳の番号は両者で通し番号となっている。

東側丘陵部の標高は109～123mを測り、周辺平野部との比高差はおよそ13～27mを測る。なお西側の低丘陵部の最高所は106mしかなく、東丘陵と比べるとかなり低いなだらかな地形である。

（小郷）

## 2. 周辺の遺跡（第3図）

古墳群の存在する丘陵の南端には前期の前方後円墳である日上天王山古墳（全長56.9m、県指定、註1）が存在する。本古墳群の造営の契機はこの古墳が始まりであり、その後本古墳群が形成されていくが、その中心は中期末から後期前半である。この天王山古墳に続く前方後円墳は、加茂川左岸の近長四ツ塚2号墳（全長44.5m、市指定、註2）、右岸の正仙塚古墳（全長55.5m、市指定、註3）があり、前者は方墳1基、円墳2基と群をなす。後者は長持形石棺が埋葬施設で、鏡2面、玉類、鉄器などの出土が



第2図 日上山古墳群位置図 (S=1:5000)

知られている。

中期古墳では帆立貝形の井口車塚古墳（全長35.5m、市指定、註4）、円墳の橋本塚1号墳（直径30m、註5）、飯塚古墳（直径35m、市指定、註6）があり、径30mを超える円墳や帆立貝の古墳が加茂川を対峙して築かれている。埴輪を伴い、埋葬施設は木棺であるものが多い。調査された橋本塚1号墳は鉄剣、鉄鎌などの鉄器類が豊富に副葬されている。この橋本塚1号墳の近くには10m程の円・方墳からなる押入兼田古墳群（註7）があり、須恵器を伴わない低墳丘の古墳である。後半になると須恵器を副葬する古墳群が見られるようになる。方墳の西吉田北1号墳（一辺11m、註8）、一貫西3号墳（一辺8m、註9）があり、鍛冶具や初期の馬具などを副葬する低墳丘の方墳である。中期末から後期初めにかけて古墳群の形態が大きく変化する。円墳志向になり、群をなし墳丘が高くなる。須恵器以外に鉄器や玉類など多くの副葬品が見られるようになる。本古墳群や長畝山古墳群（註10）、長畝山北古墳群（註11）などがそれである。これら古墳群の中には埴輪が見られるものもあるが、本古墳群以外は少数派のようである。

後期の前半では、河边上原古墳群（註12）、大畑古墳群（註13）、小原古墳群（註14）、六ツ塚古墳群（註15）、日上和田古墳（註16）などがあり、礎石、木棺直葬や箱式石棺などが埋葬施設で、須恵器、鉄器、馬具、玉類など副葬品が比較的豊富である。この中で河边上原1号墳、六ツ塚1・5号墳、日上和田古墳のみ埴輪を伴う。

後半になると、横穴式石室をもつ古墳が見られるようになる。初期のものは見られないが、陶棺を



- |              |            |            |            |              |
|--------------|------------|------------|------------|--------------|
| 1 日上畝山古墳群    | 2 日上天王山古墳  | 3 押入兼田遺跡   | 4 狐塚遺跡     | 5 押入西1号墳     |
| 6 川崎六ツ塚古墳群   | 7 玉琳大塚古墳   | 8 兼田丸山古墳   | 9 天神原遺跡    | 10 井口車塚古墳    |
| 11 河边上原古墳群   | 12 橋本塚1号墳  | 13 能満寺古墳群  | 14 国分寺飯塚古墳 | 15 河辺小学校裏古墳群 |
| 16 長畝山古墳群    | 17 長畝山北古墳群 | 18 西吉田北1号墳 | 19 美作国分寺跡  | 20 美作国分尼寺跡   |
| 21 押入飯網神社古墳群 |            |            |            |              |

第3図 日上畝山古墳群と周辺主要遺跡（S=1：25,000）

伴うものが、クズレ塚古墳(註17)、的場古墳群(註18)、能満寺古墳群(註19)などに見られる。これら陶棺の多くは土師質亀甲形であるが、中には須恵質家形のものもが国分寺周辺で出土している(註20)。

本古墳群の東0.8kmには史跡美作国分寺跡(註21)があり、方2町の寺域で主要建物の伽藍配置が判明している。近くには国分尼寺跡(註22)もあるが、伽藍配置など詳細は不明である。国府跡(註23)は加茂川を渡った北西4kmに存在し、中心の建物配置などが判明している。この事からこの国分寺周辺を通り国府に至るルートが復元されており(註24)、古代の道と推測される。この道沿いには倉庫群や製鉄関連の遺構からなる一貫西道跡(註25)がある。

中世から近世の遺跡では林田池ノ内遺跡(註26)があり、中世の集落と近世の粘土採掘遺跡である。近世になり、森忠正が築城する際、本古墳群の西側低丘陵部が候補地になった経緯もある。お城は結局吉井川北岸の鶴山に築かれる。明治初期に城の建物はすべて取り壊され現存はしないが、築城400年として平成16年度に備中櫓が復元され当時をしのぶ事ができる。

(小郷)

- (註1) 近藤義徳1997「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会
- (註2) 小郷利幸1995「近長四ツ塚古墳群群丘測量調査報告」『年報津山弥生の里第2号』津山弥生の里文化財センター
- (註3) 安川豊史・坂本心平1996「正仙塚古墳測量調査報告」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター
- (註4) 小郷利幸1994「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会
- (註5) 小郷利幸2003「橋本塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第73集』津山市教育委員会
- (註6) 津山市教育委員会1983『津山の文化財』
- (註7) 中山俊紀ほか2000「押入兼田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第69集』津山市教育委員会
- (註8) 坂本心平・行田裕美1997「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』津山市教育委員会
- (註9) 行田裕美1990「一貫西道跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会
- (註10) a今井堯1972「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻原始・古代』津山市史編さん委員会、b坂本心平1996「長畝山2号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター
- (註11) 行田裕美・木村祐子1992「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会、行田裕美・小郷利幸1996「長畝山北11号墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集』津山市教育委員会
- (註12) 小郷利幸1994「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会
- (註13) 行田裕美ほか1993「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集』津山市教育委員会
- (註14) 木村祐子ほか1991「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会
- (註15) 河本清1986「六ツ塚古墳群」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会
- (註16) 行田裕美1981「日上和田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集』津山市教育委員会、行田裕美1996「日上和田古墳」増補『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター
- (註17) 行田裕美・小郷利幸1990「クズレ塚古墳・崩レ塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会
- (註18) 安川豊史ほか2001「的場古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集』津山市教育委員会
- (註19) 註10a
- (註20) 国分寺跡、津山郷土博物館で展示
- (註21) 漆哲夫ほか1980「美作国分寺跡発掘調査報告」津山市教育委員会、平岡正宏・小郷利幸2002「美作国分寺跡→塔跡発掘調査報告書一」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第72集』津山市教育委員会
- (註22) 漆哲夫1983「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集』津山市教育委員会
- (註23) 安川豊史1994「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集』津山市教育委員会など
- (註24) 中村太一1990「山陽道美作支路の復元的研究」『歴史地理学第150号』歴史地理学会
- (註25) 註9
- (註26) 小郷利幸2005「林田池ノ内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第75集』津山市教育委員会

## II. 調査の経過

### 1. 過去の調査遍歴（従来の知見）

本古墳群の存在は古くから知られており、調査・研究などがおこなわれている。これらについてはすでに報告されている（註1）が、新しい知見とともに再度経過を述べる。

最も古い報告は、明治5（1872）年の北条縣による勸農所設置に伴う開拓の際に古墳が調査され、刀剣、鉄鏃、水晶玉、鏡（径5寸）、金環、多数の陶器（須恵器）などの遺物が多数出土した事で、これは現地にある「古冢」と言う碑に記されている（註2）。その次は、明治33（1900）年に秋久秀二郎によって報告されている（註3）。それによると、畝山には大小五十余個の古墳があり、大塚（天王山古墳）が其の中の最大であるとする。明治18・19（1885・1886）年頃古墳群の西方の畑から2体の人骨を納めた箱式石棺が発掘され、鏡（径5寸）1面、短刀1、管玉、ガラス小玉が出土したという。明治23（1890）年から翌年にかけて4基の古墳が発掘され、竪穴式石槨等の埋葬施設から多数の陶器（須恵器）、ガラス小玉、金環、管玉、各種鉄器を発見している。この報告で彼は「古冢」碑についても触れている。

昭和5年に刊行された地元の勝田郡河辺尋常高等小学校郷土誌（註4）には「塚」という項で「畝山に存するもの其の数最も多く約三四十を算す」とある。また同年に刊行された『岡山県通史上巻』（註5）には「畝山古墳群直径五間乃至十間の円墳三十七を現存す」とあり、古墳の具体的な数に触れている。昭和37（1962）年には、日上池（構造池）東北で開墾中に須恵器が出土し調査されている（註6）。径7m程の円墳、木棺が埋葬施設で出土遺物は土師器と須恵器がある。古墳の位置は明瞭でないが、すでに消滅している古墳の一つである。また、教育委員会では本古墳群を保存が要望される重要な古墳群とし一覧表を作成している（註7）。それによると60基の古墳が存在する事になっている。

その後、本丘陵一帯を地下げし水田化する工事が進行したものの、工事は中止となり、墳丘のある古墳は残される事になり、昭和42（1967）年8月から10月にかけて墳丘の存在しない前方後円墳1基、円墳3基などが応急的に調査された（註8）。これら古墳は先の北条縣の開拓により墳丘はすべて削平されていたが、周溝部分が良好に残存していた。この周溝内からは埴輪、須恵器など多くの遺物が出土している。確認された古墳は50番代の番号がつけられている。これらについては、今回通し番号で改めているので、旧を頭につけている。以下これら古墳の当時の概要を述べる。

旧50号墳（現57号墳、註9） 直径138mの円墳で、周溝の幅は2～3m、葺石をもつ。円筒埴輪、土師器、須恵器が出土した。須恵器には子持高坏、大小の甕、坏、高坏、壺などが含まれる。

旧51号墳（現58号墳、註10） 前方後円墳で全長32～34m、後円径21m、前方部幅16.5～17m。盾形周溝を持ち、後円部の周溝幅3m、前方部幅2～3m、くびれ部幅6～7m、深さ約3mを測る。出土遺物の内、変形五獣鏡、装身具（こはく製勾玉1、小玉約10）、鉄鏃、馬具（鈎具、鉄地金剛貼F字形鏡板）、須恵器（坏、高坏、甕、碗他）、土師器は埋葬施設に由来するものと考えられた。その他、器財埴輪（衣蓋、盾等）、円筒埴輪、須恵器大甕、器台他がある。葺石をもち、埋葬施設は割石積みの竪穴式石槨と推定されている。

旧52号墳（現59号墳） 直径14m弱の円墳で、幅2～3mの周溝、葺石をもつ。形象埴輪（人物2、不明）、円筒埴輪（須恵質を含む）、須恵器（坏、高坏、子持高坏、器台、大甕、壺他）が出土した。

旧53号墳（現60号墳）直径13～14mの円墳で、葺石をもつ。円筒埴輪、須恵器大甕が出土した。

さらに研究の分野では今井亮・波辺健治が古墳群の南端にあったとされる高祖神社裏古墳出土の須恵器を古式須恵器として紹介した（註11）。今井亮・近藤義郎は「群集墳の盛行」（註12）で本古墳群を紹介し、古墳群の形成時期を5世紀後半から6世紀と指摘した。また、今井亮は「津山市史第一巻」（註13）の中で、「もと六十数基の古墳があったが、現存するものは四十余基である。」とし、先の削平された前方後円墳についても触れ、古墳群の時期は5世紀後半から末葉とした。川西幸幸は「円筒埴輪総論」（註14）で、旧52号墳、旧51号墳出土の埴輪を検討し、それぞれを美作Ⅳ期、Ⅴ期に位置づけた。その他、高祖神社付近の畑で採集された須恵器が京都外国語大学考古学研究会によって報告されている（註15）。また地元地権者から敷地内で出土した須恵器、鉄器などが寄贈された。その中には須恵器の埴形甕が含まれている（註16）。また、明治32年に東京国立博物館に寄贈されている須恵器もあり報告されている（註17）。

本古墳群については、以上のように県下でも有数の規模の古墳群である事、埴輪、須恵器などの良好な出土遺物が古くから知られ、調査、研究の対象となっていたが、測量図など基礎資料がないため実際の古墳の数は定か定かなく、埋葬施設の構造、時期などについても明瞭ではなかった。そのため、平成7年から9年度に国庫補助事業（遺跡詳細分布調査）として測量調査、確認調査が実施された。測量調査の結果、現存する古墳は円・方墳56基と確認され、4基の古墳（1・6・14・35号墳）が調査された。調査の結果、時期は4世紀後半に遡るもの（1号墳）も見られ、須恵器を伴わない5世紀代（14号墳）、須恵器を伴う6世紀前半頃のもの（6・35号墳）がある事が判明し、古墳群の形成が前期の日上天王山古墳築造後からおこなわれている事、須恵器を伴わないもの、伴うものがある事などが判明した（註18）。

その後、平成12年3月には南端にある日上天王山古墳とあわせて岡山県指定の史跡（日上天王山古墳と日上畝山古墳群）となった。これを受け平成13年度からは、古墳群の保存目的で、さらに詳細な分布状況を得るため、墳丘の存在しない部分を中心に確認調査を実施した。現在天王山古墳の南側と3・4号墳間の広い範囲には墳丘は見られない。この内後者は先述した明治5年の開墾部分であり、この部分については昭和42年に前方後円墳や円墳が確認されてはいるが、古墳の位置を示す正確な図面類が現存しない。このためそれらの再確認と古墳の点在する西側丘陵部の調査もあわせておこなった。調査は国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等）として、平成17年度まで確認調査をおこない、平成18年度に本報告書を作成した。

（小郷）

（註1）安川豊史1998「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集』津山市教育委員会

（註2）「古家」の碑文は次のとおりである。「嗚呼莫知此爲誰墓也 墓在北條縣管内美作州勝勝郡日上邑矣 明治五年春 縣發役夫 開拓日上邑林丘之地 堀一巨松根下 有墓穴 枯骨僅存而其餘所藏物件佩刀數口 矢鏃數十 青磁零片 水晶穿孔者二十餘顆 鏡徑五寸者一面 小金銀三 鏡連環一 陶器形狀各異者數十 但其形質與毀損朽壞莫有完者 想斯人士豪右族顯榮於當時者耳 然而歷世之久 其姓字事蹟泯滅不傳而無復舊記此碑可以致證 豈不傷哉 於是縣爲敬其遺骨及器物 畫實之匣 極理如故 更建石勒古家二字 以表之 欲使後之人勿再發之也 明治六年十二月 赤松元調并書」

尚、碑については、昭和42年の古墳調査時に内部が調査された。その際棺の箱の中に鉄器類のみ現存しており、現在当センターでその一部を保管している。また、この碑が台風の倒木により一部破壊を受けたため、解体して積み直した。その際内部を確認したが、棺の箱はすでに朽ち果てていて遺物は見られなかつた。碑の解体の際に碑を撤去した石積みの上中央付近には「寛永通宝」が1枚置かれていた。まじない的なものか。

（註3）秋久秀二郎1900「岡山縣下勝田郡國分寺附近古墳探検の記」『考古第1編第6號』

（註4）勝田郡河辺尋常高等小学校1930『郷土誌』

- (註5) 永山卯三郎1930『岡山県通史上巻』岡山県通史刊行会(1962年復刻)
- (註6) 今井亮「津山市日上池東北古墳」〔1961・62年度分津山市文化財調査報告第2集〕津山市教育委員会
- (註7) 「六ツ塚古墳群・日上畝山古墳群」〔津山市文化財調査略報No.4〕津山市教育委員会
- (註8) 調査担当の渡辺健治氏にご教示を得た。古墳の記述は、渡辺健治「日上畝山北古墳群の問題点」による。
- (註9) 旧50号墳(57号墳)は、今回の調査でその位置を確認する事ができなかった。調査担当者によると、周溝はほんのわずかのくぼみであったとの事、このためトレンチが周溝からはずれていたか、すでに痕跡すら存在しない可能性が大きい。
- (註10) 旧51号墳(58号墳)は、津山市史では80号墳と呼ばれている。その記述によれば、鏡、直刀、玉、鉄鏝、鉄斧、冢・盾・きぬがさ・人物埴輪が出土したとある。註13文献参照
- (註11) 今井亮・渡辺健治1957『美作国河辺・高祖神社裏古墳出土の古式須恵器について』〔貝塚第71号〕
- (註12) 今井亮・近藤義郎1970『群集墳の盛行』『古代の日本第4巻中国・四国』角川書店
- (註13) 今井亮1972『原始社会から古代国家の成立へ』〔津山市史第1巻原始・古代〕津山市史編さん委員会
- (註14) 川西宏幸1978『円筒埴輪総論』〔考古学雑誌第64巻第2号〕日本考古学会
- (註15) 京都外国語大学考古学研究同好会1992『日上畝山古墳群表採遺物報告書』
- (註16) 小郷利幸2001『日上畝山古墳群出土の埴形甕』〔年報津山弥生の里第8号〕津山弥生の里文化財センター
- (註17) 中村浩ほか1998『東京国立博物館蔵須恵器集成Ⅲ(西日本篇)』便利堂
- (註18) 註1

## 2. 調査経過

### (1) 1次調査(平成13年度)

平成13年6月4日から確認調査を開始した。調査地点は日上天王山古墳の南側と古墳群北側の畑部分である。トレンチは11箇所(T1-1~11)あり、天王山古墳墳丘外の排水溝によって破壊されている箱式石棺2箇所も調査をおこなった。調査箇所のほとんどが背丈以上の雑木が生えていたため、まず草刈をおこないトレンチ場所の確保からおこなった。人力で掘り下げトレンチ2~3(T1-2~3)、7(T1-7)の2箇所です新たに2基の古墳(64・65号墳)を確認した。埋め戻しは人力と重機によっておこない、調査は8月9日に終了した。調査面積は約300㎡である。

### (2) 2次調査(平成14年度)

平成14年5月27日から確認調査を開始した。調査地点は古墳群北側の昭和42年に前方後円墳墳を確認した部分と1次調査の補足部分である。トレンチは14箇所(T2-1~T2-14)である。前方後円墳部分については、旧調査時の担当者から聞き取り調査をおこない、これをもとにトレンチの配置を考えた。しかし、現地在植林された場所のためトレンチの方向や幅が思うように設定できなかった。たまたま最初のトレンチ(T2-3)で周溝の肩をあてたもののこのトレンチが周溝の中心部分にあっていたため、反対側の肩を検出することができず、さらに周溝部分の底に別遺構がありその部分の深さがかなりあったため、調査にかなりの時間がかかった。その後は前方部の埴輪部分、くびれ部分などを確認できた。このため結果的にトレンチ数が多くなったが全長、周溝の構造などがほぼ確認できた。周溝は場所によって深さが異なるようである。また、埴輪などの出土遺物もかなりの量あった。南側の昨年度の続き部分で設定したトレンチ(T2-2)では北端で周溝を確認した。これは昨年度確認した古墳(65号墳)に伴うものである。なお7月21日に現地説明会(参加60名)を開催した。埋め戻しは人力と重機によっておこない、調査は8月9日に終了した。調査面積は約160㎡である。

### (3) 3次調査(平成15年度)

平成15年10月14日から確認調査を開始した。調査地点は旧調査時に円墳を確認した部分周辺と「古家」碑南側と1・2次調査で確認した古墳の補足調査である。トレンチは16箇所(T3-1~T3-16)である。旧調査時の円墳2基(59・60号墳)と新たに円墳3基(66~68号墳)を確認した。特に「古家」碑の南側では、古墳の周溝が調査区外に達する可能性がでてきたため、5次調査で確認する事とした。1次調査の補足(T3-16)では古墳(64号墳)の広がりは見られなかった。2次調査の補足(T3-9・10)では前方後円墳の後円部北西側と埋葬施設推定部分に設定した。前者では周溝外端が確認でき、後者では埋葬施設の痕跡は見られなかった。また、平成16年1月10日に現地説明会(参加90名)を開催した。埋め戻しは人力と重機によっておこない、調査は1月16日に終了した。調査面積は約230㎡である。

### (4) 4次調査(平成16年度)

平成16年6月16日から確認調査を開始した。調査地点は古墳群の存在する東側丘陵ではなく西側の八幡神社などが存在する比較的広い範囲の低丘陵部分である。トレンチは10箇所(T4-1~T4-10)で、主に点在する古墳部分の調査である。八幡神社北側の畑では、かつて古墳が複数(3基)存在していたといった証言があったが、畑のためトレンチ位置、規模等に制約があり、かろうじて古墳1基(72号墳)の一部を確認したにすぎない。ただ東側は土取りのため地下がかなり改変されているようで

あり周溝などは存在しない。残丘のある71号墳ではT4-5-7で周溝を確認し、墳丘の存在する62号墳では墳端の一部を確認した(T4-8)。残丘の63号墳では、周溝は確認されなかった(T4-9・10)。古墳以外では古墳時代の住居跡や建物跡(T4-3・4)などを確認した。埋め戻しは人力と重機によっておこない、調査は7月28日に終了した。調査面積は約107㎡である。

#### (5) 5次調査(平成17年度)

平成17年11月1日から確認調査を開始した。調査地点は丘陵の北側での補足調査である。トレンチは10箇所(T5-1～T5-10)である。トレンチ2(T5-2)では3次調査時に新たに確認した古墳(68号墳)の周溝を確認した。周溝の幅は前回の調査のものより狭くて浅い。トレンチ4・5(T5-4・5)でも新たに円墳(70号墳)を確認した。トレンチ7(T5-7)の東端でも周溝を確認したが、3次調査で確認した67号墳に近接するもの、別の古墳に伴う可能性があることから、69号墳とした。ただ、一部分の調査のため67・69号墳が例えば前方後円墳になる可能性も捨てきれない。これについては今後の課題である。埋め戻しは人力と重機によっておこない、調査は平成18年2月6日に終了した。調査面積183㎡である。

今回の一連の調査で墳丘の存在しない古墳11基を確認した。この中には昭和42年確認分も含まれる。内訳は前方後円墳1基、円墳・方墳10基である。これら古墳は平成7年の測量調査時に確認した56基の古墳から続き番号をつけている。まず、続きは今回再確認した前方後円墳や円墳を57～60号墳(57号墳は再確認できず)とし、その続きは4次調査をおこなった西側丘陵部分の墳丘が存在するもので61～63号墳とし、64号墳からは東側丘陵で調査順に70号墳とした。なお、西側丘陵で新たに確認した古墳は最後の71・72号墳とした。よって本古墳群の現在までに確認できた総数は72基である。なお前述のように確認できていないすでに消滅している古墳が多数ある。また前方後円墳である58号墳の続きの西側は現在水田として整備されているが、この部分に複数の古墳があったという地元の証言もあり、これについては今回の調査では確認できていない。おそらくこれらをふまえると元々の古墳の総数は100基以上になるものと推測される。

平成18年度は遺物・図面の整理をおこない報告書を作成した。

(小郷)

### 3. 調査体制

確認調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

津山市教育委員会	教育長	松尾康義 (H 13 ~ 15 年度) 神崎博彦 (H 16 ~ 18 年度) 藤田長久 (H 18 年度)
	教育次長	森元弘之 (H 13 ~ 14 年度) 谷口 智 (H 15 年度) 兼田延昭 (H 16 ~ 18 年度) 田口順可 (H18 年度)
	文化課長	内藤正剛 (H 13 年度) 近藤恭介 (H 14・15 年度) 佐野綱由 (H 16 ~ 18 年度) 湊 哲夫 (H18 年度)
	文化財センター所長	中山俊紀
	次長	安川豊史 (H 13 ~ 16 年度) 行田裕美 (H 17 ~ 18 年度) 下山純正 (H18 年度)
	主任	小郷利幸 (調査担当 1 次~5 次)
	主事	豊島雪絵 (調査担当 1 次~2 次)

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、小島かおり、廣野好美、山田崇之、高橋規子が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。(敬省略)

稲垣精一、梶尾嘉明、加藤文平、木下益徳、坂手隆文、末沢敏男、鈴鹿順一、田外敦郎、谷口末男、蓬郷賢太郎、野口定男、藤沢淳一郎、光岡平八郎、森二三夫、森 幸男、山本 満  
なお、現地調査にあたっては地元地権者をはじめとする下記の方々のご協力をいただいた。(敬称略)

(地元地権者)

秋久俊量、伊藤文子、桐石一男、坂手梅子、坂手郁枝、坂手 均、坂手良豆、直原種子、直原政子、直原 純、鳥田秀次郎、鳥田洋治、新免勝敏、竹内昌子、立石輝雄、立石恭弘、立石菟子、立石 学、立石泰通、原田敏明、原田弘子、山本 浩

また、発掘調査から報告書作成にいたるまで下記の方々にお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。(敬省略)

井上裕一、太田博之、尾上元規、賀来孝代、北野 重、草原孝典、酒井将史、白石 純、澤田秀実、土居 徹、平井典子、平井泰男、松本和男、山内紀嗣、米澤雅美、渡辺健治、徐 賢珠

(小郷)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 1次調査（平成13年度）

1次調査は日上天王山古墳の南および西側に10箇所（T1-1～8、10、11）、日上畝山古墳群の古墳が群集する地点の北側に1箇所（T1-9）、トレンチを設定して実施した。調査面積は合計300㎡である。

##### （1）トレンチの概要

###### トレンチ1（T1-1、第6図）

T1-1は日上天王山古墳後部部の南斜面に設定した幅2m、長さ15mのトレンチである。表土を除去すると、斜面上部に石・礫を含む層（第2層）があり、斜面の下は茶褐色土の堆積がみられる。トレンチ中央に浅い窪みがみられるが、遺構ではないと思われる。また、トレンチ北端部で拳大の円礫を検出しており、日上天王山古墳の崩落した墓石である可能性が考えられるが、一部であるため断定はできない。遺物は出土しなかった。

###### トレンチ2（T1-2、第6図）

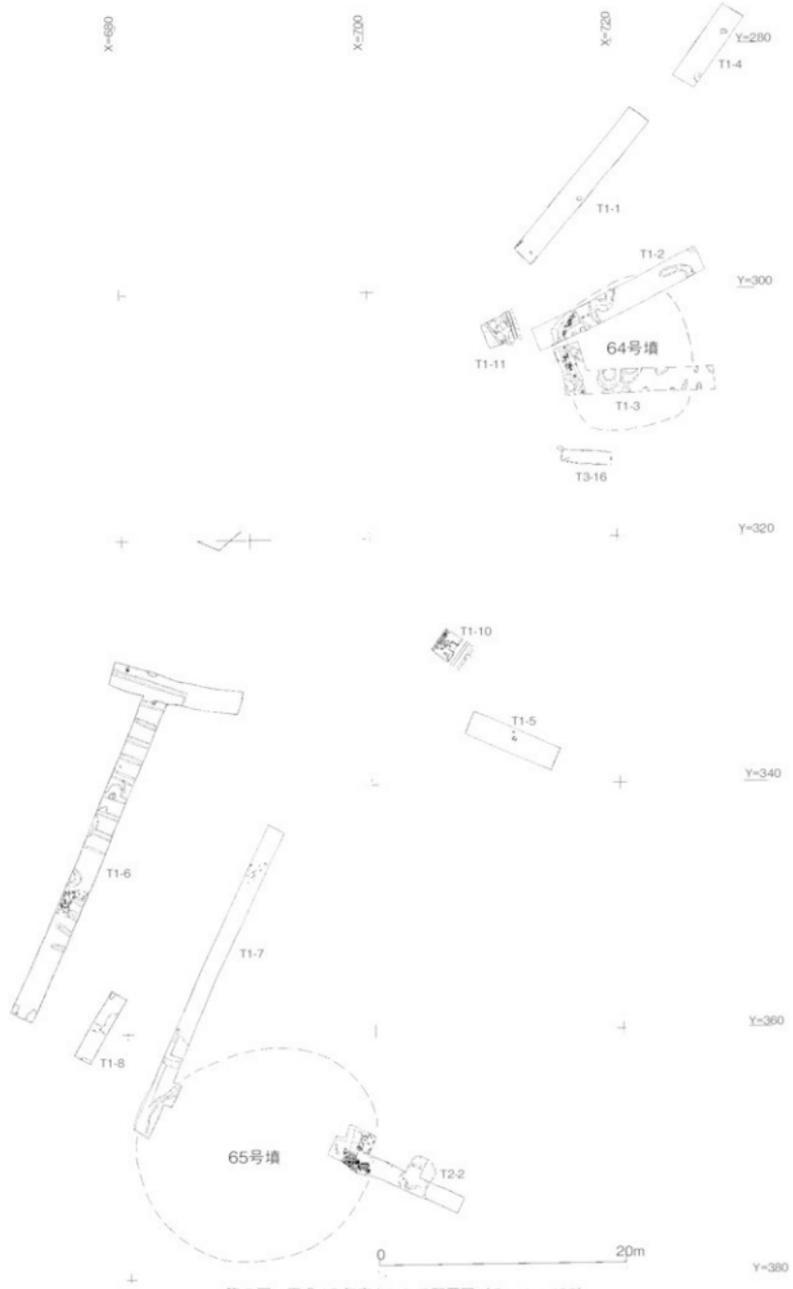
T1-1の西側に設定したトレンチで、幅2m、長さ15mである。表土の下は堆積土（第2層）であり、その下層（第5層）で幅約1mの溝を検出した。溝の内部には拳大の河原石が検出された。石は溝の底ではなく、やや浮いた状態でみられた。溝の埋土は明黄褐色土である。溝の南端は後世の攪乱により削平をうけている。トレンチの南端部でも円形および溝状の土坑を検出したが、すべて後世の耕作による攪乱と考えられる。出土遺物は弥生土器小片、須恵器小片、釘、陶磁器片などがあるが、すべて上層からの出土である。

###### トレンチ3（T1-3、第6図）

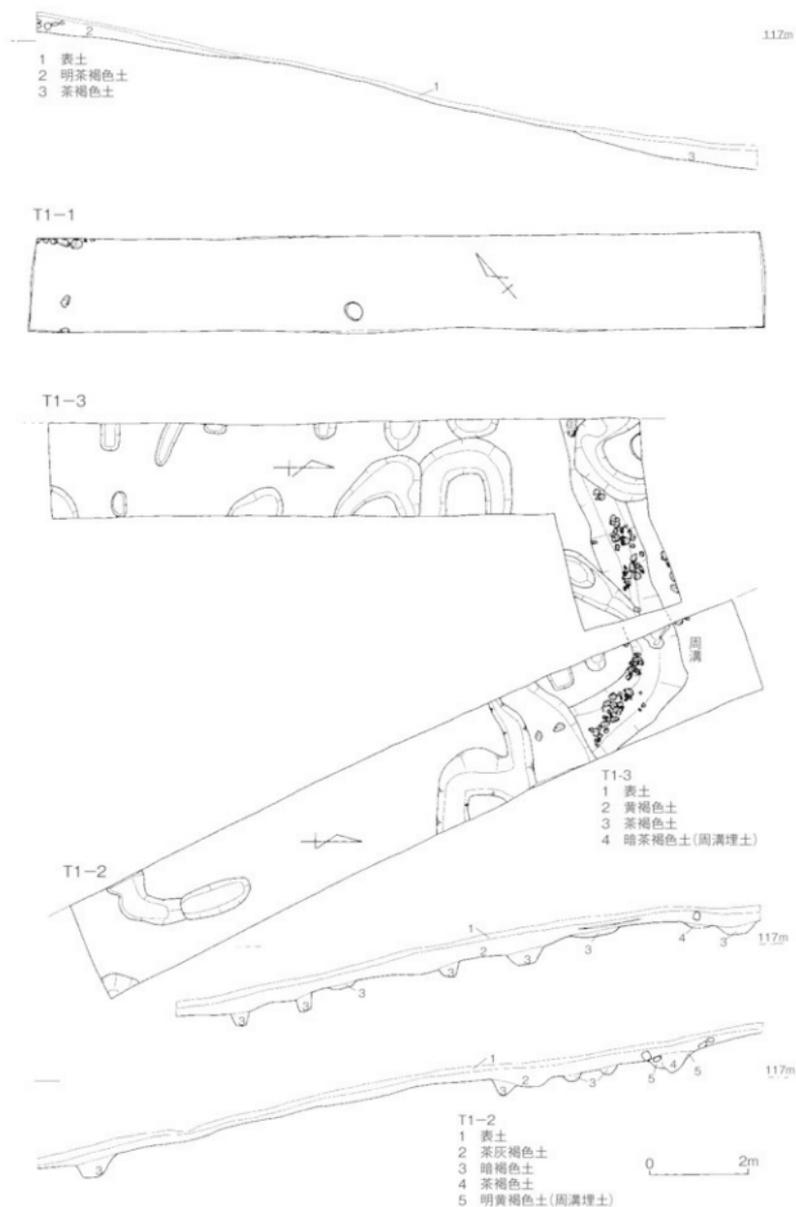
T1-2の西側に設定した幅2m、長さ12mのトレンチである。T1-2同様、表土の下は堆積土（第2層）であり、その下層（第4層）で溝を検出したため、T1-2の方向に25m拡張した。溝は幅約1mで、T1-2の検出状況と合わせると、東西5.6m、南北2.5mを測り、溝はトレンチの西側に延びる。T1-2同様、溝の内部には拳大の石が底からやや浮いた状態で検出された。埋土は暗茶褐色土である。トレンチの中央から南側は耕作によって削平を受けているため、溝の続きを検出することはできなかった。出土遺物は陶磁器片、釘などがあるが、すべて上層からの出土である。

T1-2およびT1-3で検出した溝は、その形状や埋土の状況から古墳の周溝と考えられるが、古墳に伴う遺物がみられず、南側の削平も著しいことから、正確な規模は不明である。また、周溝内に浮いた状態で検出された河原石はこの周溝に伴う古墳の墓石である可能性が考えられる。また、周溝外でトレンチ北端部からも同様の石が検出されており、これらの石は日上天王山古墳の墓石が転落したものである可能性が考えられる。

墳形については、検出した周溝の形状からは方墳と判断できるが、検出範囲が狭小であり、円墳である可能性も否定できない。検出した範囲から想定できる古墳の規模は一辺5m以上で、T1-3の約4m西側に位置するT3-16から溝の続きが検出されなかったことから、最大でも一辺10m以下のものと推定される。今回新たに発見された古墳は、日上畝山64号墳とする。



第5図 平成13年度トレンチ配置図 (S=1:400)



第6図 トレンチ1～3 (T1-1～3) 平面・土層図 (S=1:100)

トレンチ4 (T1-4、第7図)

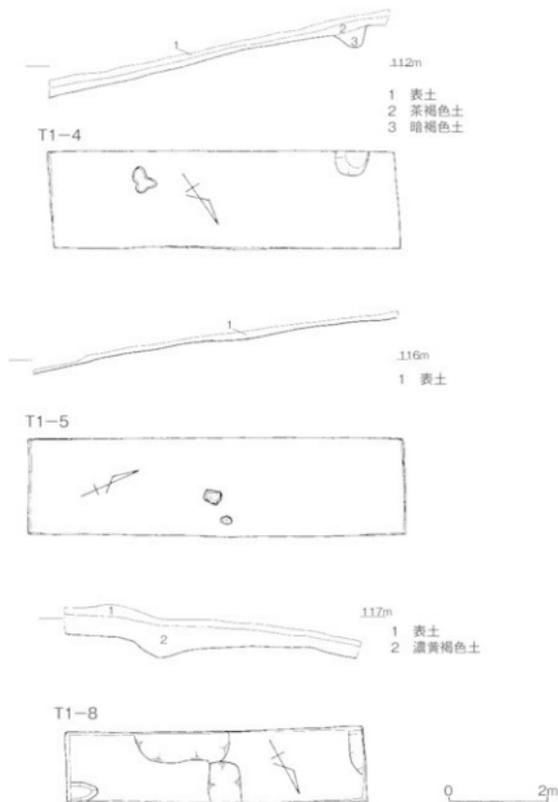
T1-1の南東側の旧耕作地に設定したトレンチで幅2m、長さ7mを測る。このトレンチの設定箇所はT1-1を設定したトレンチから1段低いところであり、その高低差は約1mである。トレンチ西側で円形の土坑が検出されたが、耕作による攪乱坑と考えられ、遺構、遺物などは検出されなかった。地山の状況からこの1段低い部分については大きく削平を受けていることが推測される。

トレンチ5 (T1-5、第7図)

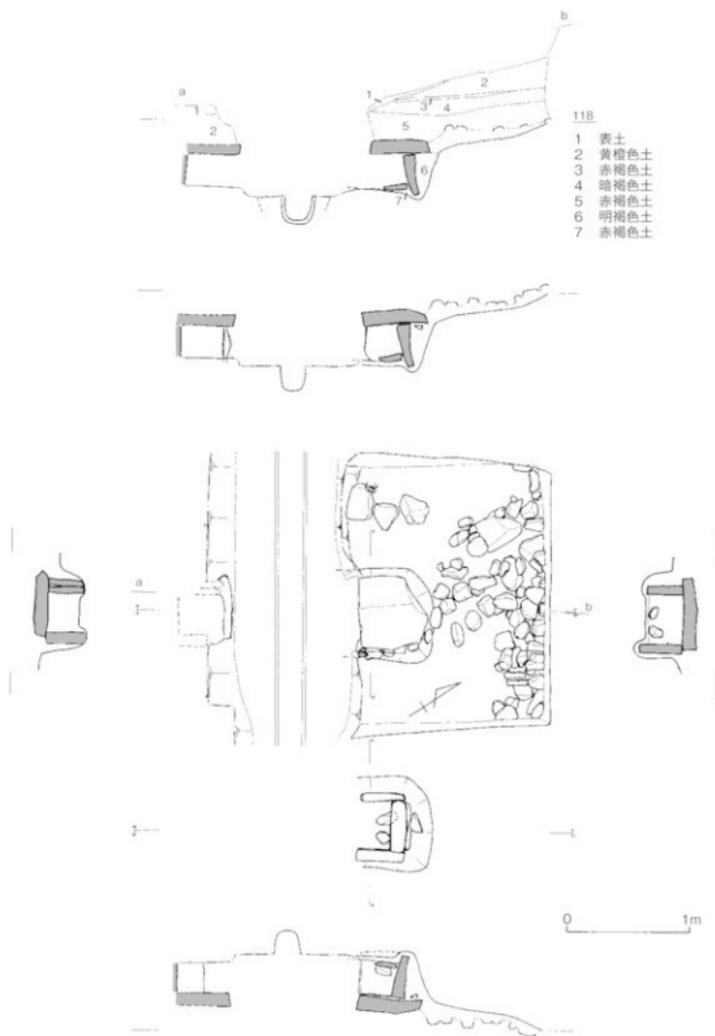
日上天王山古墳後内部の南西部に設定した幅2m、長さ75mのトレンチである。表土の下は地山であることから、この地点についても削平を受けているものと考えられる。遺構はなく、出土遺物は上層からの陶器片1点である。

トレンチ6 (T1-6、第8図)

日上天王山古墳くびれ部西側に設定したトレンチで、幅2m、長さ30m、東端の拡張部は幅2m、



第7図 トレンチ4・5・8 (T1-4・5・8) 平面・土層図 (S=1:100)



第9図 トレンチ10 (T1-10) 平面・土層図 (S=1:40)

長さ10.8mを測る。表土の下は赤褐色の造成土(第2層)があり、その下は地山である。遺構は検出されず、トレンチの東半分で畑の畦の痕跡が、西半分では木の根の痕跡がみられた。また、トレンチ東端及びトレンチ中央やや西よりのところで小石の集積がみられたが、遺物はなく、遺構ではないと考えられる。西端の最も低くなった部分で浅い土坑が2つあり、そのうちの1つからは弥生土器片と思われる土器小片が数点出土した。

#### トレンチ7(T1-7、第8図)

T6の南接する畑に設定した幅2m、長さ27mのトレンチである。表土の下は茶褐色土層(第2層)があり、この層を掘り下げると、地山が最も低くなる西端で溝を検出した。溝は幅0.5～0.7mを測り、弧を描いて南側に延びている。溝の埋土は黒褐色土で、北西部で0.1m、南東部で0.2m堆積しており、削平を受けた後わずかに残った部分が検出された。溝の埋土中からは須恵器(第11図4、5)が出土した。溝の形状などから、この溝は円墳の周溝の最下部と考えられる。この周溝によって新たに確認された円墳を日上畝山65号墳とする。

#### トレンチ8(T1-8、第7図)

T1-6とT1-7との間に設定したトレンチで、幅2m、長さ6mを測る。T1-6同様、表土の下は黄褐色の厚い造成土(第2層)がみられる。遺構は全くなく、遺物は西端から弥生土器の小片が1点出土したのみである。

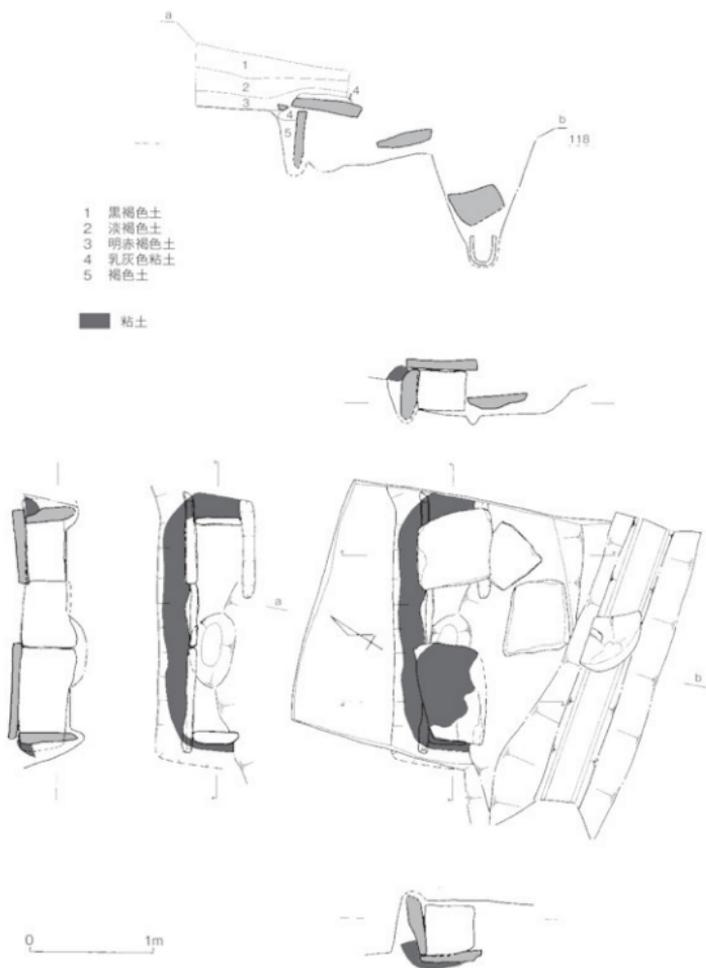
#### トレンチ9(T1-9、第8図)

日上畝山4号墳、5号墳のある丘陵の北側に造成された畑地に設定したトレンチで、幅2m、長さ19mを測る。近辺からは過去に須恵器片が多く採集されており、古墳の存在が推測されていた。耕作土の下は暗茶褐色土(第2層)、明茶褐色土層(第3層)が北から流れてきたような状態で堆積していた。地山直上の4層は、薄い黒褐色土層の堆積であるが、古墳の周溝等の遺構や遺物はみられなかった。また、トレンチ北部では直径約70cmの範囲で炭を含む焼土面を検出した。焼土面を断り割り観察すると、炭を多く含む黒褐色土が7cm程度堆積しており、黒褐色土中およびその付近から埴輪、土師器や須恵器片が出土した。出土土器の多くは小片であり、図示できたのは坏身1点(第11図3)、埴輪2点(同1・2)である。

#### トレンチ10(T1-10、箱式石棺1、第9図)

日上天王山古墳の後円部南西の墳端付近に位置する。古墳の周囲に掘られた後世の排水溝によって石棺は中央部分を削平されており、調査前は両小口付近が溝の断面に露出していた。石棺部分を掘削したところ、排水溝北東側では蓋石1枚、小口石1枚、両側石各1枚を確認した。排水溝を隔てた南西側については蓋石の検出が不可能であったため、石棺内部の土を取り除いたところ、蓋石1枚、小口石1枚の存在を確認した。側石は南東で1枚、北西で2枚みられる。北西の側石は2枚が重なった状態であった。石棺の内法は全長1.75m、幅は北東側で40cm、南西側で約35cm、床面から蓋石までの高さ25～30cmを測る。北東側の蓋石を取り除くと、小口に近い部分の床面上に枕石と思われる円礫が2個みられた。この石の存在から、埋葬頭位は北東であったと推測される。また、石棺の北東部では日上天王山古墳の墳丘から崩落した墓石と考えられる円礫が数多くみられた。石棺内およびその周辺部からも遺物は全く出土しなかった。

(豊島)



第10図 トレンチ11 (T1-11) 平面・土層図 (S=1:40)

### トレンチ 11 (T1-11、箱式石棺 2、第 10 図)

T1-2 の北側 2m に存在する箱式石棺部分のトレンチである。南側には排水溝がありおそらくこの溝が掘られた時に箱式石棺が確認され、石の一部がすではずされたものと推測され、調査前に石棺の内部がのぞける状況であった。このため、石棺の現状を確認することとした。調査区を設定し掘り下げると、天井石は 3 枚あったと思われるが東西 2 枚現存し中央の 1 枚はすでは取り除かれている。西側の天井石上面から北側掘り方部分には、粘土による充填が見られるが、東側の天井石上面には一切みられない。このためこの天井石は一度動かされている可能性がある。南側の側石はすべて取り除かれていて、東側には石を置いた際の掘り方が見られるが、他の箇所は大きく削られていて掘り方すら現存しない。北側の側石は完存し 3 枚で構成される。両小口石は完存する。内法で全長 1.7 m、東小口幅 0.4 m、西小口幅 0.4 m、高さ 0.3 ~ 0.4 m を測る。周囲には動かされた石が 2 枚見られる。出土遺物は皆無であるが、以前に人骨と鉄製短剣が出土したと言う。高、調査後は動かされている石を戻し、埋め戻した。

(小郷)

### (2) 出土遺物

#### a. 埴輪 (第 11 図 1・2)

T1-9 から出土した埴輪を 2 点図示している。いずれも遺構に伴うものではない。1・2とも土師質で 1 にはナナメ方向のタテハケが内外面に見られる。2 は突帯部分である。

(小郷)

#### b. 須恵器 (第 11 図 3・4)

出土遺物は少なく、図化できたのはわずかである。3 は T1-9 から出土した須恵器坏身である。口径 13.3 cm、器高 4.5 cm を測る。口縁の立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。4・5 は T1-7 の古墳周溝から出土した甕片である。外面には平行タタキが施され、内面には同心円の当て具痕が残る。

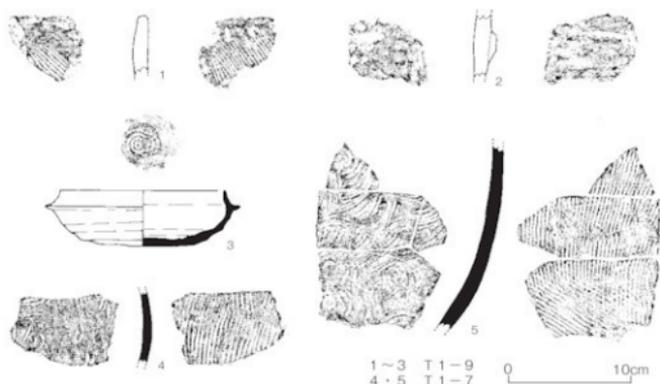
(豊島)

### (3) 小結

1 次調査では新たに 2 基の古墳を確認した。T1-2・3 で確認した 64 号墳は周溝の形状から方墳と推測される。日上畷山古墳群に存在する古墳のうち、方墳は古墳群の最も北に位置する 1 号墳のみである。1 号墳は埋葬施設として竅穴式石室と箱式石棺が採用されており、日上天王山古墳に類似した配置をとることから、1 号墳の築造時期は日上天王山古墳に近い古墳時代前期後半頃と考えられている (註 1)。これに対し 64 号墳は古墳群の中でも南端に位置し、日上天王山古墳のほぼ中軸線上にあたることから、日上天王山古墳を意識して築造されたものと考えられ、1 号墳よりも日上天王山古墳の築造時期に近い時期につくられたものであると推測される。しかし、墳丘や埋葬施設はすでに削平されており、時期を特定できる遺物も出土していないことから、詳細は不明である。

T1-7 で検出した 65 号墳は周溝の形態から円墳で須恵器を伴う。1 次調査では周溝の一部を検出したのみであるため、墳丘規模を明らかにすることはできなかったが、出土した須恵器からは、日上畷山古墳群形成の中心的な時期である 6 世紀初頭頃に築造されたものと考えられる。詳細については近接する T2-2 の調査結果と照らし合わせ、後述する。

T1-9 で出土した須恵器坏身は、近隣から流れてきたものである可能性が高いが、その際に注意されるのは、須恵器の時期である。この須恵器は、口縁の立ち上がりか内傾していることや、口縁端部に段をもたず、単に丸くおさめていることなどの特徴をもつことから、陶邑編年 (註 2) では TK 10 型式



第11図 出土遺物(埴輪、須恵器、S=1:4)

段階に相当する。この段階の須恵器をもつ古墳がT1-9周辺に存在していたとすれば、この古墳は古墳群の中で最も新しい段階に位置づけられよう。しかし1個体の出土であるため、ここでは可能性を指摘するにとどめておく。焼土面については、土師器片や須恵器片を含むことから、古墳群形成時期のものと同推測されるが、他の遺構を検出していないため詳細は不明である。

2基の箱式石棺はいずれも日上天王山古墳後門部の周辺で、箱式石棺1は後門部南西側、箱式石棺2は後門部南側のそれぞれ埴輪端付近に位置する。後世の掘削により副葬品などの詳細は不明であることから、埋葬時期についても明らかではないが、今回の調査によって、2基の箱式石棺はほぼ同規模のものであること、箱式石棺1には枕石が置かれていたこと、箱式石棺2は粘土で目張りが行われていたことなどがあらたに判明した。これまでに確認されているのは後世の溝の掘削により石棺の一部が露出していた2基であるが、これ以外にも日上天王山古墳周辺に埋葬施設が存在していた可能性を指摘しておきたい。

(豊島)

(註1) 安川豊史1998『日上畝山古墳群』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集』津山市教育委員会  
 (註2) 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

## 2. 2次調査（平成14年度）

2次調査は、古墳群の北東部を中心にトレンチを設定して実施した。トレンチ設定地点一帯は、1967年の調査によって前方後円墳の存在が確認されている地点で、今回の調査により古墳の規模、時期等を明らかにすることを主目的とした。前方後円墳周囲のトレンチは12箇所である。また、古墳の有無を確認するため1次調査によって新たに古墳が確認された古墳群の南端に1箇所、古墳群中心からやや北よりの丘陵上に1箇所それぞれ設定した。設定したトレンチは合計14箇所、調査面積は合計160㎡である。

### (1) トレンチの概要

#### トレンチ1（T2-1、第13図）

古墳群の中心からやや北側の丘陵上に設定したトレンチで、幅15m、長さ17.8mである。表土の下は地山であり、遺構・遺物は全くみられなかった。

#### トレンチ2（T2-2、第13図）

古墳群の南端部に位置するトレンチで、幅1.4～1.5m、長さ11.6mをはかる。トレンチ東側に存在する小高い盛土が古墳であるかを確認するために設定したところ、トレンチ北側の表土直下で溝を検出した。溝の埋土は暗茶褐色土で、溝の底部直上で河原石が多数みられたことから、検出した溝は古墳の周溝で、河原石は古墳の墳丘から崩落した葺石であると考えられる。溝の続きを確認するため、トレンチを東へ約15m拡張したところ、溝は北東から南西の方向にみられることが判明し、同様の石が検出された。南側での立ち上がりは削平のため不明瞭であるが、葺石の崩落状況から、溝の幅は推定1.8m、深さは北側で0.3～0.6mである。なお、トレンチの東壁を観察したところ、東側に存在する盛土は古墳ではないことが判明した。

このトレンチから畑を1枚隔てた北側にT1-7があり、ここでも古墳の周溝を検出している（第8図参照）。この周溝とT2-2で検出した周溝の位置関係から、2つの周溝は同じ古墳のもと考えられる。つまり、周溝はT1-7で検出した日上畝山65号墳のものであり、周溝の位置関係から復元される古墳は直径17～18m程度の円墳と推測される。埴輪はみられず、転落した葺石付近や周溝外のトレンチ埋土中から土師器の高坏、須恵器の甕など（第23図1～6）が出土した。

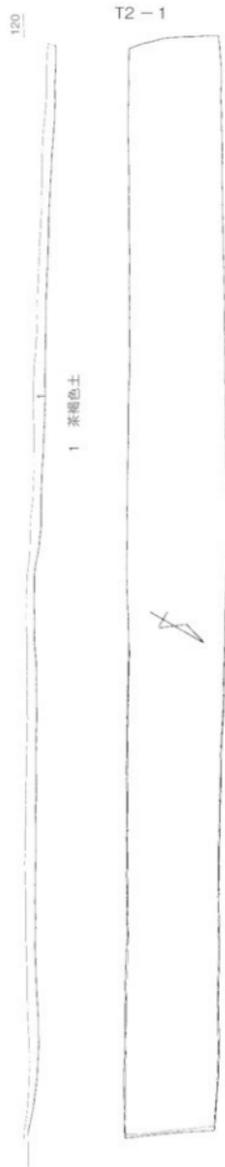
#### 日上畝山58号墳の調査

トレンチ3～14は古墳群の北側、丘陵の東斜面に位置する。この地点は昭和42年の調査によって、前方部を西にむけた前方後円墳が一基確認されている。古墳の墳丘は明治時代の造成によってすべて削平されており、周溝の一部が発掘されている。今回の調査では、前方後円墳の形状、規模、時期等の具体像を明らかにするため、過去の調査に基づいた古墳推定地周辺に合計12箇所のトレンチを設定した（第14図）。

なお、この前方後円墳は、これまでの古墳の続き番号を付して日上畝山58号墳とする。

#### トレンチ3（T2-3、第15図）

古墳推定地の東端部に設定したトレンチで、幅1m、長さ11.7mを測る。表土の下層（第2、3層）は明治時代に当該地を開墾した際のもので、最も深いところで1.2m堆積している。その下層で地山が東から西に向かって極端に落ちていることから、古墳の周溝の一部であることが判明した。周溝は最も深いところで地山との高低差が2.2mを測り、周溝の最も深い部分と推定されるトレンチ中心部は後世の掘削により攪乱を受けている。攪乱の規模は壁面の観察から長さ2.9m、深さ1.2m以上を測るが、



第13図 トレンチ1・2 (T2-1・2) 平面・土層図 (S=1:80)

擾乱部分での地山を検出していないため、さらに深いと考えられる。検出面の大きさや深さなどから、この擾乱坑は井戸を掘削したものである可能性が高い。擾乱坑よりも西側では地山の立ち上がり等は見られず、高低差もほとんどないことから、古墳の周溝端部から周溝内中心部にかけての部分であると推測される。周溝埋土である第6層及び7層からは多数の埴輪、須恵器が出土し、特にトレンチ西側に集中して見られた。

最初に設定したトレンチでは古墳の墳端を確認することができなかったため、トレンチに直交する方向で幅1m、長さ58mの拡張区をあたらに設定したところ、南端で地山の落ち込みを検出した。落ち込みはトレンチ中心部に向かって緩やかに下がり、北端で再び緩やかに上がりはじめることから、落ち込み部分は墳端であり、北側に向けて周溝が展開するものと考えられる。周溝埋土からは埴輪（第19図1～6）、須恵器（第23図7～11）が出土した。

#### トレンチ4（T2-4、第15図）

T2-3の拡張区から南へ2mの地点に設定した幅1m、長さ11.7mのトレンチである。トレンチの東端部で南西から北東に向けて地山が急激に落ち込んでいる状況が確認された。地山の高低差は約1.3mで、東に向かってさらに低くなっていることから、検出した落ち込みは後円部北東の墳端に近い部分であるとされる。落ち込みの埋土からは埴輪や須恵器の欠など（第23図12）が出土した。

#### トレンチ5（T2-5、第16図）

前方部の墳端の確認を目的として設定した幅1m、長さ6mのトレンチである。地山は東から西方向に緩やかに傾斜しており、表土直下でトレンチ中央部に幅1.2～1.9mの溝が検出された。溝は古墳の周溝であると考えられる。地山面での溝の深さは0.4mと浅く、周溝の外側における立ち上がりも底部から0.3mで、わずかに立ち上がりを見せる程度である。周溝の埋土からは少量ではあるが埴輪片が出土した。

#### トレンチ6（T2-6、第16図）

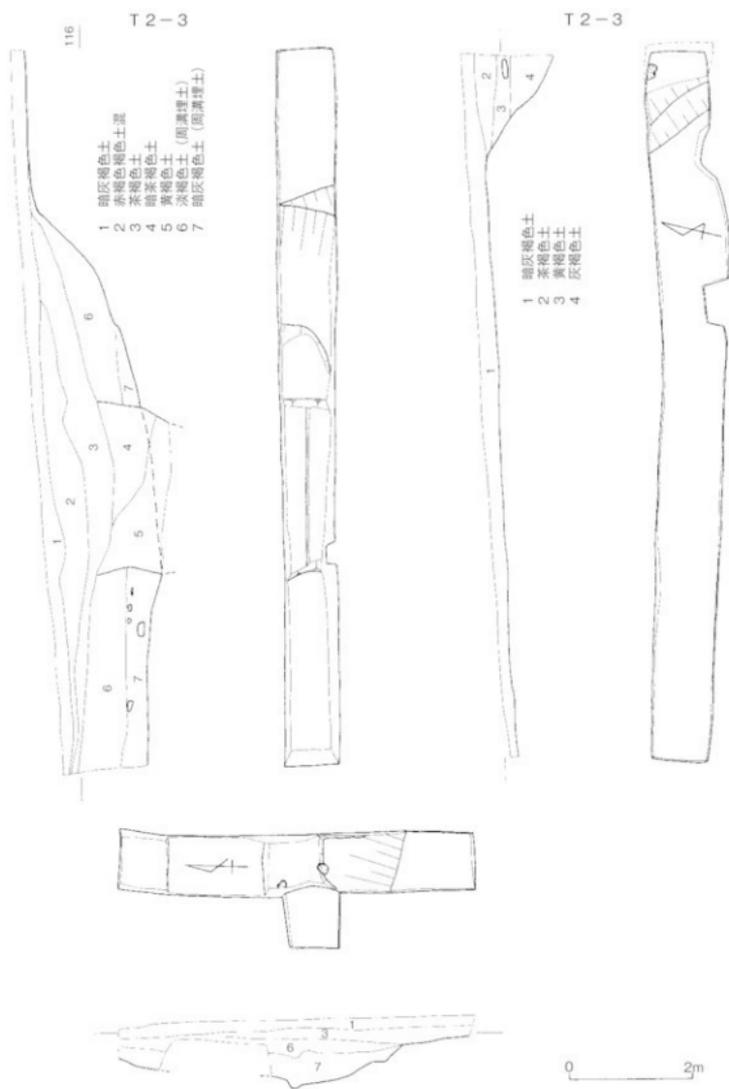
後円部の墳端を確認するために設定した幅1m、長さ5mのトレンチである。表土を取り除いたところ、幅26mの溝を検出した。溝は断面形が浅い皿状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで0.4mである。先述したT2-3、4との位置関係から、この溝は古墳の周溝と考えられる。周溝底部に近いレベルでは葺石と考えられる河原石が検出された。周溝埋土（第2層）からは埴輪（第19図7・8）、少量の須恵器が出土した。

#### トレンチ7（T2-7、第16図）

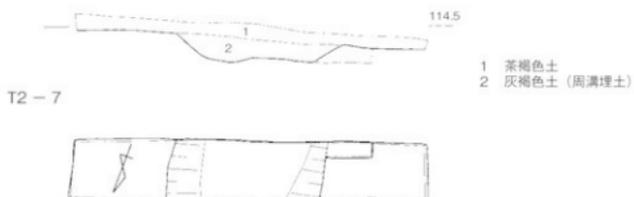
前方部の墳端の確認を目的とし、T2-5から南へ約6m離れた位置に設定した、幅1m、長さ5.7mを測るトレンチである。表土を取り除くと、T2-5同様、断面形が浅い皿状を呈する溝を検出した。T2-5との位置関係から、古墳の前方部の周溝にあたるものと考えられる。検出面での周溝の幅は2.5m、深さ0.6mを測る。周溝埋土からは埴輪が少量出土した。

#### トレンチ8（T2-8、第16図）

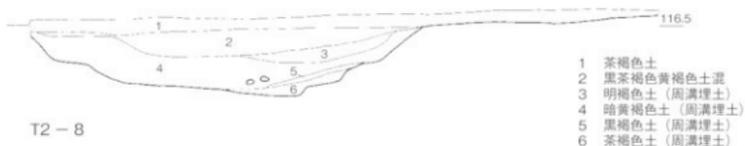
北側くびれ部付近の周溝の確認を目的として設定した。幅1m、長さ10.3mを測る。表土の下は明治時代の造成時のもので、その下層（第3層～6層）で古墳の周溝を検出した。溝は北側で1段、南側で2段の浅い段がみられ、検出面での幅は約5.4m、深さ1.1mを測る。溝は北東から南西方向に検出されたことから、後円部と北側くびれ部との間の周溝であると推測される。周溝の底部付近からは転落した葺石と思われる石が検出され、埋土からは埴輪（第20図9～14）、須恵器（第24図13～17）が出土した。



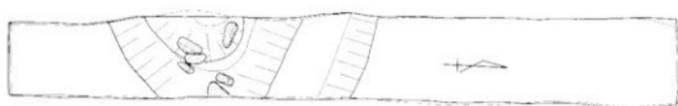
第15図 トレンチ3・4 (T2-3・4) 平面・土層図 (S=1:80)



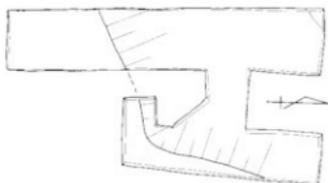
0 2m



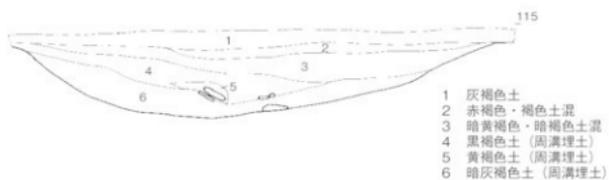
第16図 トレンチ5~8 (T2-5~8) 平面・土層図 (S=1:80)



T2-10



0 2m



T2-11



第17図 トレンチ9～11 (T2-9～11) 平面・土層図 (S=1:80)

#### トレンチ 9 (T2-9、第 17 図)

南側くびれ部付近の周溝の確認を目的として設定した、幅 1.3 m、長さ 10.8 m を測るトレンチである。トレンチ南側の表土直下で周溝と思われる溝を検出した。周溝は南側からみるとハの字状を呈し、周溝底部は後円部からくびれ部方向に向かって下がっている。検出面での幅 3.1 ~ 4.3 m、深さは後円部側で 0.2 m、くびれ部側で 0.6 m を測る。周溝埋土からは少量ではあるが埴輪、須恵器が出土した。

#### トレンチ 10 (T2-10、第 17 図)

先述した T2-8 で前方後円墳の後円部からくびれ部にかけての周溝を確認したため、そこから想定されるくびれ部の確認を目的として設定したトレンチである。幅 1 m、長さ 5 m を測る。表土の下は明治時代開墾時の土が堆積しており (第 2 ~ 4 層)、その下層 (第 5 層) で古墳の周溝と思われる落ち込みを検出した。落ち込みは南東から北西方向に緩やかに下がり、トレンチ北西端で平坦になることから、この部分が前方後円墳くびれ部の埴輪部分と推測される。これをさらに詳細に調べるため、東側に拡張トレンチを設定した。拡張部分は幅 0.8 m、長さ 3.2 m を測る。最初に設定したトレンチ同様、南東から北西方向の周溝の落ち込みが検出された。地山の最も高い部分は、最初のトレンチから直線的に続くが、南端で急激に北東に向かって折れ曲がっており、後円部北側の T2-8 につながっていることから、本トレンチが前方後円墳くびれ部に該当することはほぼ明らかであると思われる。遺物は周溝埋土から埴輪 (第 20 図 15) が出土した。

#### トレンチ 11 (T2-11、第 17 図)

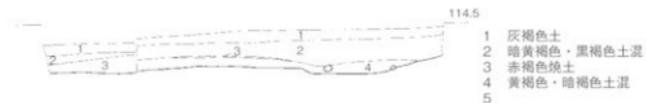
前方後円墳のくびれ部から前方部にいたる部分の周溝の確認を目的として設定したトレンチで、幅 1 m、長さ 8.1 m を測る。表土の下層には、明治時代の造成土と考えられる土の堆積がみられ、その下層 (第 4 層 ~ 6 層) で前方後円墳の周溝を検出した。周溝は検出面での幅 6.7 m、深さは最も深いところで約 1.2 m を測る。周溝底部、埴輪側にやや片寄った状態で古墳の葺石と思われる石が検出された。遺物は他のトレンチよりも多く、周溝底部付近で人物埴輪が出土したほか、多数の埴輪 (第 21 図 16 ~ 25)、須恵器 (第 25 図 18 ~ 19) が出土した。

#### トレンチ 12 (T2-12、第 18 図)

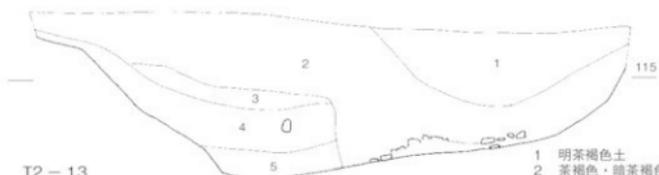
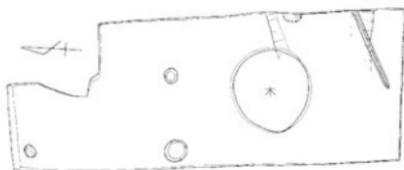
前方後円墳の前方部北側の周溝の確認を目的として設定したトレンチで、幅 2.5 m、長さ 5 m を測り、北側を幅 1.5 m、長さ 1.5 m 拡張している。T2-11 から続く前方部の周溝は、本トレンチではほとんど確認することができず、トレンチ南端でわずかに埴丘から周溝にいたる落ち込みを検出したのみである。遺物は、埴輪、須恵器が少量出土したのみである。

#### トレンチ 13 (T2-13、第 18 図)

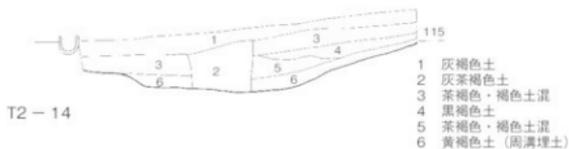
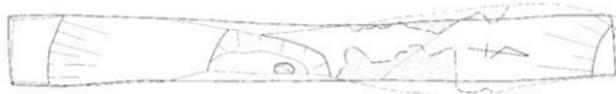
T2-9 の西側、前方後円墳の南側くびれ部の確認を目的として設定したトレンチで、幅 1 ~ 1.4 m、長さ 9.8 m を測る。トレンチの掘削直後から暗茶褐色の厚い埋土がみられ (第 2 層)、中から昭和のゴミなどが出土したことから、この地点は、1967 年の調査によりその一部が掘削されていたことが判明した。第 2 層の堆積状況からは、周溝のすべてを検出しておらず、埴丘側の一部の確認にとどめていたことが分かる。今回の調査では周溝外側の立ち上がり部分までを検出した。周溝は検出面で幅約 9 m、深さ約 2.2 m を測る。これは、調査トレンチで検出した周溝の中で最大である。埴丘側の立ち上がりは T2-9 でみられた埴丘側の周溝ラインと同じ方向であるため、前方後円墳南側のくびれ部は、本トレンチよりもわずかに西側であった可能性が高い。トレンチ北半部、埴丘側の周溝底部付近 (第 2 層の最下層) では、板状の割石が多数検出された。この石は葺石等に使用された石とは考えがたいことから、



T2-12



T2-13



T2-14



第18図 トレンチ12～14 (T2-12～14) 平面・土層図 (S=1:80)

埋葬施設に使用された石である可能性が考えられる。また、第2層の中からは、調査当時取り上げられなかった埴輪なども出土した。トレンチの南半部、古墳の周溝埋土が残る部分では、埴輪（第22図26～35）が多数出土し、須恵器もわずかではあるが出土した。

#### トレンチ14（T2-14、第18図）

前方後円墳の前方部南隅の周溝の確認を目的とし、T2-7で検出された前方部の埴輪ラインの延長線上に設定した。幅1.5m、長さ5.5mを測る。T2-5及びT2-7の周溝の検出状況から、前方部の周溝については浅いことが判明していたため、この地点についても同様であることが予想された。表土の下は明治時代のもと考えられる造成土がみられ（第3層）、その下層（第6層）で前方後円墳の周溝埋土を検出した。周溝の断面形は浅い皿状を呈し、墳丘側の立ち上がりはわずかである。前方部側面から前面に至る部分は、墳丘側の地山がわずかに前面に向かって角度を変えている状況はみられるが、明瞭なものではない。遺物は、周溝埋土から埴輪（第22図36・37）や須恵器（第25図25）が出土したほか、弥生土器（同21～24）も若干出土した。

（豊島）

#### （2）出土遺物

##### a. 埴輪（第19～22図）

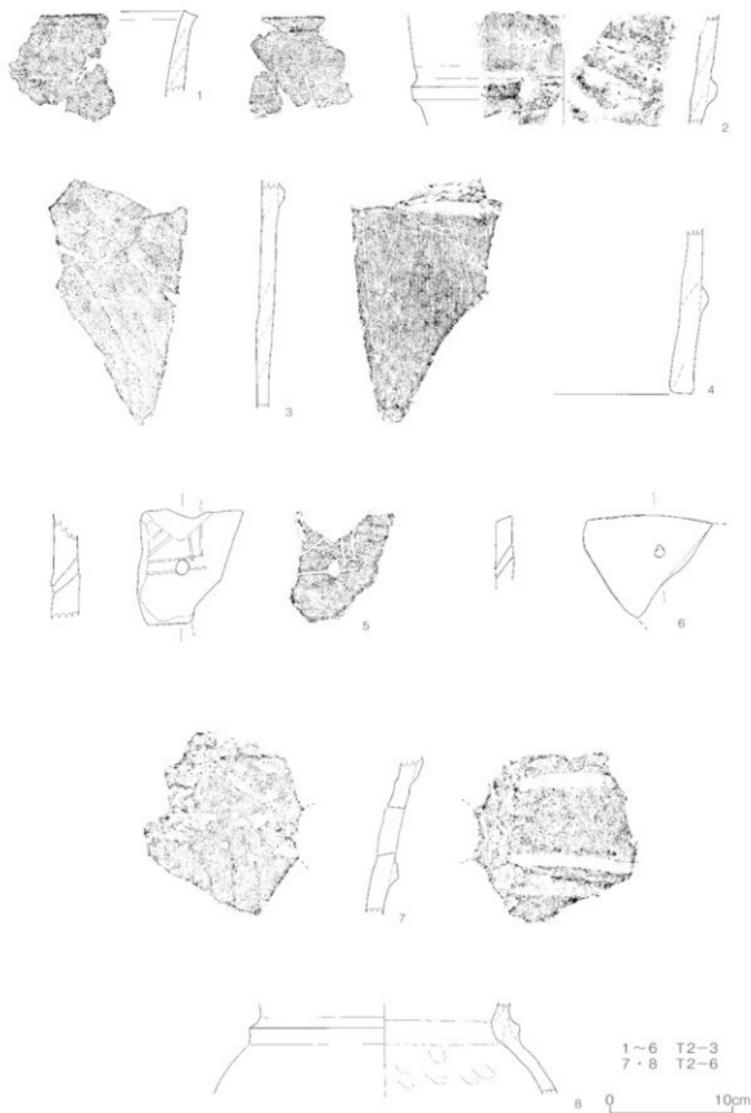
1～6がT2-3から出土した埴輪である。1・2は円筒埴輪で1は口縁部外面に2次調整のヨコハケが見られ、内面はナデである。焼成は須恵質である。2～4は土師質で2の外面はタテハケ、内面はナデである。3の外面はタテハケで、突帯間が他より長い事から形象埴輪の基部と思われる。4は底部で摩擦のため調整は不明である。5・6は石見型盾形埴輪である。5は外面に線刻が見られ、斜め方向の円孔がある。6は線刻が無く同様の円孔がある。

7・8はT2-6出土で、7の外面にはタテハケが見られ、8は朝顔形の肩部で、調整は摩擦のため不明である。

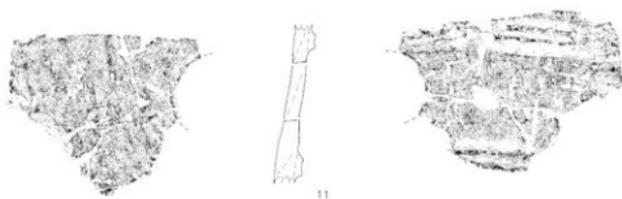
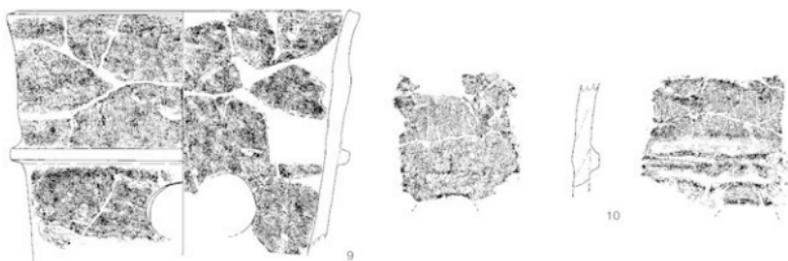
9～14はT2-8出土で、9は口縁部から胴部の2段目付近まで復元できる。口径28.5cm、突帯は方形に近いもので外面はタテハケ、内面はナデである。10・11の外面もタテハケで、内面はナデである。12・13は朝顔形で12は口縁部、13は胴部である。外面はタテハケ、内面はナデである。14は形象埴輪の基部と思われ、上部外面に1条の沈線、その下に斜め方向の円孔が1箇所見られ、石見型盾形埴輪の基部の可能性もある。

15はT2-10出土で、断面が不正円形の筒状のもので、おそらく家形埴輪の堅魚木であろう。

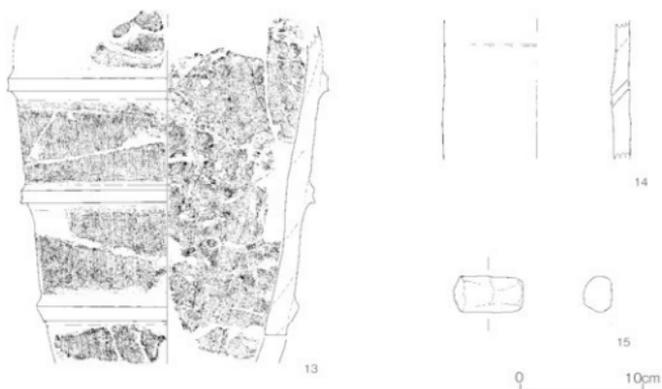
16～25はT2-11出土で16は円筒埴輪の底部、17は底部付近に突帯が1条めぐり、端部は重みで外側に変形する。外面はタテハケ、内面はナデで形態から形象埴輪の基部である。18～23は人物埴輪である。18は顔の目の部分、19は鼻で鼻穴を穿孔する。20は顔と胴部からなり、接合はしない。顔は目と鼻、口があるが髪の部分などは欠損する。胴部には、ヘラによる線刻がある。首の下に横方向の二重線がありこの中に鋸歯文で埋める。ここから垂れ下がる形で同様の二重線が左手側のみあり、右手側は一部剥落しているため、この表現がすでに剥落しているか表現されていないか可能性もある。この下側を四角く方形に区切りその中を、1区画ごとに縦と横線の交互で埋めている。よく見ると左手側3列は横線のみを省略している。これが故意で何かを意味しているのか、ただ施すのを忘れていたかは明瞭でない。これら表現からの線刻は挂甲を表現しているものと推測される。この下部には何かが剝れた縦方向の跡もある。また、手は右手部分が現存するが左手は欠損する。この左手は右手のように下を



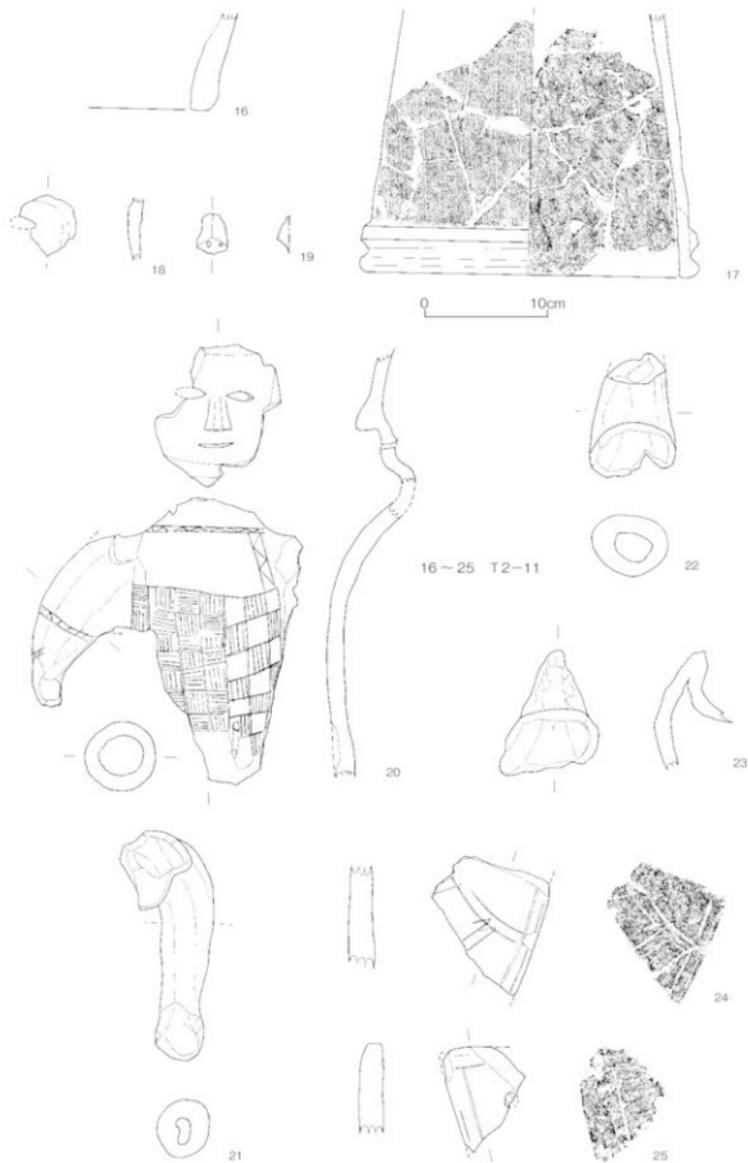
第19図 出土遺物(1) (埴輪、S=1:4)



9~14 T2-8  
15 T2-10



第20図 出土遺物(2) (埴輪、S=1:4)

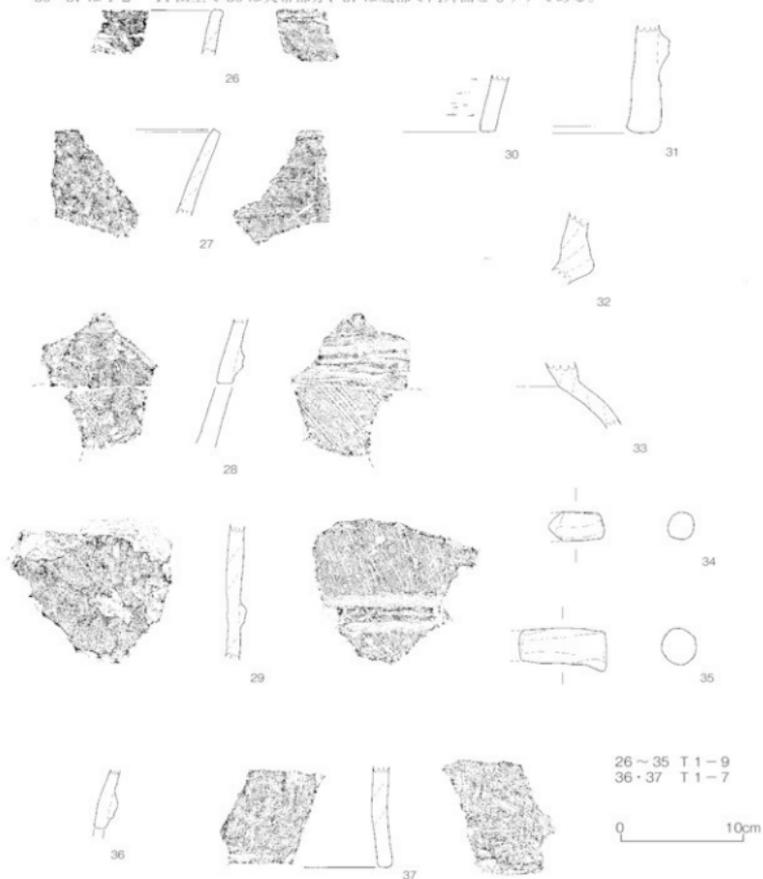


第21図 出土遺物(3) (縮輪、S=1:4)

向くのでは無く、前方を向いていたものと推測される。右手にも同様の二重線で縞状のものがめぐり、手の甲部分にはV字状に表現されている。おそらく手にはめられた武具などを表現しているものと思われる。21は手の部分、22・23は手などの接続部分である。いずれも20とは接続しない。このため、人物埴輪は複数あるものと思われる。24・25は線刻が見られ、25には円孔が見られる。いずれも石見型盾形埴輪である。

26～35はT2-13出土で、26・27は口縁部で26はタテハケ、27はヨコハケ、28・29は斜め方向のタテハケである。30・31は底部で30は内面に横方向のナデが見られる。31は突帯が低い位置にあり、形象埴輪の基部と思われる。32・33は朝顔形埴輪の一部である。34・35は家形埴輪の堅魚木である。

36・37はT2-14出土で36は突帯部分、37は底部で内外面ともナデである。



26～35 T1-9  
36・37 T1-7

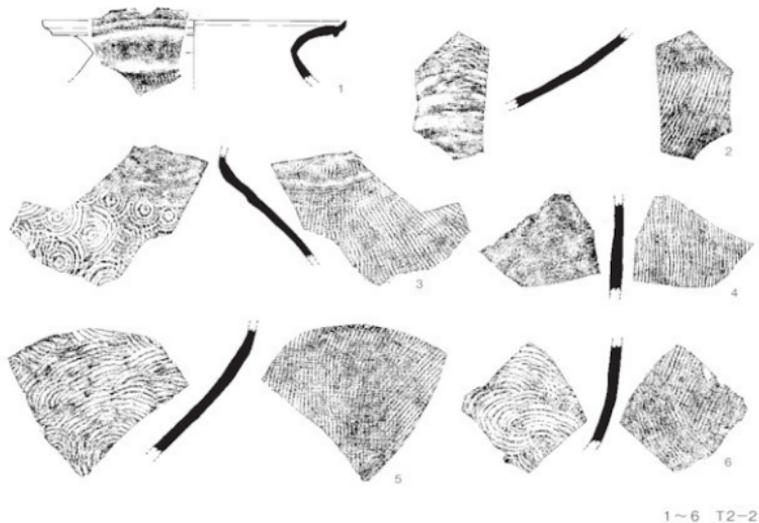
0 10cm

第22図 出土遺物(4) (埴輪、S=1:4)

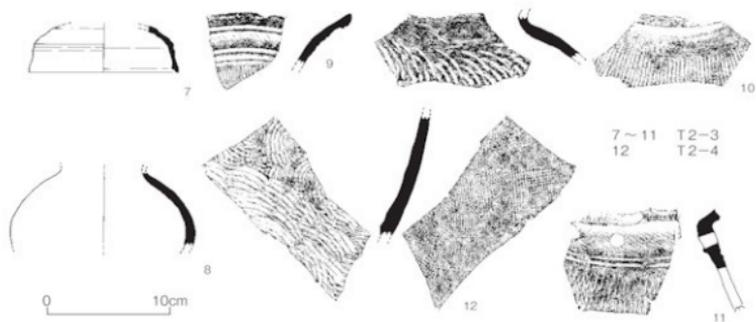
## b. 須恵器、弥生土器 (第 23～25 図)

埴輪以外の出土遺物について図示できたものを掲載した。遺物は T2-1 除くすべてのトレンチから出土しているが、T2-5、7、10 からは須恵器その他は出土しておらず、T2-6、9 は図示できるものがなかった。

1～6 は T2-6 出土で、周溝内出土のものはなく、すべて転落した葺石付近やトレンチの埋土中からの出土である。1～6 はすべて甕である。1 は胴部から短く外反する口縁部である。口縁端部は上下に肥厚させている。胴部外面にはタタキが施されている。2～6 は甕の胴部である。外面には平行タタキ、あるいは格子目タタキが施され、内面には当て具痕が明瞭に残る。

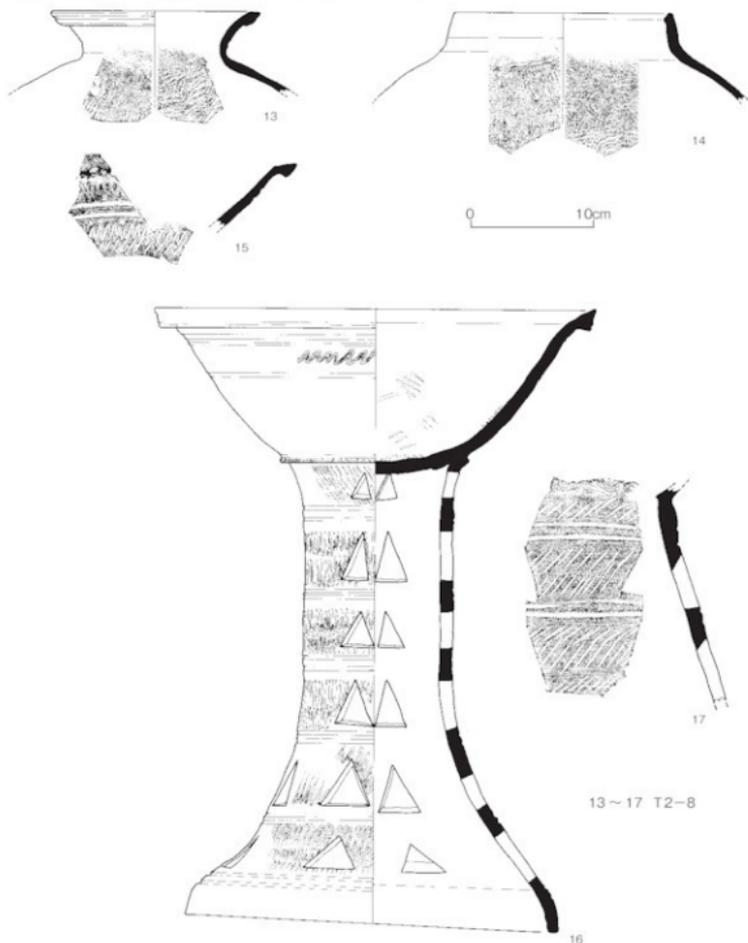


1～6 T2-2

7～11 T2-3  
12 T2-4

第 23 図 出土遺物 (5) (須恵器、S=1:4)

7～11はT2-3出土で、遺物はトレンチの西側、つまり周溝外側ではなく、墳端に近い部分に多くみられた。7は坏蓋である。口径12.0cmを測る。天井部は回転ヘラ削りが施され、天井部と口縁部の境界には凹線がみられる、口縁端部は沈線が巡る。8は広口壺の体部で、最大径30cmをはかる。9、10は甕である。9は外反する口縁部で、外面に凹線、斜線文、波状文が施されている。10は胴部で、外面に平行タタキ、内面には当て具痕が明瞭に残る。内面の頸部との境界付近はナデが施されている。11は器台の脚部で、上部との接合部付近に刻目が施された突帯をもち、その下に円形の透孔が、凹線を画した下位には三角形の透孔がそれぞれ穿たれている。

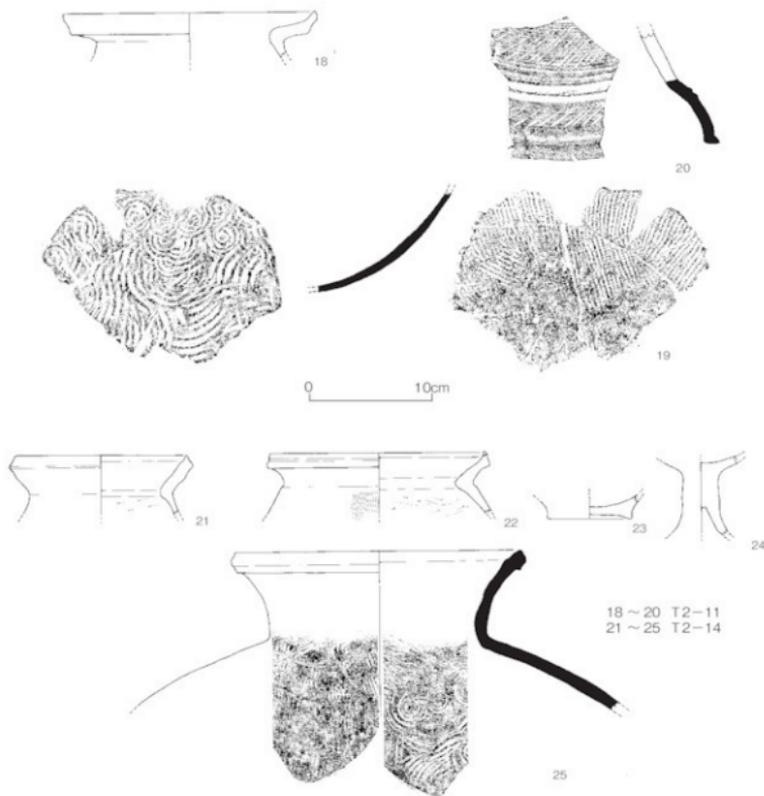


13～17 T2-8

第24図 出土遺物(6) (須恵器、S=1:4)

12はT2-4出土で、周溝埋土から出土した甕の胴部である。外面には平行タタキが施され、内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。

13-17はT2-8出土で、すべて周溝内からの出土である。13は甕である。胴部から逆ハの字状に外反する口縁部をもち、端部は外側に肥厚させている。外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕がみられる。14は大型の短頸壺である。胴部からはほぼまっすぐ上方にのびる口縁部をもつ。15は高坏形器台の坏部である。大きく外反し、端部は外側に拡張させている。外面には凹線、波状文が施されている。16は高坏形器台である。坏部の口縁は端部を上下に肥厚させている。外面には凹線、波状文が施され、内面の下半部には同心円の当て具痕が残る。脚部は凹線によって6段に区切られており、上から1段目には櫛描列点文、2段目から6段目には波状文が施され、最後に三角形の透孔を上から1段目から4段目に4方向、5段目、6段目に6方向穿つ。坏部と脚部の接合部分には刻目が施された突帯がみられ、坏部内面には接合部を粘土によって補強した痕跡がみられる。なお、16の大部分は昭和42



第25図 出土遺物(7)(須恵器ほか、S=1:4)

年の調査により出土したものであるが、本トレンチから新たに口縁部片等が出土したため、ここで掲載した。17は器台の脚部である。凹線によって3段に区切られた各段にはヘラ状工具による斜線文が施され、残存部では上から2段目と3段目に三角形の透孔が穿たれる。

18～20はT2-11出土で、すべて周溝内からの出土で、18は弥生土器である。堯の口縁部で、わずかに外傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。19は堯の底部付近で、外面には格子目タタキ、内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。20は器台の脚部である。外面に凹線、およびヘラ状工具による斜線文が2段に施されている。

21～25はT2-14出土で、21～24はトレンチ内から出土した弥生土器片で、いずれも後期のものである。21、22は堯で、「く」の字状の口縁部をもち、端部はわずかに上方に立ち上がる。内面は頸部直下までヘラ削りが施されている。23は底部で、両面丹塗りである。24は高杯の脚部である。25は周溝内から出土した須恵器の堯である。緩やかに外反する口縁部をもち、端部は外側にわずかに肥厚させている。外面に平行タタキが施され、内面には同心円の当て具痕が残る。

(豊高)

### (3) 小結

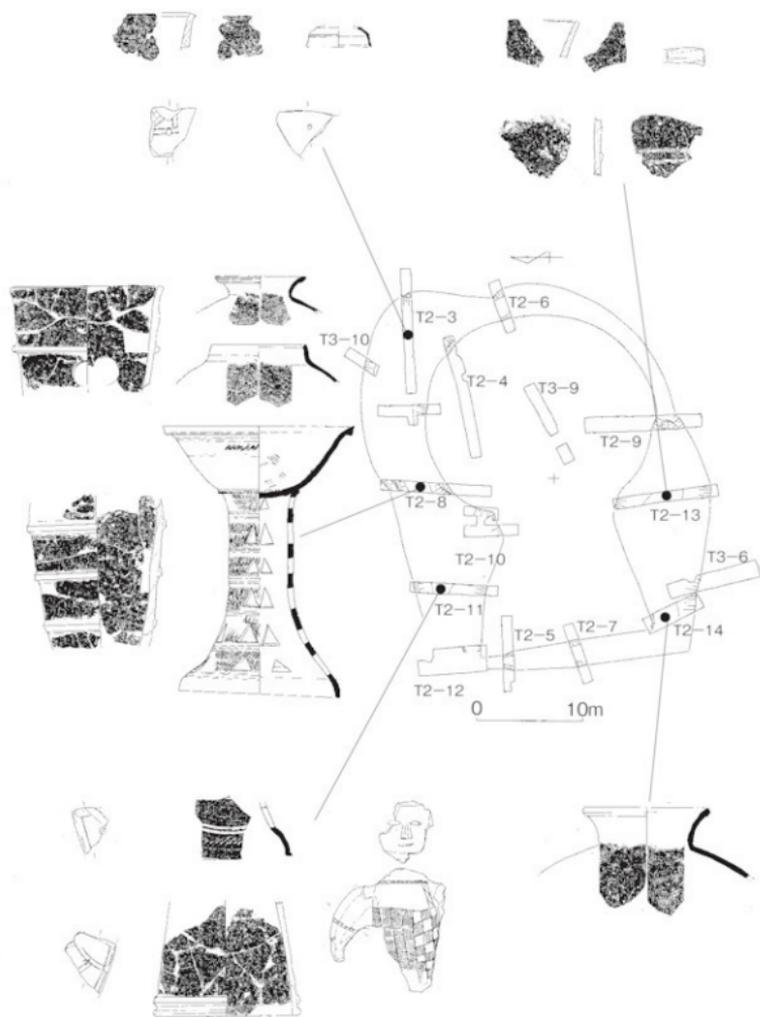
2次調査では、1次調査で確認された65号墳の規模が明らかになった。1次調査T1-7で検出した周溝は、T2-2ではほ円の反対側にあたる周溝が検出されたことにより、復元される古墳は直径17～18mの円墳であると推測される。また、T1-7からは検出されていないが、T2-2の周溝底部直上で多数の河原石が検出されたことや、出土遺物の中に埴輪がみられないことなどから、65号墳は外表施設として葺石をもち、埴輪は存在しなかったと考えられる。須恵器堯の胴部片がほとんどで、古墳の時期を特定するだけの遺物はみられなかったが、T2-2で出土した堯の口縁部が強く外反し、端部がわずかに立ち上がるものであることを手がかりとし、陶器編年のMT15～TK10型式期に位置づけておく。

2次調査の主な目的である古墳群北西部の前方後円墳（日上畝山58号墳）については、今回のトレンチ調査によって周溝を検出することにより、形状および規模を確認することができた。墳丘の構築過程は、墳丘盛土がすべて削平されているため不明であるが、周溝はほぼすべてのトレンチで検出されているため、墳丘側の下端をもって墳端と判断すれば、58号墳の規模を復元することが可能であろう。ただし、トレンチによっては下端が検出できなかった地点もあるため、第14図に示した墳丘復元ラインは、検出した周溝の墳丘側の上端をもとに描いている。58号墳は従来の知見どおり、後円部を東側にむけた前方後円墳であり、周溝を伴う。各トレンチで検出した墳端の高さをまとめたものが第1表である。まず後円部トレンチでは、後円部北側のT2-8の114.3mが最も低く、東側のT2-6の116.1mが最も高い。その差は1.8mである。後円部南側ではT2-9で115.2mであり、後円部の東側を最高所とし、くびれ部に向かって下がっていることがわかる。後円部からの傾斜が最も低くなるのは前方部北側のT2-11、およびくびれ部南側のT2-13

	墳端	墳丘側の 地山上面	周溝外側の 地山上面
T2-3	115.0	—	116.8
T2-4	※115.1	116.0	—
T2-5	113.8	114.2	114.1
T2-6	116.1	116.3	116.3
T2-7	114.0	114.4	114.2
T2-8	114.3	115.5	114.9
T2-9	115.2	115.7	115.8
T2-10	114.1	115.0	—
T2-11	113.5	114.7	114.6
T2-12	—	113.9	—
T2-13	113.6	115.8	115.5
T2-14	114.2	114.5	115.0

※はトレンチ内で検出した範囲で最も低い部分の高さを示す。

第1表 日上畝山58号墳トレンチ各部の高さ



第 26 图 58 号墓遺物出土位置图

付近で、ともに1135～1136mである。特にくびれ部南側では、T2-13と隣接するT2-9で検出した墳端との高低差が1.6mであり、北側に比べ墳端のレベルが急激に下がっていることが分かる。

前方部前面および前方部隅に位置するT2-5、7、12、14における墳端の検出状況は、前面の2箇所のトレンチ（5、7）では、周溝は浅い溝として検出され、墳端のレベルも1138～1140mと、くびれ部に比べ数十cm上がっている。前方部隅のトレンチ（12、14）での墳端は確認することができなかったが、前方部前面のトレンチでの検出レベルと大きな差はないものと思われる。

このように各トレンチにおける墳端レベルは、後円部からくびれ部付近にかけてやや急な傾斜で下がり、前方部に向かって緩やかに上がっていくという状況がみられる。これに対し各トレンチ内の地山上面のレベルは、後円部東側で1163m、くびれ部付近で115～115.8m、前方部前面の西側で114.2～114.5mであり、現在の地形に沿ったものである。つまり、くびれ部付近において周溝が最も深く、この部分での掘削が大規模に行われていたことを示していると言える。

周溝の外郭ラインをみていくと、後円部東側はT2-3で大きく東側に張り出しており、いびつな形状を呈している。くびれ部は、南側のT2-13付近で外側に膨らみながら前方部にかけて墳丘側に入る。北側のラインは直線的である。前方部の立ち上がりは小さく、周溝とは言い難いものだが、前方部前面のラインに対して平行である。これらの状況から、日上畝山58号墳にはややいびつな形状周溝が巡っていたものと推測されるが、周溝の検出状況からは、常に周溝に水が湛えられていたとは考えがたい。古墳の築成については、墳端や地山の状況から判断して、丘陵の斜面という自然地形に大きく影響を受けたものと考えられる。くびれ部付近の周溝は深く掘削され、古墳の盛土として使用され、前方部については自然地形に解消されていたのではないだろうか。

以上の調査結果をもとにすると、日上畝山58号墳は墳長32m、後円部径23m、くびれ部幅15m、前方部長9m、前方部前面幅16～18m、周溝を含む全長36～37mの前方後円墳で、外表施設として葺石、埴輪をもつ古墳であるといえる。

次に、日上畝山58号墳の時期について考える。古墳の周溝内からは多数の埴輪や須恵器が出土している（第26図）。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪（人物・石見型盾）があり、円筒埴輪の外周調整は一部にヨコハケが見られるが、ほとんどがタテハケである。この特徴からV期（註1）の埴輪である。須恵器は、埴輪に比べ出土点数が少ないが、T2-3出土の坏蓋が時期を特定する大きな手がかりとなる。この坏蓋は口径12.0、器高3.8cmを測り、天井部と口縁部との境界に凹線をもち、口縁端部は段がみられる。これらの特徴から、坏蓋はTK47型式期のものとする事ができる。坏蓋以外の器種についてみると、甕は頭部が比較的短く外反するもので、端部を丸く仕上げられており、若干新しい様相も含んでいるような印象を受ける。また、出土須恵器の中で唯一完形に復元できたT2-8出土の高坏形器台は類例が少なく、市内出土のものとしては中宮1号墳出土例（註2）があげられる。中宮1号墳例は細長い脚部に浅い坏部に細長い脚部をもち、本古墳例に比べ新しい様相を呈する。このように坏蓋以外の出土須恵器から時期を特定することは困難であるが、若干新しい要素を含むものもみられることから、58号墳の年代はMT15～TK10型式期と推測される。

（豊島）

（註1）川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』日本考古学会  
（註2）近藤義徳1962『佐良山古墳群の研究第1冊』津山市

### 3. 3次調査（平成15年度）

2次調査で検出した前方後円墳（58号墳）の南側に円墳2基が存在することが旧調査で判明している。このため周辺など12箇所（T3-1・11・13）と「古家」碑南側3箇所（T3-12・14・15）、T1-3西側1箇所（T3-16）計16箇所に設定した。

#### （1）トレンチの概要

##### トレンチ1（T3-1、第27・28図）

58号墳の南側に設定した幅1.5m、長さ28.6mのトレンチである。土層は耕作土の下は地山面である。東西2箇所で周溝を検出した。東側は幅0.8～2.2m、深さ0.4mで、埋土は1層である。内部から須恵器の大甕（第38図9）が出土したため一部トレンチを北側に拡張した。第28図がその出土状況である。甕は口縁部から底部まであり、底部を下にして周溝の北側に置かれていたものが南東側に倒れた状態で出土した。この須恵器を置くために、周溝底が掘られているため、この部分では周溝幅が2m近くあるが、須恵器の無い北側では幅は1mに満たない。この須恵器に混じって埴輪片（第33図1）が出土している。埴輪の外面はヨコハケでヘラ記号がある。西側の周溝は幅4m、深さ0.9mを測り、第4層からは石がかなり出土している事から、これらは葺石が転落したものと思われる。出土遺物は埴輪片が1点ある。またこの周溝部分の西側土層で旧トレンチの跡（深さ0.4m、第27図第8層）を確認している。

以上から両周溝間が古墳で、本墳は径9.7m程の円墳である。なお、本墳は旧調査時に確認された古墳（旧52号墳）であると思われるが、ここでは続き番後で59号墳と呼称する。なお、トレンチは東へかなりのばしだが他の周溝は存在しない。古墳の下層にあるP1から高坪（第38図1）や甍片、P2から土器片と炭が出土し弥生時代のものと思われる。

##### トレンチ2（T3-2、第27・29図）

T3-1の南側に設定した幅1.5m、長さ21.9mのトレンチである。土層は耕作土の下は地山面である。T3-1同様東西2箇所で周溝を検出した。東側は幅2.8m、深さ0.8m、埋土は3層である。内部からは、円筒埴輪（第33図3～6）、形象埴輪（盾、同7）、須恵器（第38図5～8）が出土した。西側は幅2.2m、深さ0.4m、埋土は2層で、内部から円筒埴輪（第33図2）、須恵器が出土した。2の円筒埴輪は完全に復元できる。また、東側周溝から0.5m墳丘側で埋葬施設1基を確認した。第29図にその平面図を載せている。土壌の掘り方は地山面を掘り込んでいるが、上面はかなり削平されているため、本来はもう少し上の盛土面から掘り込まれたものと推測される。掘り方は幅0.55m、長さ0.95mを測り調査区外に続く。内部から須恵器と土師器が出土した。その状況から須恵器・坏（第38図3・4）は枕に使用されたものと思われる。なお坏はセットで東側が蓋、西側が身であるが、身は元位置を確認できていない。土師器（同2）は半載された状況である。その他の副葬品は見られない。また、埋葬施設の位置から中心埋葬ではなく、地山面を掘り込んでいる事から、古墳築造時の早い段階に埋葬されたものである。

以上から両周溝間が古墳で、本墳は径1.2m程の円墳である。なお、本墳も旧調査時に確認された古墳（旧53号墳）と思われるが、ここでは60号墳と呼称する。尚、古墳の下層にある柱穴は一番西端のものから土器片が出土しており、これら柱穴は弥生時代のものである。

##### トレンチ3（T3-3、第27図）

T3-1・2の間の西側に設定した幅1.5m、長さ13.6mのトレンチである。土層は耕作土の下は地山面である。東側で60号墳の周溝の一部を確認した。なお周溝の埋土が耕作土と同一である事から一

度掘られている。おそらく旧トレンチであるが、トレンチの位置は確認できていない。このため出土遺物もほとんどないが、少量の埴輪片がある。その他須恵器や旧調査時のビニール袋などが出土した。

#### トレンチ4 (T3-4、第30図)

T3-1、T3-2の間に設定した幅1.5m、長さ7.3mのトレンチである。土層は耕作土の下は地山面である。南北2箇所に周溝を確認した。北側は幅2m、深さ0.4mで埋土は1層である。内部から円筒埴輪(第34図9)、須恵器(第39図10・11)や石が出土した。南側は幅1.9m、深さ0.5mで埋土は2層である。内部から円筒埴輪(第34図8)、朝顔形埴輪(同10)、形象埴輪(盾、同11~14)、須恵器(第39図12~14)、弥生土器が出土した。北側の周溝は59号墳、南側の周溝は60号墳のものである。

#### トレンチ5 (T3-5、第30図)

T3-2の南側に設定した幅1.5m、長さ4mのトレンチである。土層は耕作土の下は地山面である。周溝の一部墳端を確認し深さ0.4mを測る。埋土は2層で内部から埴輪(第34図15)、須恵器が出土した。この周溝は60号墳の南端である。下層には柱穴が2個ありP1から弥生土器片が出土した。

#### トレンチ6 (T3-6、第30図)

T3-1の北側に設定した幅1.5m、長さ8.6mのトレンチである。土層は耕作土の下が地山面、北側で58号墳の周溝南端を検出した。周溝の埋土は2層で、埴輪、須恵器(第40図15・16)、石が出土した。南側の59号墳の墳端は明瞭でないが、第3層の始まりの地山が若干整形されているようであり、明瞭な周溝はないがこの辺りが墳端の可能性もあるが、58号墳造営時に破壊されている可能性もある。

#### トレンチ7 (T3-7、第30図)

T3-6の西側に設定した幅1.5m、長さ13.3mのトレンチである。土層は耕作土の下が地山面である。北側で幅3.7m、深さ0.4m程の周溝を検出した。埋土は1層で内部から円筒埴輪(第35図16~19)、朝顔形埴輪(同20・21、第36図22・23)、須恵器(第40図17~23)、石が多量に出土した。石が出土することから葺石の存在が指摘できる。須恵器の寛は完形に復元できるもの、埴輪には円筒埴輪の口縁部に突帯をめぐらすものがある。ただこの周溝の外周は墳端に沿って巡っておらず、南側では開放する。なお、東側の落ち込みはほとんど遺物が無い事から古墳に伴うものではなく後世のものとして推測される。なお新たに周溝が検出されたためトレンチ11(T3-11)を設定し、この周溝の続きを確認した。

#### トレンチ8 (T3-8、第31図)

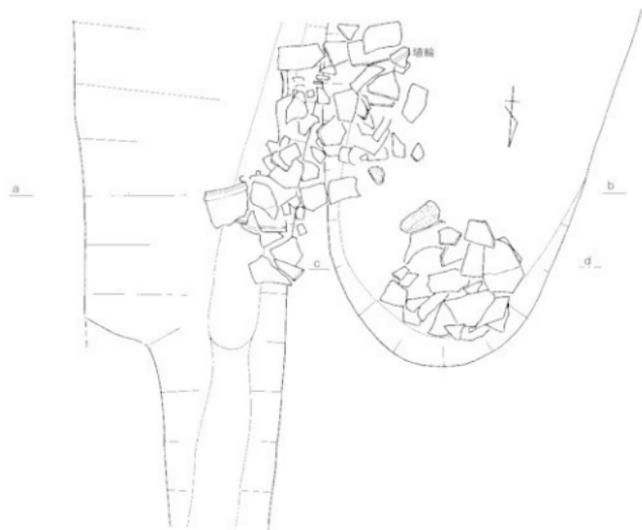
T3-1の西側に設定した幅1.5m、長さ8.6mのトレンチである。土層は耕作土の下は地山面である。遺構は一切見られない。出土遺物は円筒埴輪(第36図24・25)、須恵器(寛片)がある。

#### トレンチ9 (T3-9、第31図)

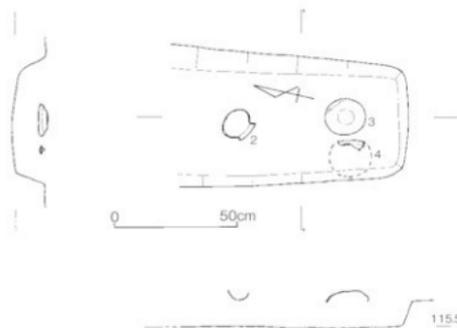
2次調査で検出した前方後円墳である58号墳の後円部の中心に設定した、幅1m、長さ8mのトレンチである。途中で木があるためトレンチは2分される。土層は1層でその下は地山面である。遺構は見られない。出土遺物は須恵器片(寛)などが少量ある。このトレンチで埋葬施設の基礎部分の確認をおこなったが、すでにすべてが削平されているようである。

#### トレンチ10 (T3-10、第31図)

同じく58号墳の後円部北側周溝の外側を検出するために設定した、幅1m、長さ3.4mのトレンチである。土層は耕作土の下に1段掘り込みがあり、さらに掘り込まれる2段掘りの状況である。ただ1段目が古墳に伴うものかは明瞭ではないが、埋土である第2層が2段目の埋土上面に堆積していることから、この1段目は新しいものと判断される。このため周溝の層は現状では2段目である。よって周溝



第28図 T3-1周溝内遺物出土状況 (S=1:20)

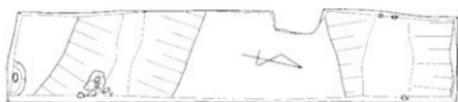


第29図 T3-2埋葬施設平面・断面図 (S=1:20、土器の番号は第38図)



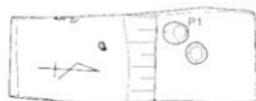
- 1 耕作土      3 淡黒灰色土 (周溝埋土)  
2 暗黄灰色土      4 暗茶灰色土 (周溝埋土)

T3-4



- 1 耕作土  
2 暗黄灰色土 (周溝埋土)  
3 淡黒褐色土 (周溝埋土)

T3-5



- 1 耕作土  
2 淡黒灰色土 (周溝埋土)  
3 暗黄灰色土 (周溝埋土)

T3-6



0 2m



- 1 耕作土  
2 暗黄灰色土 (周溝埋土)

T3-7

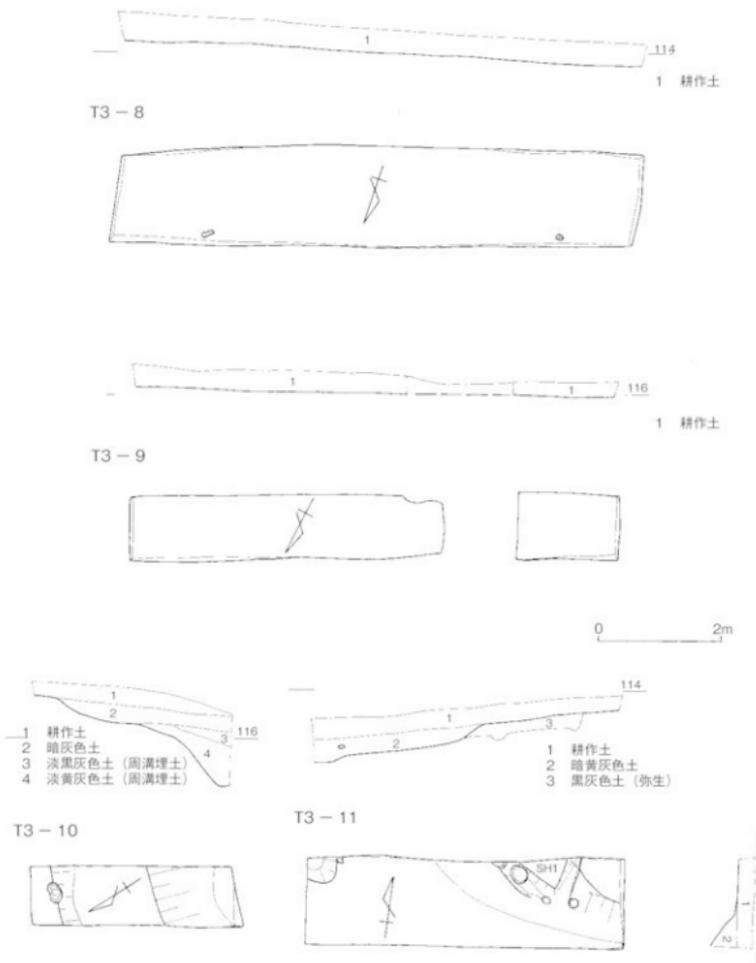


第30図 トレンチ4~7 (T3-4~7) 平面・土層図 (S=1:80)

の埋土は2層で、出土遺物は弥生土器片（高坏）のみである。

トレンチ11（T3-11、第31図）

T3-7の西側に設定した幅1.5m、長さ5.2mのトレンチである。土層は耕作土の下が地山面で、墳端部分を検出した。トレンチ7の結果と合わせ、新たな古墳が確認された。円墳と思われるが、端の部分のみを検出したため規模の詳細は明瞭でない。本墳は新規古墳のため67号墳と呼称する。なお、地山面を掘り込んで弥生時代の住居跡（SH1）が存在する。古墳はこの住居跡を壊して造られている。



第31図 トレンチ8～11（T3-8～11）平面・土層図（S=1:80）

住居跡は壁溝の一部と壁溝から中央穴に向かう溝と浅い柱穴などがある。出土遺物は円筒埴輪（第37図26～30、28・29は朝顔形か?）、須恵器（第41図24～28）、弥生土器片がある。図示していないが円筒埴輪の口縁部には突帯がめぐるものがある。

#### トレンチ12（T3-12、第32図）

「古家」碑の南側に設定した幅0.8m、長さ8.9mのトレンチである。第1層の下は地山面で、中央付近で周溝を検出した。幅4.1～4.5m、深さ0.8mを測るかなり大規模である。埋土は3層である。周溝断面は南側ではU字形で北側では南側に比べ緩やかな立ち上がりである。内部から円筒埴輪（第37図31）、須恵器、石などが出土した。石が見られることから葺石の存在が考えられる。周溝の北側にある土壌は周溝を切っており新しい時期のものである。この土壌からの出土遺物はなく時期は不明であるがおそらく埴輪削平後のものである。このトレンチで新たに周溝が検出されたため、トレンチ14・15（T3-14・15）を新たに設定した。

#### トレンチ13（T3-13、第32図）

2次調査のT2-1の西側に設定した幅1m、長さ22.4mのトレンチである。途中に植林された木があるため、西側などは部分的にしか調査できていない。土層は耕作土の下は地山面で、東西で周溝を検出した。東側の周溝は幅3.7m、深さ0.6mあり、丘陵高所を切断したしっかりしたもので、埋土は2層である。西側周溝は幅0.8m、深さ0.4mと東側に比べると狭い。埋土は1層である。以上から、両周溝間が古墳となるものと思われる。本墳は、径8.6m程の円墳である。新規古墳であり66号墳と呼称する。出土遺物は表土から須恵器（第41図30）、弥生土器などが出土したが、周溝内からは土器片が少量出土しているのみである。

#### トレンチ14（T3-14、第32図）

T3-12で周溝を検出したため、その東側へ直交する形で設定した幅1m、長さ11.6mのトレンチである。土層は第1層の下が地山面である。トレンチ東側で幅5.8m、深さ0.85mの周溝を検出した。周溝の断面はT3-12と同様の形態で、西側の傾斜が東側に比べると緩やかである。内部から円筒埴輪（第37図32～34）、形象埴輪（人物・家、同35・36）、須恵器（甕・坏）、弥生土器（甕）、石が出土した。T3-12の結果と合わせて埴輪の無い葺石を伴う新規古墳が存在する事が判明した。ただ、今年度の調査区外に続くため、5次調査で北側にトレンチを設定することとした。本墳は新規古墳であり68号墳と呼称する。

#### トレンチ15（T3-15、第32図）

T3-12の東に直交する形で設定した幅1m、長さ7.2mのトレンチである。土層は第1層の下が地山面で、遺構は一切見られない。このことからT3-12で検出した周溝は、本トレンチの方に続いていないことが判明した。出土遺物は埴輪・須恵器片が少量ある。

#### トレンチ16（T3-16、第32図）

1次調査で検出した64号墳の西端を検出するためにT1-3の西側に設定した幅1m、長さ4mのトレンチである。土層は第1層の下は地山面である。北側に見られる石は日上天王山古墳の葺石と思われる。遺構は見られず、周溝の痕跡はないため、本トレンチまでの間で64号墳の周溝は解消するようである。以上から64号墳は一辺10m以下の方墳であると考えられる。

（小郷）

## (2) 出土遺物

### a. 埴輪 (第33～37図)

1はT3-1出土の円筒埴輪で、外面には静止痕の見られるヨコハケが見られ、曲線(波状文?)のヘラ記号もある。焼成は須恵質である。

2～7はT3-2出土で、2は完形に復元できる須恵質の円筒埴輪である。口径275cm、底径14cm、高さ48cm、突帯は3条である。突帯の形態はやや扁平な台形で、付ける際に上下を強くヨコナデしているため、両側がへこんでいる。口縁部(4段目)から2段目までは斜め方向のタテハケが見られ、底部(1段目)は斜め方向のナデである。2・3段目には円孔が2個ずつ直交する形で穿たれる。内面はナデである。胴部(2・3段目)の突帯間の距離は3段目より2段目の方が短い。底部底には付着物がある。3・4・6もタテハケが見られ、5はヨコハケである。7は石見型盾形埴輪と考えられ輪郭に沿って2重の線刻がある。

8～14はT3-4出土で、9が北側の周溝で出土した以外は南側の周溝からの出土である。8・9は円筒埴輪で8の外面はタテハケ、9は底部で外面はナデで須恵質である。10は朝顔形の口縁部で外面はタテハケで内面は上部にヨコハケが見られる。11～14は石見型盾形埴輪片で輪郭に沿った2重の線刻と11には円弧、13には直線的な線刻がある。

15はトレンチ5(T3-5)出土の円筒埴輪で、外面はタテハケ、内面はナデである。外面には赤色顔料を塗布している。

16～23はT3-7出土で、16～19は円筒埴輪で16は底部以外復元できる。口径27cm、3条突帯で口縁部端にも突帯が1条めぐる。この突帯の形状は方形で、他の突帯は概ね台形である。口縁部と3段目の外面は1次調整のタテハケの上に静止痕のほとんど見られないヨコハケを一回で施している。2段目はヨコハケを省略しタテハケのみである。内面はナデである。口縁部外面に波状文のヘラ記号がある。焼成は須恵質である。17・18も口縁部に突帯がめぐる。ただ形状は16のように方形ではなく、幅が広い扁平なものである。外面の調整は16と同様のヨコハケである。焼成は土師質である。19は外面ヨコハケで波状文のヘラ記号があるが、16のように口縁部に突帯はない。20～23は朝顔形で20は口縁部、21は受部、22は肩部、23は口縁部、底部以外を復元できる。外面はすべてタテハケである。円孔は3・4段目に直交する形で対に存在するが、2段目は無いようである。内面はナデである。

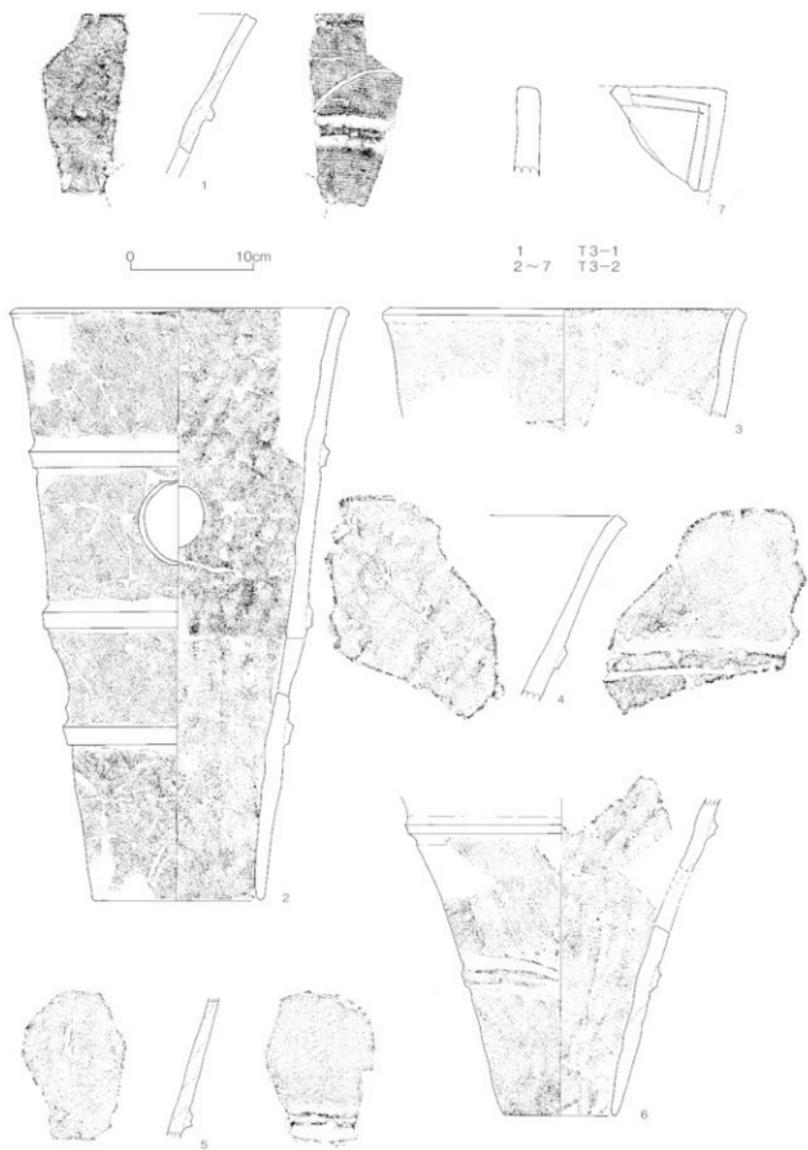
24・25はT3-8出土で、24の外面はタテハケ、25は静止痕の見られるヨコハケ、内面もヨコハケである。

26～30はT3-11出土で、26の外面はヨコハケで波状文のヘラ記号がある。27は口縁部、底部の一部以外を復元できる。口縁・3段目の外面はヨコハケ、2段目、底部はタテハケである。28・29は現存する外面がいずれもタテハケのため、23のような朝顔形の可能性がある。30は底部で内外面ともナデで、突帯の形態は三角形である。

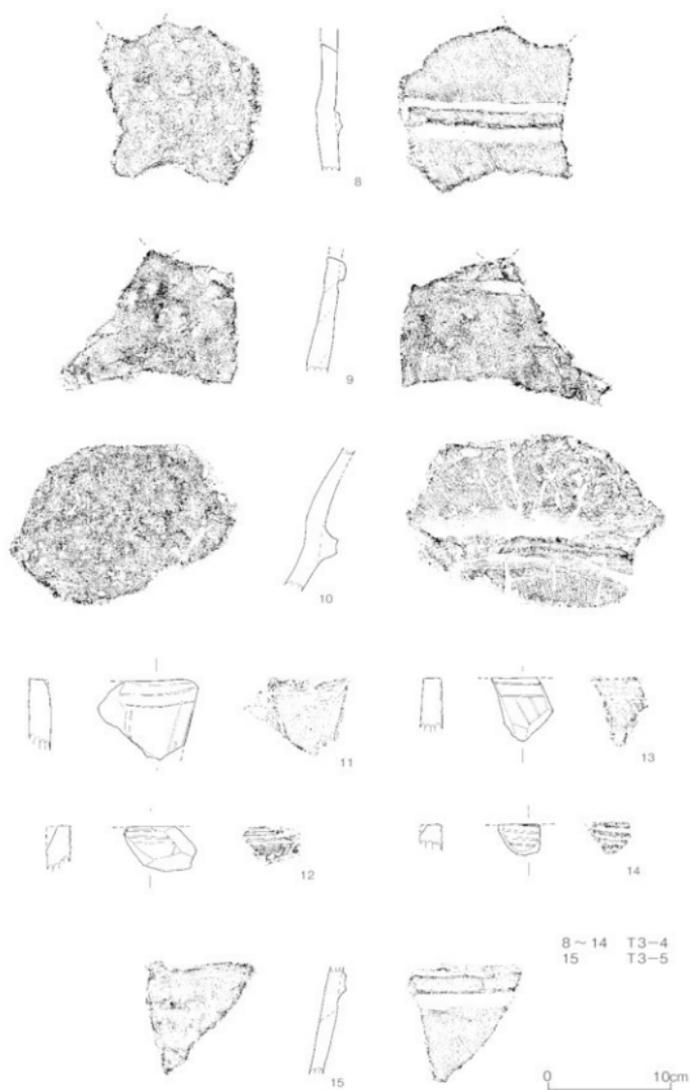
31はT3-12出土で、突帯部分である。外面は摩滅のため不明、内面はナデである。

32～36はT3-14出土で、32～34は円筒埴輪、35・36は形象埴輪である。32は口縁部でヨコハケが見られるが摩滅が著しい。33・34も外面はヨコハケである。35は人物埴輪の手の部分と思われ、36は家形埴輪の堅魚木である。

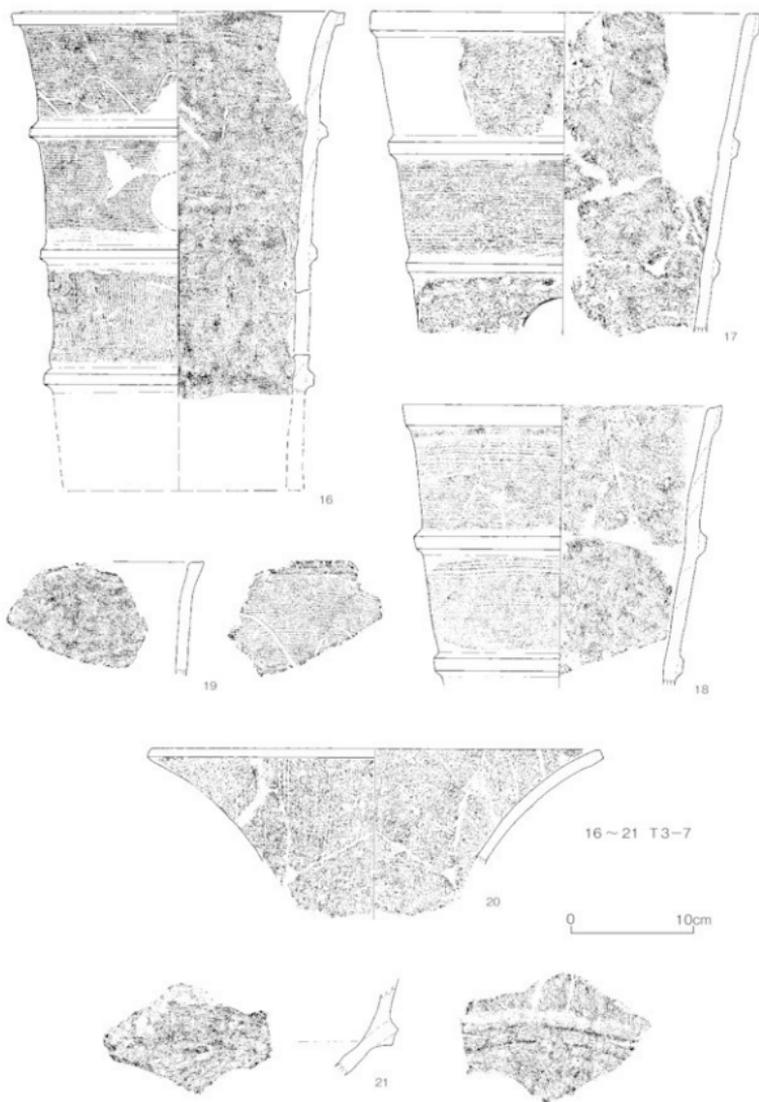
(小郷)



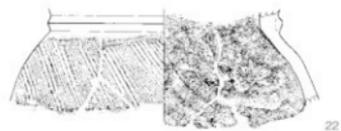
第33図 出土遺物 (1) (埴輪, S=1:4)



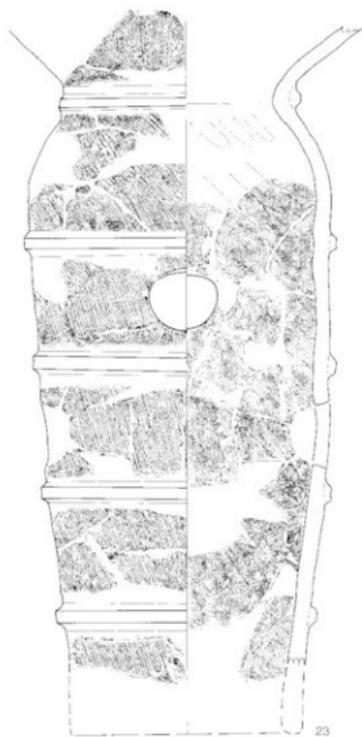
第34図 出土遺物(2) (埴輪、S=1:4)



第35図 出土遺物(3) (埴輪、S=1:4)



22



23

22・23 T3-7  
24・25 T3-8

0 10cm

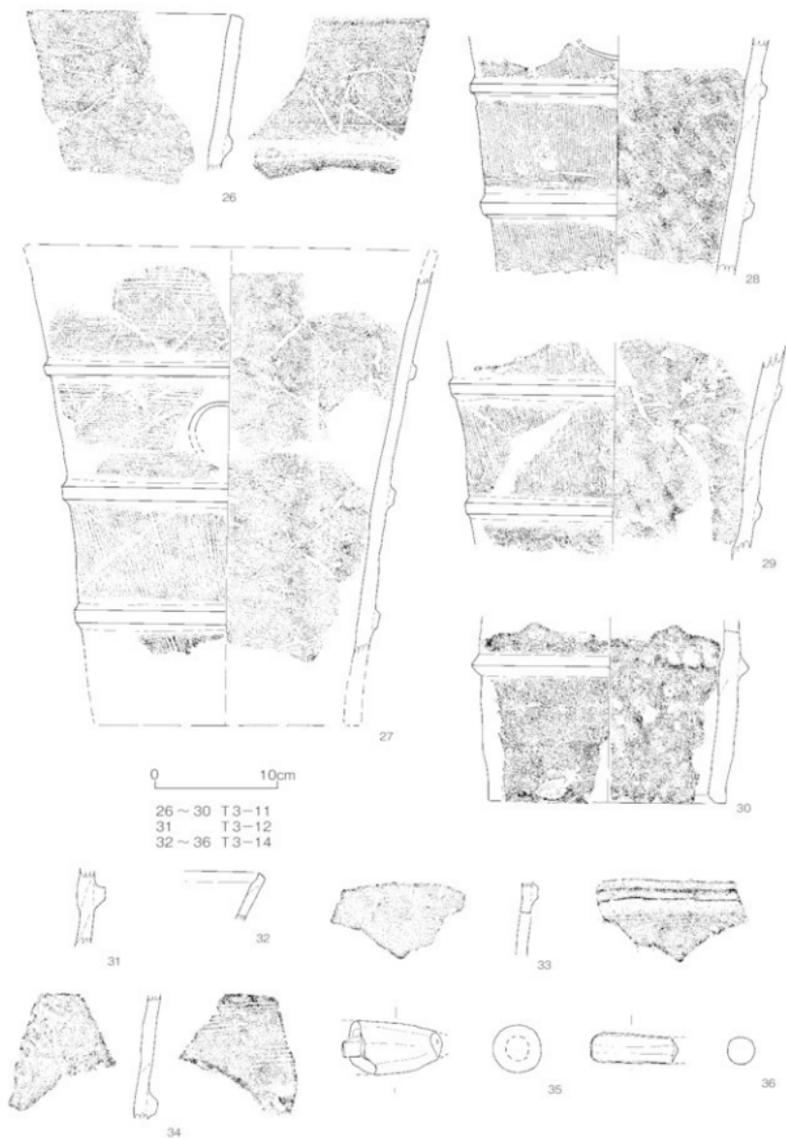


24



25

第36図 出土遺物(4) (埴輪, S=1:4)



第37図 出土遺物(5) (埴輪、S=1:4)

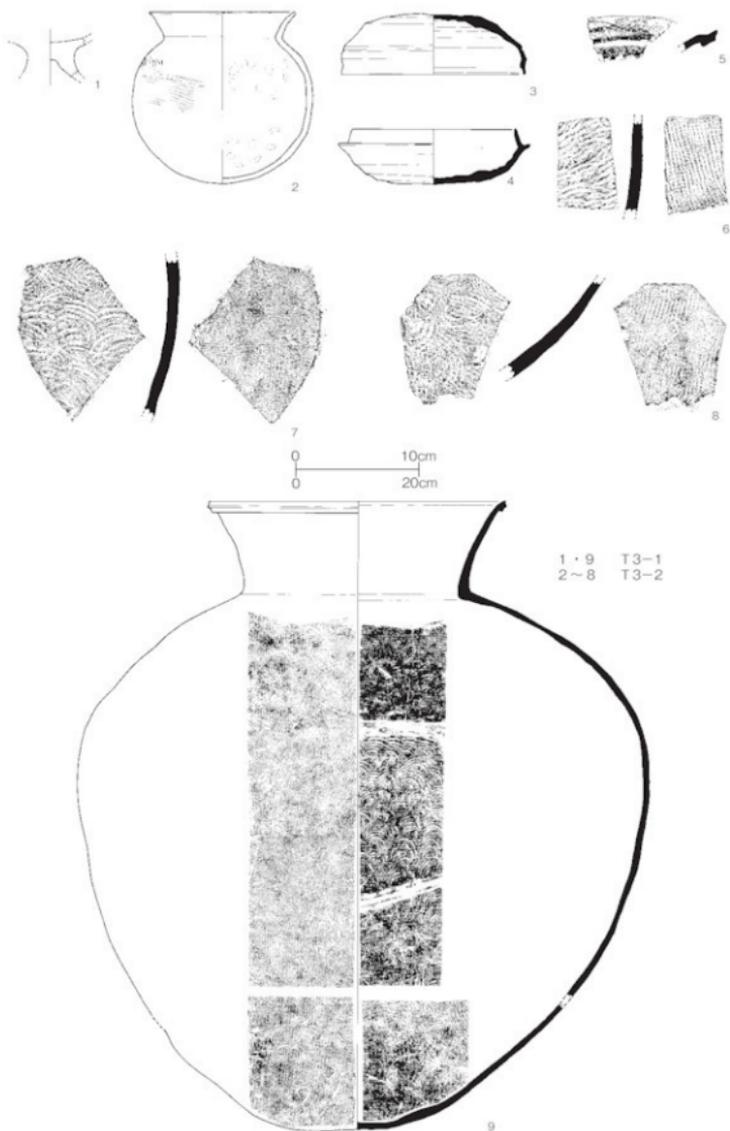
b. 須恵器、土師器、弥生土器（第38～41図）

1、9はT3-1からの出土である。1はトレンチ内のピット1から出土した弥生土器で、高杯の脚部片である。9は59号墳の周溝から出土した大型の甕で、口縁径47.6cm、器高1020cmを測る。球形の胴部から逆「ハ」の字状にのびる口頭部をもつ。口縁端部は肥厚させ、端面に強いナデが2段に施される。頭部外面には丁寧にナデが施される。胴部外面は、平行タタキである。内面は同心円の当て具痕が明瞭に残る。

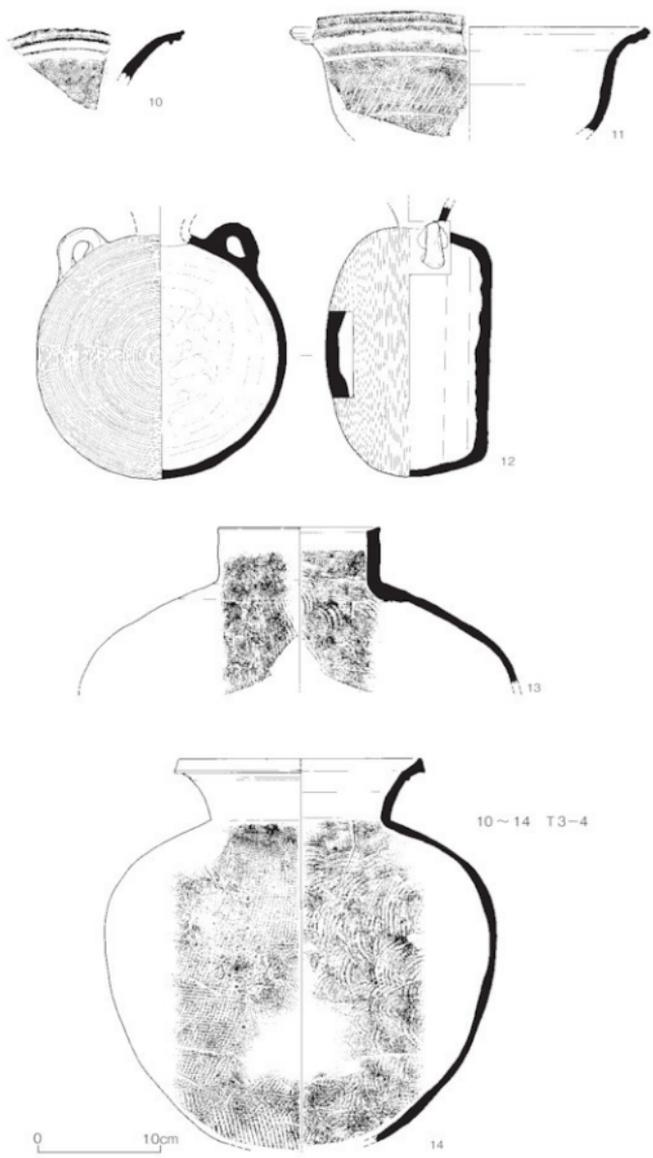
2～8はT3-2からの出土である。2～4は60号墳の墳丘基部の埋葬施設内、5～8は60号墳の東側の周溝内から出土した。2は土師器の甕である。体部から「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめている。体部は球形を呈する。体部外面にタテハケおよびヨコハケがみられるが、大半は風化している。内面には指頭圧痕が残る。3は完形の坏蓋である。口径148cm、器高49cmの大型品である。天井部と口縁部の境界には1条の凹線がみられ、口縁端部はナデにより若干内傾している。回転ヘラ削りは天井部の2/3の範囲に時計回りに施される。4は坏身である。口径132cm、器高45cmである。口縁の立ち上がりはやや内傾きみであり、端部は丸くおさめている。回転ヘラ削りは底部の1/2の範囲に時計回りに施される。5は広口壺の口縁部としたものである。小片のため口径は不明であるが、大きく外反する口縁部で、端部を外面に肥厚し面をなしている。肥厚した部分の直下には波状文が施される。6～8は甕の胴部である。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキの当て具痕が残る。7の外面はタタキ成形後、櫛状工具によるヨコ方向の調整がみられる。内面は同心円の当て具痕が明瞭に残る。8の外面は平行タタキの後にナデが施され、内面は同心円タタキの当て具痕がナデによって部分的に消されている。

10～14はT3-4からの出土である。T3-4は、南側に60号墳、北側に59号墳の周溝がそれぞれ検出されており、10、11が59号墳周溝、12～14が60号墳周溝からの出土である。10は甕の口縁部である。逆「ハ」の字状に大きく外反し、端部付近には2条の突線が走る。突線の低位には波状文が施される。11は高杯形器台の坏部と考えられる。やや丸みを帯びた坏部から緩やかに外反する口縁をもち、端部は斜め方向に面をなしている。外面は口縁端部付近および坏部との傾斜変換点付近に浅い凹線がみられ、坏部外面にはハケ状工具による調整の後、ヘラ状工具による斜線文が施される。内面は最下部に同心円タタキの痕跡がみられる。12は口頭部を一部欠いているが、ほぼ完形の提振である。やや外反する口頭部をもち、肩部に環状の耳を有する。体部の前面にはカキメが、背面はナデが施される。体部前面の内面には閉塞のための粘土板の痕跡がみられる。13は直口壺である。胴部からまっすぐに立ち上がる口頭部をもつ。胴部外面には平行タタキが施され、内面は同心円の当て具痕がみられる。当て具痕はナデによって一部消されている。14は球形の胴部をもつ甕である。口頭部は短く外反し、端部はわずかに肥厚させている。頭部の最上位に1条の突線が施される。胴部外面には平行タタキが施された後、ヨコ方向にカキメが施される。内面は同心円の当て具痕が残り、胴部下半の底部近くはナデによって消されている。胴部から頭部の屈曲部には指頭圧痕が明瞭である。

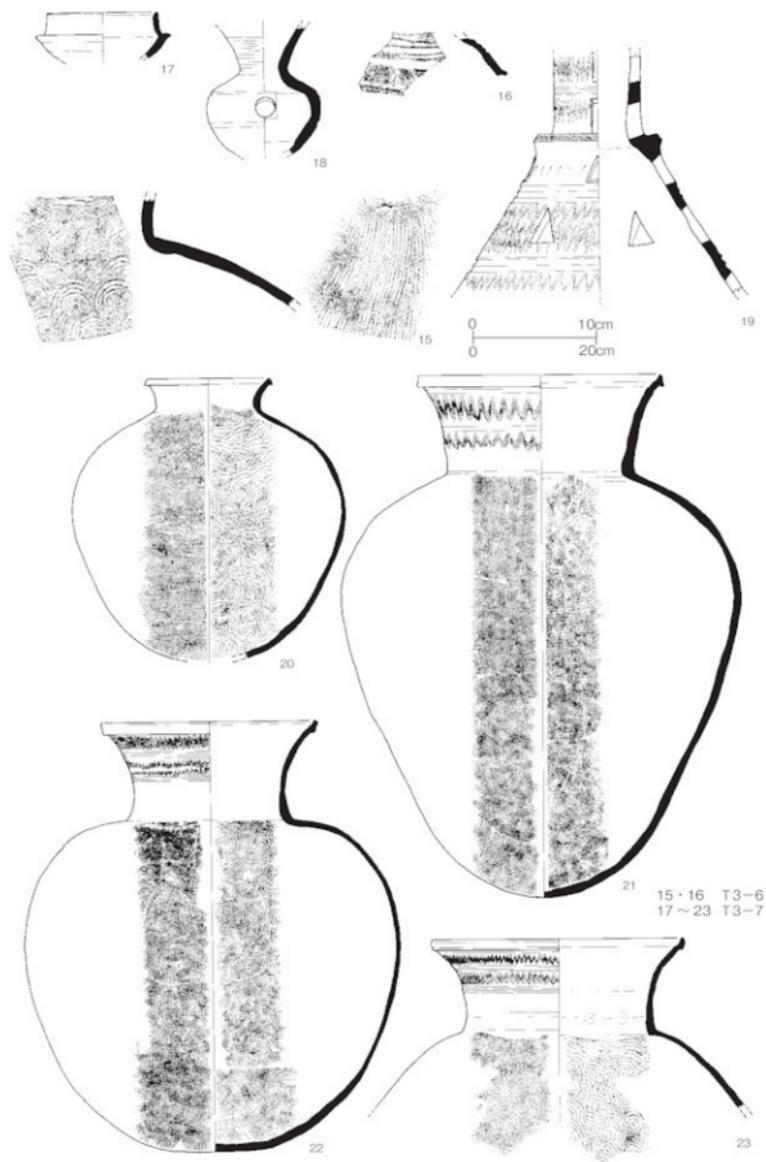
15、16はT3-6で検出した58号墳周溝からの出土である。15は甕の頭部から胴部にかけての破片である。外面は平行タタキが施され、内面は同心円の当て具痕がみられる。当て具痕はナデによって一部消されている。16は器台の脚部片である。2条の貼り付け突帯の上部にわずかに波状文がみられる。17～23はT3-7で検出した67号墳の西側周溝からの出土である。17は坏身である。復元口径9cm、残存高38cmを測る。立ち上がりはほぼまっすぐで、口縁端部には明瞭な段がみられる。底部には回転ヘラ削りが2/3程度の範囲に施される。18は甕である。口縁部を欠いている。肩部は強く屈曲し、体



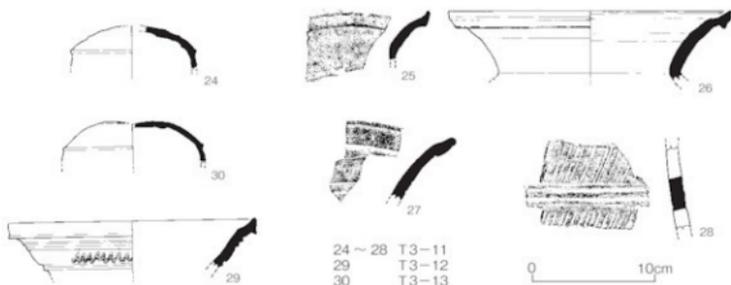
第38図 出土遺物(6) (須恵器ほか、9…S=1:8、他はS=1:4)



第39圖 出土遺物(7)(須惠器、S=1:4)



第40図 出土遺物(8) (須恵器、15~19…S=1:4、20~23…S=1:8)



第41図 出土遺物(9)(須恵器、S=1:4)

部との境界に稜をなしている。体部中央には直径1.5cmの円形の穿孔がなされ、頭部にはカキ目が施される。19は筒形器台の筒部および脚部である。筒部は2条の凹線によって上下2段に分けられ、それぞれに波状文が施されたのち、長方形の透孔が4方向に穿たれている。筒部と脚部の境界は段をなし、端面に斜め方向の刻目が施される。脚部は凹線によって3段に分けられ、上段に斜線文、中段および下段には波状文がそれぞれ施される。透孔は上段、中段に三角形のものが4方向にそれぞれ穿たれている。20～23は甕である。20は短く外反する口頭部をもち、端部はわずかに肥厚させている。胴部外面は平行タタキの後、ヨコ方向のカキメが施される。内面は同心円の当て具痕が残る。21は器高84.3cmを測る大型の甕である。口頭部は緩やかに外側に開き、端部は上下に肥厚させている。頭部外面は2条の凹線が2段に巡らされ、その間に波状文が施される。胴部外面は平行タタキのみられ、内面は同心円タタキの当て具痕のみられる。22も大型品で、器高69.5cmを測る。緩やかに外反する口頭部をもち、端部は上方に拡張し面をなしている。頭部外面は2条の凹線を2段に配し、間に細かい波状文が巡らされる。胴部外面は格子目タタキのみられ、内面は同心円の当て具痕のみられる。23は甕の上半部である。緩やかに外反する頭部をもち、端部は上下にわずかに肥厚させる。21、22同様凹線文、波状文が施される。胴部は平行タタキで調整され、内面は同心円の当て具痕のみられる。

24～28はT3-11で検出した67号墳周溝からの出土で、T3-7で検出した周溝と同じ古墳のものである。24は坏蓋である。口径は10cm程度になるものと推測される。天井部と口縁部の境界には段がみられ、天井部の回転ヘラ削りは広範囲に施される。25は広口壺の口頭部である。口縁部は短く外反し、端部は外側に肥厚させることによって面をもつ。頭部外面にヘラ記号の一部がみられる。26、27は甕の口頭部である。口縁部は逆「ハ」の字状にのび、端部は下方へ肥厚させる。27の頭部外面には沈線が2条施される。28は器台の脚部片である。ナデを施した後、3条の凹線によって2段に区切り、その後上段と下段にはそれぞれヘラ状工具による斜線文が施され、最後に長方形の透孔が穿たれている。

29はT3-12で検出した68号墳周溝からの出土である。高坏形器台の坏部と思われる。口縁端部は坏部からわずかに外側に角度を変え、下方に拡張させることにより面をなしている。坏部外面には口縁端部近くの屈曲部に2条、そこからやや下方に1条の突線がみられ、その間に波状文が施される。

30はT3-13の表土からの出土した坏蓋である。小片のため口径は不明だが、11.6cm程度になるものと推測され、残存高は3.9cmである。口縁部と天井部の境界には段がみられる。

(豊島)

### (3) 小結

3次調査では5基(59・60・66～68号墳)の古墳を確認した。いずれも墳丘盛土は無く、周溝のみ現存する。この内、2基(59・60号墳)については旧調査で確認されていたものである。59号墳は直径9.7mの円墳で、周溝内から貫石と思われる石や埴輪・須恵器が出土した。埴輪はヨコハケのものがあり、須恵器の特徴からTK47型式～MT15型式頃、60号墳は直径12mの円墳で、埴輪や須恵器が出土した。埴輪はタテハケのもので、埋葬施設の須恵器の特徴からTK10型式である。66号墳は直径8.6mの円墳で、出土遺物は見られないため時期は明瞭でない。67号墳は規模の詳細は不明だが、埴輪や須恵器が出土した。埴輪はヨコハケのものがあり、須恵器はTK47型式～MT15型式頃が見られ、これら須恵器に時期幅が見られる事から追葬がおこなわれた可能性が大きい。なお、須恵器や埴輪の出土した68号墳については、5次調査で補足調査をおこなった。

(小郷)

#### 4. 4 次調査（平成 16 年度）

古墳群の大半が存在する丘陵の西側低丘陵部に設定した（第 42 図）。古墳（残丘）が広範囲に点在するため、これらの確認と八幡神社北側、現在は畑の部分に古墳が複数（3 基）存在したとの情報があったため確認した。なお、調査地は畑として大部分が使用されているため、トレンチの位置や規模等に制限があった。

##### （1）トレンチの概要

###### トレンチ 1（T4-1、第 43・44 図）

八幡神社北側の畑に設定した幅 1 m、長さ 14.9 m のトレンチである。土層は耕作土の下に第 2 層がありその下が地山面である。トレンチ北側には後世のものと思われる掘り込みがある。南側には不正形の土壌があるが、出土遺物が無いため時期は不明である。その北側にあるのは、東西方向の暗渠排水で石及び瓦で作られている。この瓦から近代以降のものである。出土遺物も瓦や陶磁器が少量ある。

###### トレンチ 2（T4-2、第 43・44 図）

T4-1 の西側に設定した幅 1 m、長さ 11.3 m のトレンチである。土層は耕作土の下に第 2 層がありその下が地山面である。トレンチの中央南寄りで溝 1 条を検出した。幅 0.8 m、深さ 0.3 m を測り内部からの出土遺物は無いが、その形状や鉄刀片（第 49 図 10）が周辺から出土していることなどから、古墳の周溝の可能性が高い。このトレンチは畑の事情もあり北側に延長することができなかったため周溝の続きは確認できていない。かつて古墳が存在していた事から、本溝を周溝と考え 72 号墳と呼称する。その他の土壌や柱穴は出土遺物が無いが、埋土が黒灰色土のため、古墳時代以前の弥生時代の可能性が大きい。その他の出土遺物は瓦や陶磁器片である。

###### トレンチ 3（T4-3、第 43・44 図）

T4-2 の西側に設定した幅 1 m、長さ 12.1 m のトレンチである。土層は耕作土の下に第 2 層がありその下が地山面である。北寄りで方形住居（SH2）の一部を検出した。ちょうどコーナー付近で、床面には幅 1 m 程の 1 段高いベット状遺構が北辺にあり、その付近で柱穴 1 本を検出している。また、土層観察から床面中央付近には焼土面が見られ、特に西壁には隣接して土器（壺・甕・高坏、第 49 図 1・3・5）3 点が、さらに東壁南側壁溝附近にも土器（甕、同 4）が見られ、ベット状遺構の北側壁溝附近には小形の土器（同 2）が出土した。その他砥石（同 7）が 1 点出土している。その他の遺構として柱穴が多数あり、南側では現状で 3 個が一一直線に並ぶ。おそらく建物（SB1）になるものと推測される。柱穴の深さは 29～45 cm で、柱間は 1.65～1.8 m を測る。柱穴 1・2 から土器片が少量出土している。位置的には住居跡に近接するため、時期は異なるものと推測される。

###### トレンチ 4（T4-4、第 43・44 図）

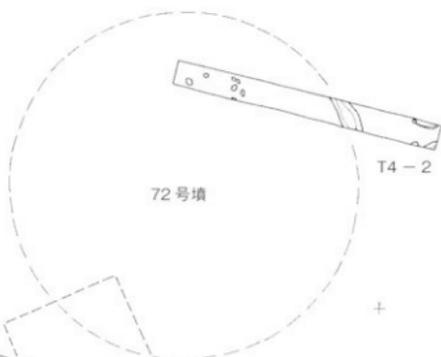
T4-3 の西側に設定した、幅 1 m、長さ 18 m のトレンチである。土層は耕作土の下に第 2 層がありその下が地山面である。トレンチ中央北寄りに柱穴 2 個が並ぶ。トレンチ 3 同様建物（SB2）の一部と推測される。柱穴の深さ 24・45 cm、柱間は 2.1 m を測る。いずれの柱穴からも土器片（弥生か）が少量出土している。またこれの北側にある溝は、第 2 層の途中段階から形成されているもので埋土は黒灰色土、土器片（弥生か）が出土する。これを周溝と考えトレンチ南側の段を墳端ととらえることも可能であるが、ややいびつであるためここでは保留しておきたい。出土遺物として須恵器、土師器、弥生土器、陶磁器片がある。

X=650



T4-1

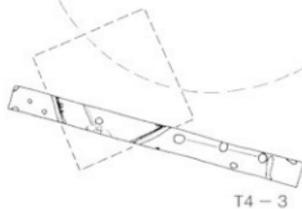
Y=640



T4-2

72号墳

Y=660



T4-3

Y=680

0 10m



T4-4

第43図 トレンチ1~4 (T4-1~4) 配置図 (S=1:200)

#### トレンチ5 (T4-5, 第45・46図)

古墳状の残丘部(8×9m)の西側に設定した、幅1m、長さ14mのトレンチである。土層は耕作土の下に第2層がありその下が地山面である。トレンチ東側で幅0.9m、深さ0.25mの周溝を確認した。埋土は1層で中から石が1点出土している。1点のみである事から貫石かどうかは不明である。出土遺物は少量の土器片がある。その他遺構として、柱穴や土壇が数個ある。柱穴から土器が出土するものがあることから、これらは弥生時代のものと思われる。なお直線のな掘り込みは畑の造成に伴うものである。出土遺物として須恵器、土師器、陶磁器がある。

#### トレンチ6 (T4-6, 第45・46図)

残丘の北側に設定した、幅1m、長さ10mのトレンチである。土層は耕作土の下に第2層があり、その下は地山面である。トレンチの南側で周溝の落ち込みを確認した。ただ、地形的にみて周溝は全周せず、このあたりで解消している。周溝の埋土は1層で部分的に淡黒灰色土のブロックを含む。なお北側では下層の住居跡を削っている。住居跡は円形住居と思われるが壁溝が部分的にしか存在しない。深さ35cmの柱穴を1個検出している。この住居跡に伴う遺物は無いが、出土遺物とし土師器(第49図6)や陶磁器、瓦、少量の弥生土器片がある。このためこの住居跡は弥生時代のものと考えられる。

#### トレンチ7 (T4-7, 第45・46図)

残丘の南側に設定した、幅1m、長さ4.5mのトレンチである。土層は耕作土の下が地山面である。南側で周溝の落ち込みを検出し墳端部分を確認した。埋土は1層で出土遺物として須恵器、弥生土器がある。なお、北側で検出した落ち込みは、途中までしか調査していないが、埋土状況から後世のものである。

トレンチ5～7の結果、この残丘は径17.5m程の円墳であったことがわかり、その後周囲が削られ現状になっている。本墳は71号墳と呼称する。

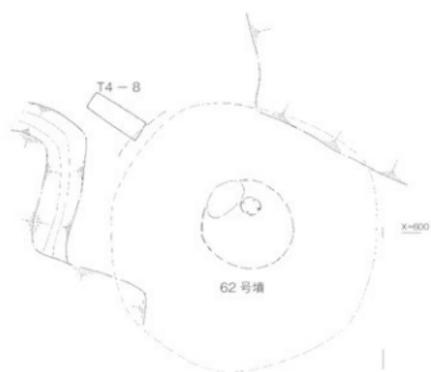
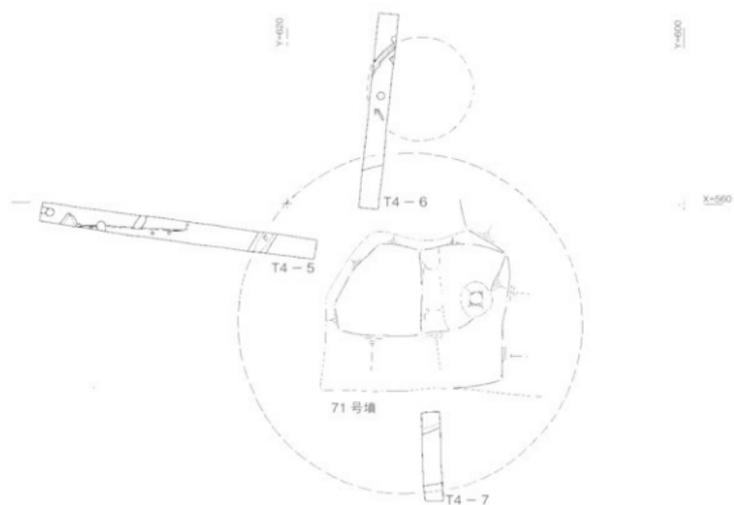
#### トレンチ8 (T4-8, 第45・46図)

墳丘の存在する62号墳の北西周溝部分に設定した幅1m、長さ3mのトレンチである。土層は3層でその下が地山である。この地山面をよく観察すると東側で傾斜変換点が見られこの部分を墳端として捉えることが可能である。このラインを第45図に示すと現状での墳端ラインの外側になり、流土を考えればほぼ墳端として考えてよからう。出土遺物として須恵器(甕)がある。本62号墳は反対側の墳端は捉えていないが、径15m程の円墳である。なお、墳頂には径1m、深さ2m以上、断面がフラスコ状の穴(羊を保管する)が掘られていて、その廃土が北西側を中心に置かれていた。今回の調査時にこの廃土についても精査をおこない、その後土は穴にもどした。精査の結果、須恵器片、土器片、鉄鎌(第49図8・9)2点が出土した。この事から埋葬施設の一部がすでに破壊されていることが考えられる。

#### トレンチ9 (T4-9, 第47・48図)

本古墳群の西端に単独にある残丘(11×13m)があり、元々お稲荷様が祭られていたため、狐塚と呼ばれている。現在お稲荷様は移転しており、その石段のみが残り、周囲は畑となっている。その東側に設定した幅1m、長さ8mのトレンチである。土層は耕作土の下に第2層があり、その下が地山面である。この地山面はすでに上部が削平されているのか、元々の土層なのか礫を多く含む土層である。トレンチの東端で電柱の支えを埋設した土壇があり、その西側にも電柱埋設に関連する土壇がある。それら以外の遺構は一切存在しない。出土遺物も陶磁器や鉄釘、土器片があるのみで、古墳に伴うものは無い。

#### トレンチ10 (T4-10, 第47・48図)



第45図 トレンチ5～8 (T4-5～8) 配置図 (S=1:250)

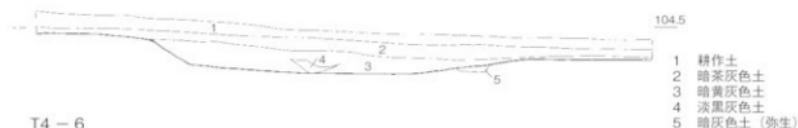
残丘の南側に設定した幅1m、長さ11mのトレンチである。途中に木がありトレンチは2分されている。土層は耕作土の下は地山である。遺構は北側に落ち込みがあるが、これは土層から新しいものである。その他の遺構は一切見られない。出土遺物は瓦、陶磁器、弥生土器片があるのみで古墳に伴うものはない。

トレンチ9・10の結果からこの残丘が古墳である明確な確証は得られなかったが、少なくともこの残丘の断面に河原石が見られ葺石と推測されることや周囲の状況から、かなり削平は受けているものの、古墳であるものと思われる。ただ、周囲の畑でも須恵器など一切見られないため、時期は少し古くなる可能性がある。本墳は63号墳である。

(小塚)



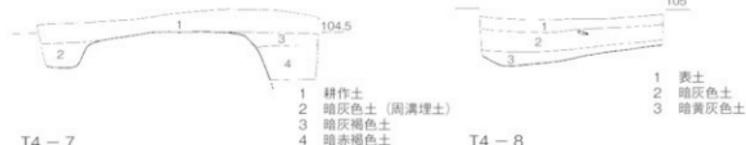
T4-5



T4-6

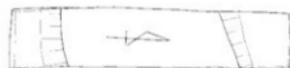


0 2m

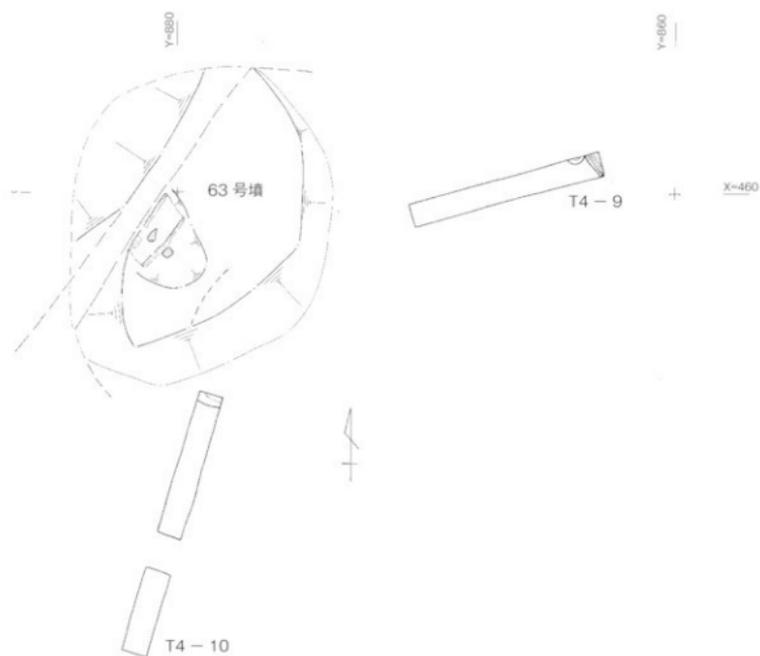


T4-7

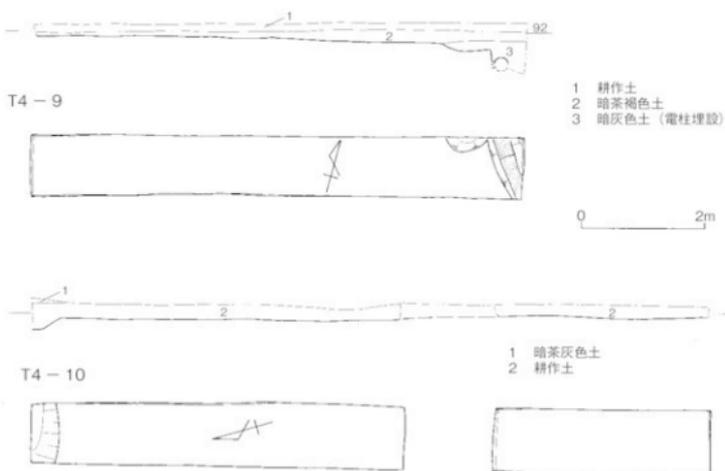
T4-8



第46図 トレンチ5～8 (T4-5～8) 平面・土層図 (S=1:80)



第47図 トレンチ9・10 (T4-9・10) 配置図 (S=1:200)



第48図 トレンチ9・10 (T4-9・10) 平面・土層図 (S=1:80)

(2) 出土遺物

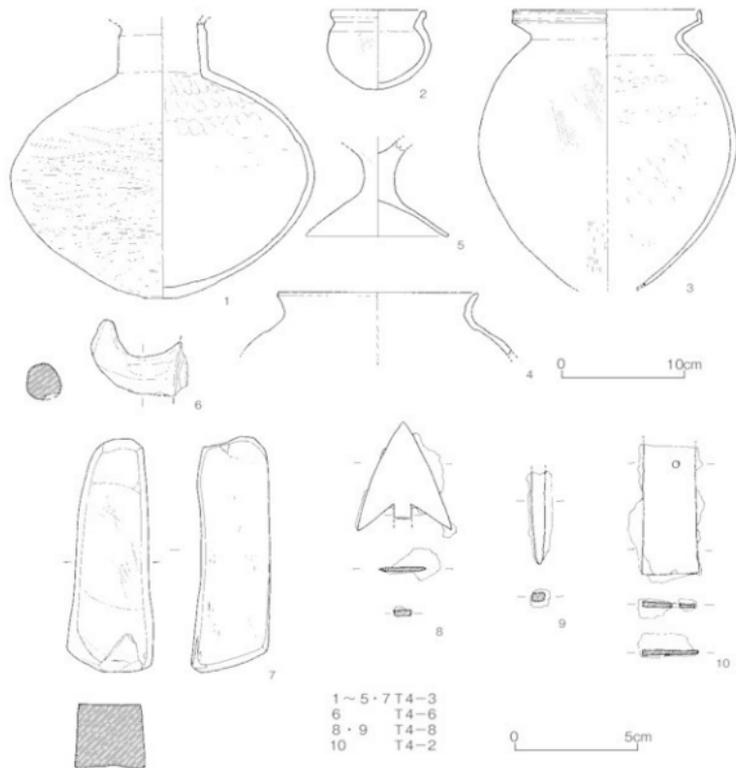
a. 土師器、鉄器、石器 (第49図)

1～5、7はいずれもT4-3で検出した堅穴住居跡1出土の土師器である。1は二重口縁壺である。ソロバン玉形の体部から筒状にのびる頸部をもつ。外反し端部を拡張させる口縁部をもつが、欠損している。2は小型の鉢である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部を丸くおさめている。外面はハケ調整である。3、4は甕である。3の口縁端部は上方に拡張させている。外面はハケ調整である。5は高坏の脚部で、短く開く形状を呈する。7は砥石である。長さ95cm、幅35cm、厚さ30cm、重さ1775gを測る。

6は瓶の把手である。T4-6からの出土である。

8、9はT4-8付近、現存する62号墳の攪乱土中からの出土である。8は平根式の鉄鎌で、残存長39cmを測る。9は鉄鋸の茎部分と考えられる。残存長3.7cmを測る。

10はトレンチ2の耕作土中から出土した鉄刀の茎部分である。断面形はわずかに台形状を呈する。茎



1～5・7 T4-3  
6 T4-6  
8・9 T4-8  
10 T4-2

0 5cm

第49図 出土遺物 (1～6…S=1:4, 7～10…S=1:2)

端から4.5 cm、茎の中心から若干右よりの位置に、直径0.3 cmの目釘孔が穿たれている。残存長は5.2 cmである。

(豊島)

### (3) 小結

古墳群の存在する西側の比較的なだらかな丘陵部を中心に調査をおこなった。八幡神社の北側では、かつて3基の古墳が存在していたとされるが、T4-2で72号墳の周溝の一部を検出したが、調査範囲の制約もありその他の古墳の痕跡は確認できていない。T4-1では、かなり地山が削平されている事が推測され、畑の広範囲で須恵器が採集される事から言い伝えどおり古墳が複数存在していた可能性は大きい。その他点在する古墳の内71号墳は現在残丘のみであるが周溝を確認でき、直径17.5 mの円墳である。須恵器の出土があるが時期の詳細は明瞭でないが6世紀前半頃の可能性が大きい。墳丘の存在する62号墳では、墳端の確認と須恵器、鉄鎌などの出土遺物があった。直径15 m程の円墳で、時期は6世紀前半頃の可能性が大きい。西端に単独で存在する63号墳は周溝や出土遺物は確認されなかったが、残丘部分に葺石らしき石が複数見られる事から古墳であることは間違いないものと思われる。時期は須恵器が見られない事から中期前半頃の所産か。また、T4-3・6では建物や古墳時代の住居跡を検出し、その他のトレンチでも柱穴などが複数見られる。この事から、弥生から古墳時代の集落が広範囲に存在する事も新たに判明した。

(小郷)

## 5. 5次調査（平成17年度）

調査の最終年度のため東側丘陵部の北側を中心に可能な限りトレンチを設定した。トレンチは10箇所である。

この丘陵北側附近は檜や杉が本来植林されていたが、平成16年の台風によりほとんどすべてが倒れてしまった。特に北側の平成14・15年度に調査した部分がひどく調査箇所がわからないような状態であった。またこの部分については、ほとんどが民有地であったため、岡山県教育委員会や地権者の協力を得ながら倒木の切り倒しをおこなったものの、搬出するのに費用がかかるため、ほとんどが現地に残される結果となった。このため必然的に調査できる箇所が限られる結果となり、補足的な調査ができず今後の課題となった部分もある。

### (1) トレンチの概要

#### トレンチ1（T5-1、第50・51図）

古家碑の東側に設定した幅1m、長さ10.1mのトレンチであるが、前述のように倒木の関係で本来は東西方向に設定する予定であったがやや北に振る形となった。土層は表土の下は地山面である。ただこの地山については、礫を含むものであったため念のため部分的に掘り下げたが、同様な土層が続く自然地形と判断した。この掘り下げ時に確認できた楕円形状の土壌が1基中央付近にあり内部から弥生土器が出土した。第50図がその平面図である。土壌は現状で幅0.9m、長さ1m以上、深さ0.35mを測り、埋土はほぼ1層である。土器は底附近からやや浮いた位置で出土している。裏の胴部で（第58図1）横になった状態である。接合しないが口縁部と底部片も出土している。西側にある石列は古家碑の外郭ラインで、T5-2でもその続きを確認している。おそらくこの碑が明治6年に建てられていることからこの石列はその時期のものである。その他古墳に伴う遺構は無い。出土遺物としては、須恵器や埴輪片（第55図1）がある。

#### トレンチ2（T5-2、第50・52図）

古家碑の西側に設定した幅1m、長さ20mのトレンチで、第3次調査で確認した68号墳の補足調査である。南側で幅1.1m、深さ0.15mの溝を確認しこれを周溝と考えたが、第3次調査で確認した周溝は幅4～5.8m、深さ0.8mもあるしっかりとしたもので、本周溝とは規模がまったく異なる。このため同一でない可能性も考え、トレンチをかなり北側に延長したがそれらしき溝は存在しなかった。このためこのトレンチ2の辺りは元々地形が高いため、それほど深い周溝は掘らず、逆に低い部分はより古墳を大きく見せるために深い溝を掘ったのではないかと推測する。このように地形的制約のため場所によって周溝の規模が違うものと解釈したい。なお、この周溝に切られる形で幅0.9m、長さ1m以上、深さ0.8mの遺構が存在する。これは内部から須恵器（第58図4～7）や土師器（同2・3）がまとまって出土することから、埋葬施設と考えたい。第52図平面図を載せている。土層は第4層を底に敷きその上に木棺を置いたものと考えられ、第2層がそれで第3層は裏込めである。全掘していないため他の副葬品は不明である。その他中央と北側にある石列はT5-1同様古家碑に伴うものである。この埋葬施設の南には土壌の一部があり内部から弥生土器が出土している。住居跡の可能性もある。その他の出土遺物として北側の表土より石器が2点（第60図1・2）出土した。

#### トレンチ3（T5-3、第50図）

T5-2の西側の畑に設定した幅1m、長さ20.1mのトレンチである。耕作土の下は地山面である。

遺構として検出したのは中央西寄りにある住居跡（SH4）の壁溝である。この壁溝の残り具合から、周囲がかなり削平されていることが伺える。この住居跡は隅丸方形と推測され、内部にもう1本溝があり一度拡張されている可能性もある。出土遺物として少量の土器片があり弥生時代のものである。

#### トレンチ4（T5-4、第53図）

T5-3の南に設定した幅1m、長さ55mのトレンチである。土層は耕作土の下が地山である。中央西寄りのやや離れた位置で2条の溝を検出した。東側は幅0.5m、深さ0.16m、西側は幅0.8m、深さ0.18mで、いずれも埋土は1層である。これら溝は古墳の周溝の一部と考えられるため、T5-5を直交する形で設定した。周溝内の出土遺物は皆無である。また、この墳丘内の中央東よりで円形状の土壌を検出したが、出土遺物も無く、床面が平らでないため埋葬施設の一部とは断定できない。その可能性はある。その他の遺構として西端で住居跡（SH5）の落ち込みを検出した。トレンチの幅が狭いため明瞭ではないが、緩やかな落ち込みがあり、壁溝の一部を検出しこの溝内には柱穴が1個ある。内部から弥生土器片が、溝内から石が1点出土した。この住居跡の東にある円形土壌は径1.2m、深さ0.5mで埋土は1層で出土遺物はない。また、トレンチの東側でも柱穴らしきものはあるが、明瞭に建物などになるものは現状では見られない。

#### トレンチ5（T5-5、第53図）

T5-4で古墳の周溝が検出されたため、この北側に直交する形で設定した幅1m、長さ31mのトレンチである。トレンチの中央で幅0.7m、深さ0.12mの溝が検出された。埋土は1層である。これによりT5-4で検出した古墳は径6.7m程の円墳である事が判明した。出土遺物は皆無であるため、この円墳の時期は不明である。本墳は70号墳と呼称する。

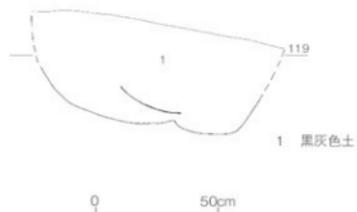
#### トレンチ6（T5-6、第54図）

T5-4の南側に設定した幅1m、長さ10mのトレンチである。土層は耕作土の下にはブロック状の土層（第3～5層）がある。これは、明治の開墾時のものと思われ、多くは壊された古墳の盛土などである。遺構は見られないが、中央西寄りに旧トレンチの跡と思われる掘り込みがある（第13層）。出土遺物として須恵器（第59図8～11）、埴輪、弥生土器、陶磁器などがある。

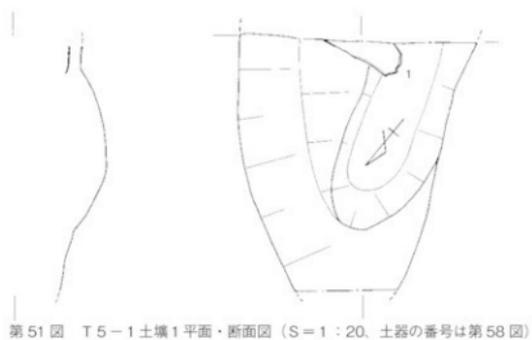
#### トレンチ7（T5-7、第54図）

T5-6の南に設定した幅1m、長さ20mのトレンチである。かつてこの辺りに円墳（57号墳）があったためこれを確認するために設定したトレンチでもある。土層は耕作土の下にT5-6と同様開墾時の堆積がかなりある。第3～5層がそれである。これを細かく観察すると北側では北から盛っている状況が読み取れる。この下層南側には幅3m、深さ0.5mの周溝が見られ、土層は1層で内部から埴輪（円筒・朝顔・馬、第55～57図3・4・6・8～16）、須恵器（第59図14・15）などが石などとともに多量に出土した。また、この周溝の南側には盛土の一部が観察される。第7・8層がそれである。この盛土上面には埴輪の集積が見られる。なお、本墳築造時の地山は第10層の下面であるがこの下層も同様の土層である。このため部分的に掘り下げ確認をおこなったが北側では明瞭でない部分がある。この第10層からは須恵器（第59図16）などが出土しているため、少なくともこれより下が地山面である。おそらく地山は北に向かって傾斜しているようである。トレンチの北側にある第13層の掘り込みは旧トレンチの跡（幅0.85m、深さ1.25m）である。この旧トレンチも地山面が明瞭でないため、かなり深い場所まで掘り下げている。

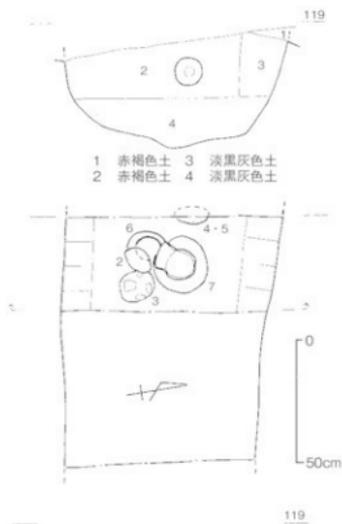
#### トレンチ8（T5-8、第54図）



1 黒灰色土



第51図 T5-1土壌1平面・断面図 (S=1:20、土器の番号は第58図)



1 赤褐色土 3 淡黒灰色土  
2 赤褐色土 4 淡黒灰色土

第52図 T5-2埋葬施設平面・断面図 (S=1:20、土器の番号は第58図)

T5-6と7の間に設定した幅1m、長さ10mのトレンチである。土層の状況はT5-7と同様である。遺構らしきものは無い。トレンチの南側にある第13層の掘り込みは旧トレンチの跡である。出土遺物は埴輪(第55図2)、須恵器(第59図19~21)、弥生土器などがある。以上トレンチ7・8の結果57号墳は確認されなかった。57号墳はこのトレンチの外にあるのか、すでに存在しないのか現状では不明である。

#### トレンチ9(T5-9、第54図)

1次調査のトレンチ9(T1-9)の南に設定した幅1.2m、長さ18.3mのトレンチである。土層は耕作土の下が地山面である。トレンチ南寄りて柱穴や土壌を検出した。柱穴1(P1)から弥生土器片(第59図24)が出土した。その他出土遺物として埴輪や須恵器、陶磁器、瓦片がある。

#### トレンチ10(T5-10、第54図)

3次調査のT3-8の南西側に設定した幅1m、長さ13mのトレンチである。土層は第1層の下が地山である。トレンチ東寄りて幅0.8、深さ0.28mの溝を1条確認した。これが周溝とすればもう1条あるはずであるが、西側にはみられない。また3次調査のT3-8でも溝はない。このためこれを周溝と考えることは、現状では少し無理がある。この溝からは弥生土器が出土しているため、同時代のものと解釈したい。その他遺構として柱穴が複数あり、P1(第59図24)・2から弥生土器片が出土している事からこれら遺構は同時代のものと考えられる。

(小郷)

## (2) 出土遺物

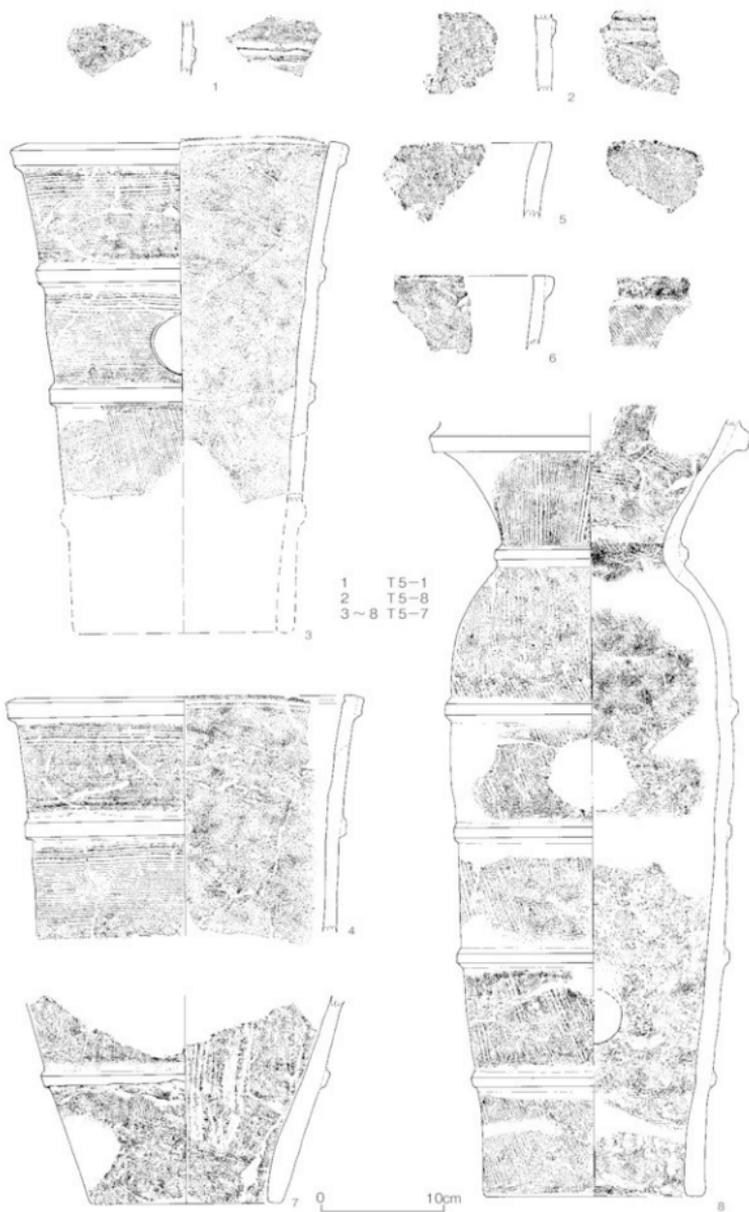
### a. 埴輪(第55~57図)

1はT5-1出土で、外面はヨコハケ、内面はナデである。

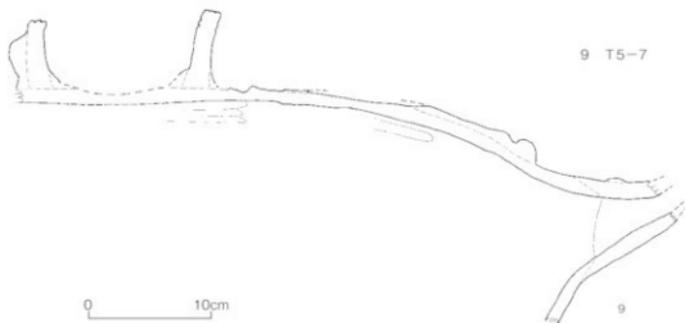
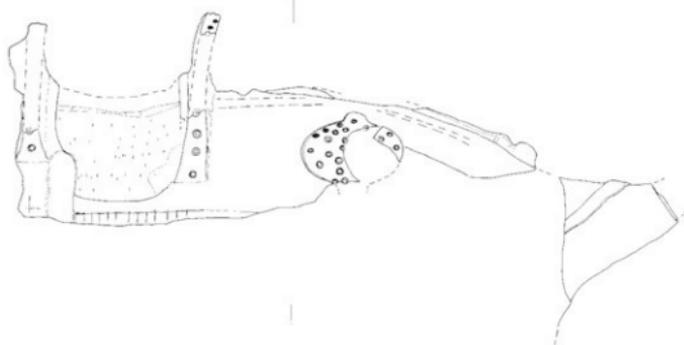
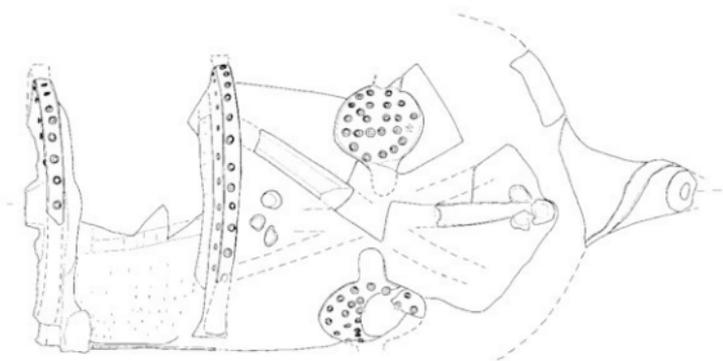
2はT5-8出土で、外面はタテハケ、内面はナデである。

3~17はT5-7出土で、3~7は円筒埴輪、8は朝顔形埴輪、9~17は形象埴輪である。円筒埴輪は3・4・6のように口縁部に突帯がめぐるものがある。この突帯は幅2cm程で扁平なものと6のような1cmで端面が弧状のものがある。3・4は3・4段目の外面がヨコハケ、2段目はタテハケで、内面はナデで端面には1条の沈線がめぐる。円孔は2・3段目に見られる。5は内外面ともタテハケである。6は外面がタテハケで内面はナデである。6は底部の可能性もある。7は底部で外面はタテハケだが、端部付近は横方向のナデによりハケを消している。内面は縦方向のナデで端部付近は横ナデである。8は口縁部以外がほぼ復元できる。外面はタテないしは斜め方向のハケで内面は受部でヨコハケが見られるが、他はナデである。円孔は2・4段目で確認できる。3段目は破片が無く不明である。2段目のものは1個のみである。

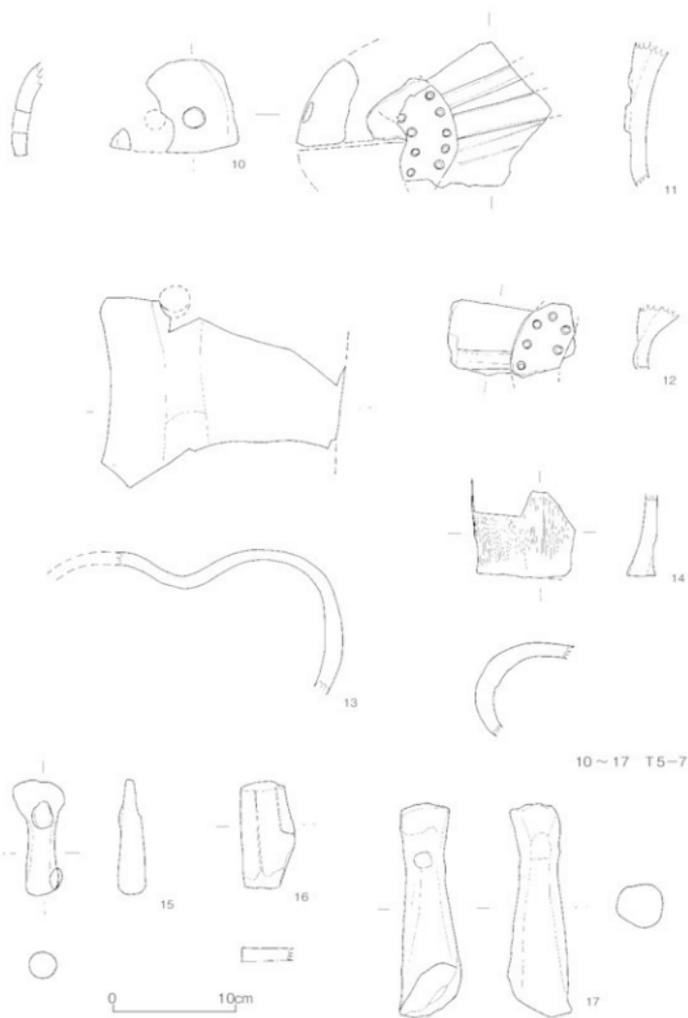
9~14・16は馬形埴輪である。9は鞍から尻尾の部分の上部である。鞍は前後とも復元でき、上部端面や前後の面に円形刺突文で装飾を施すが、前輪は前面のみ後輪は両面の上部に見られる。障泥部分は剥落する。尻繫がタロスの形で表現され、杏葉が左右2個あり円形刺突文で全面が装飾される。楕円形の下部が下へ続く事から剣形杏葉を表現している可能性がある。雲珠が前後2箇所、3個の粘土塊で表現されているが、ほとんどが剥落している。10~12は顔の部分で10は片方の鼻孔のみ現存し、11・12は手綱と鏡板で、鏡板は円形刺突文で装飾される。f字形鏡板を表現しているものと思われる。13は後ろ足の付け根部分と思われ、上部の円孔はお尻付近と思われる。14は足の先端部分で外面にはタテハケを施している。15は端部が広くなった棒状のもので、2箇所剥落痕がある。用途は不明で



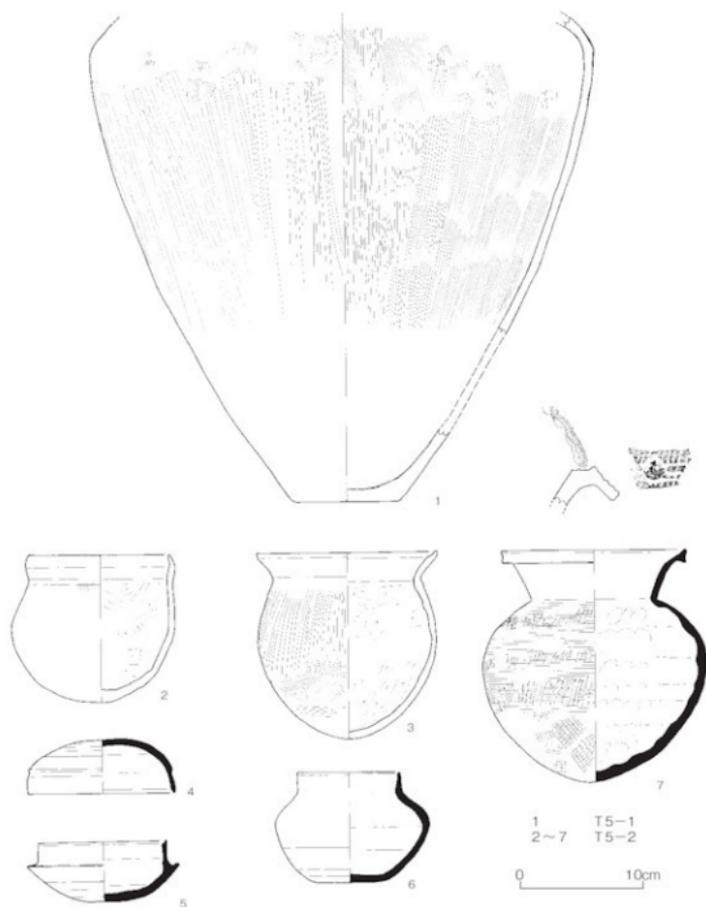
第55図 出土遺物(1) (埴輪, S=1:4)



第56図 出土遺物(2) (埴輪、S=1:4)



第57図 出土遺物(3) (埴輪, S=1:4)



第58図 出土遺物(4)(須恵器ほか、S=1:4)

ある。16は外面に線刻があり、内面は剥がれた部分である事から障泥の一部と推測される。17は人物  
植輪の手である。

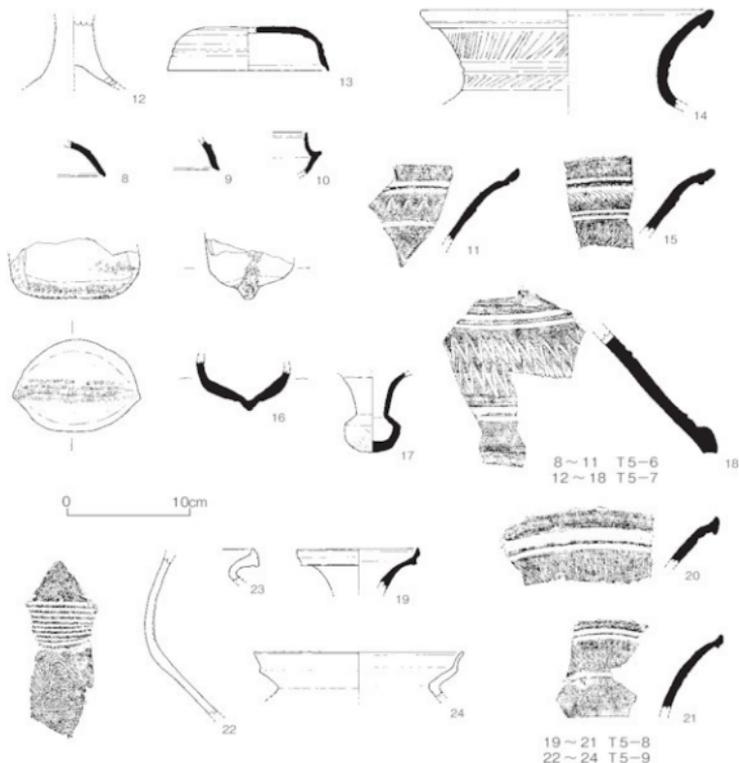
(小略)

b. 須恵器、土師器、弥生土器 (第58・59図)

1はT5-1土塚内から出土した壺である。頸部を欠き、口縁部、体部、底部が出土した。口縁部は大きく外反し、外側に格子目文を施した後に凹形浮文を付し、上面には波状文を施している。体部は下半のみであるが、外面全体にハケ調整を施した後にヘラミガキを行っている。内面はハケ調整のみである。

2~7はいずれもT5-2で検出した埋葬施設からの出土である。2は土師器の甕である。球形の体部で、わずかに内湾する口縁部をもつ。外面はタテハケが施され、内面はヘラケズリ調整がなされている。3の甕は2よりも縦長の形状を呈し、「く」の字状に開く口縁部をもつ。端部は上方へ小さく拡張させる。

4、5は坏蓋、坏身のセットである。坏蓋は口径120cmを測り、天井部の回転ヘラ削りは天井部の2/3程度の範囲に施され、口縁部との境界には鈍い凹線がみられる。口縁端部には段がみられる。坏身は口



第59図 出土遺物(5) (須恵器ほか、S=1:4)

径 10.4 cm を測り、底部の 2/3 程度の範囲に回転ヘラ削りが施されており、口縁端部には段がみられる。6 は短頸壺である。上方に立ち上がる口頸部をもち、端部は丸くおさめられる。外面底部には回転ヘラ削りが施される。7 は広口壺である。口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方に拡張させる。体部外面は上半部に平行タタキ、下半部に格子目タタキがみられ、その上からカキ目が施される。

8～11 はいずれも T5-6 の表土からの出土である。8、9 は坏蓋の小片で、口径は不明である。8 は天井部と口縁部との境界付近に浅い沈線がみられる。端部には沈線が巡る。9 は天井部と口縁部との境界に明瞭な段をもち、口縁端部には沈線が巡る。8 よりも若干古い様相を呈する。10 は坏身の小片で、口縁端部に沈線が巡る。9、10 は同時期のものとしてよいと考えられる。11 は甕の口縁部と考えられる。口縁部下端には沈線がみられ、外面に沈線および波状文が施される。

12～18 は T5-7 からの出土である。12 は 69 号墳の盛土内から出土した土師器の高坏脚部である。13 は明治時代の造成土中から出土した坏蓋で、口径 130 cm、器高 35 cm を測る。天井部の 2/3 の範囲に回転ヘラ削りが施され、口縁端部は丸くおさめられる。14、15、18 は 69 号墳の周溝から出土した須臾器である。14 は甕の口頸部である。緩やかに外反する口頸部で、端部は外側に肥厚させている。頸部には凹線、斜線文がみられる。15 は高坏形器台の口縁部と考えられる。上下に肥厚させる口縁部をもつ。外面には凹線、波状文が施される。18 は器台の脚部片で、外面に凹線、波状文が施され、2 段目の凹線の上に三角形の透孔が穿たれている。16 は類例が判明しなかったが、皮袋形甕と考えている。下半部のみ出土であり、全体の形状は不明である。正面からは長方形の箱形であるが、側面が湾曲しているため、底部側から見ると卵形を呈する。閉じ合わされた底部の下端には竹管文が 5 列に施される。トレンチ中央の地山付近で出土した。17 はトレンチの北壁付近で出土したもので、子持器台あるいは子持蓋の一部と考えられる。ラッパ状に開く口頸部をもつ甕と同様の形状である。

19～21 は T5-8 からの出土である。遺構に伴うものではなく、トレンチ内の下層からの出土である。19 ははそうの口頸部と考えられる。ラッパ状に開き、口縁端部は上方に大きく拡張させる。20、21 はいずれも甕の口頸部で、端部を上方に拡張させる。外面には凹線、波状文が施される。

22～24 は T5-9 出土の弥生土器である。22、23 は遺構に伴わず、24 はピット 1 からの出土である。22 は甕の頸部から体部にかけてのもので、外面に沈線および彫描による直線文、波状文が施される。23、24 は甕の口縁部である。23 は端部をやや内傾ぎみに拡張させる。24 は「く」の字状の頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部をもつ。

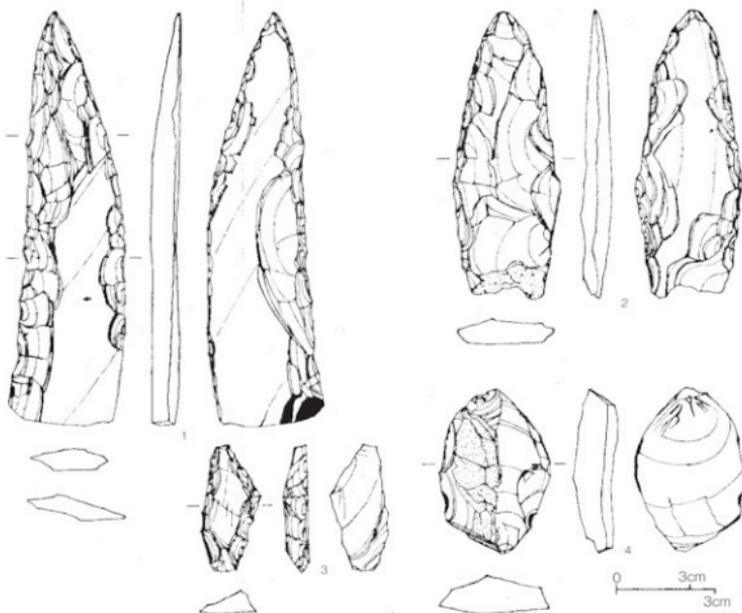
(豊島)

#### c. 石器 (第 60 図)

第 60 図 1・2 は、共に T5-2 の表土より出土した。両者とも槍先形尖頭器の未成品と考えられる。1 は厚さ約 1 cm 程度の扁平な剥片を素材とし、表裏両面の縁辺部から中央方向に剥離を施している。表面先端部は、左右からの剥離が中央部で切りあっているのに対し、下半部は縁辺部のみの剥離で素材の剥離面を大きく残している。裏面は縁辺部のみの剥離である。特に、左側縁下半部は剥離とは呼べないような小規模なものである。表面同様、素材の剥離面を大きく残している。

下端は剥離面をそのまま残しており、尖頭状に仕上げる意識は見られない。最大長 16.9 cm、最大幅 4.8 cm、最大厚 1.2 cm を測る。石材はサヌカイトである。

2 も 1 cm 程度の扁平な剥片を素材とし、表裏両面の縁辺部から中央方向に剥離を施している。表面は下端部に一部剥離を残すものの、剥離はほぼ全面に及んでいる。裏面の剥離は縁辺部に施されるだけ



第60回 出土遺物(6) (石器、1・2・4…S=1:2、3…S=2:3)

で、素材剥片の剥離面を大きく残している。石材はサヌカイトである。最大長11.8cm、最大幅4.4cm、最大厚1.3cmを測る。

3・4は昭和42年の調査の旧51号墳(58号墳)南くびれより出土した。3は縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。裏面である主要剥離面から表面の第1次剥離面にかけて剥離を施し、形状を作り出している。先端部を欠くが、断面の風化度合いから見て後世の欠損ではなく、製作時のものと思われる。主要剥離面の打面部は、剥離により除去されている。最大長3.9cm、最大幅1.9cm、最大厚0.8cmを測る。石材はサヌカイトである。

4は軟質頁岩製の縦長剥片である。先端部は節理面の一部折損している。主要剥離面は上方向から、第1次剥離面は上と下の両方向からの剥離が見られることから、石核は交互剥離であったことがわかる。最大長6.6cm、最大幅4.5cm、最大厚1.8cmを測る。

(行田)

### (3) 小結

前年度までの補足調査として、トレンチを8箇所設定した。T5-2で68号墳の周溝を確認し、場所によって周溝幅が異なり直径8m程の円墳(周溝を含めると18m)である。周溝内で埋葬施設の一部も確認した。出土した須恵器から時期はTK47型式墳である。T5-4・5で70号墳(直径6.7m)を新たに確認した。出土遺物は無く時期は不明である。旧調査で確認された57号墳を確認するためにT5-6・7を設定したが、これは確認されず、T5-7で新たな古墳(69号墳)の周溝を確認した。

この周溝は67号墳と近接するため、現状では別々の円墳が2基存在する可能性を考えている。ただ、両者で前方後円墳になる可能性もある。これについては、今後の調査が必要である。69号墳は須恵器の時期は明瞭でないが、埴輪からTK47型式～MT15型式頃が考えられる。また、T5-1・3・4・9・10では弥生時代の住居跡や土壇などが出土した。T5-1の土壇1は中期のもので、T5-9のP1は後期のものである。よって広範囲に集落遺跡が存在する事が考えられる。

(小郷)

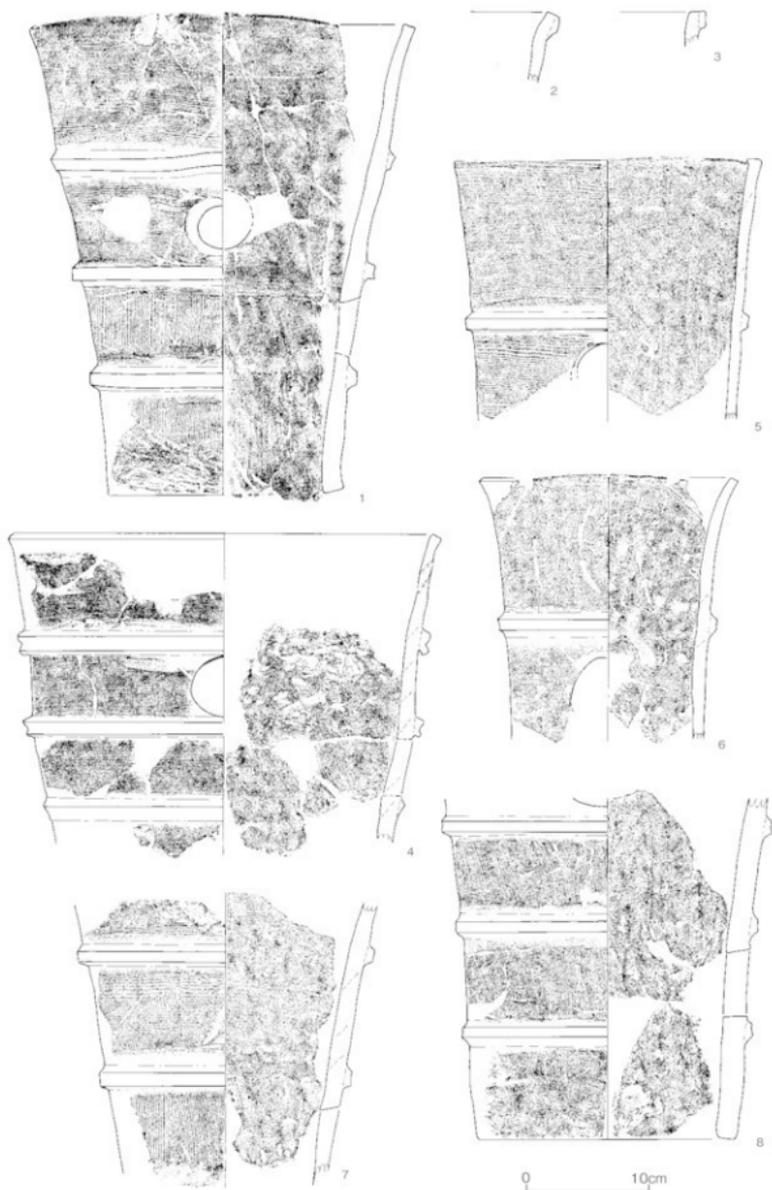
## IV. 過去の出土遺物

昭和42年の調査時の出土遺物が、コンテナ約54箱あった。そのほとんどが須恵器と埴輪(円筒・形象)で、その他鏡、鉄器類、玉類、石器がある。これら出土遺物には、ラベルがはいっていたが、一部では保管場所が変わるたびに混同してしまったものもある。また、ラベルには旧50～52、54号墳の古墳名がついているが、53号墳のものが全く存在しない。また埴輪の中には違う古墳どうして接合するものもあり、ラベルが一部では正確でない事も事実である。また、当時の写真は存在するものの、図面等は存在しない。そのため、これら出土遺物がどの部分で出土したかを確かめる手段はほとんどなかった。今回の2次・3次調査ではこの旧調査の再確認をおこなった。その結果、この部分に存在する古墳は5～6基(57～60、67・69号墳)ある事が判明し、新規発見の古墳も見られた。また、今回の遺物と旧遺物が接合できるものがありこれにより、旧出土遺物の出土古墳が確認できたものがあつた。旧50～53号墳は今回の57～60号墳に概ね該当するが、前述のように53号墳のものは無く、54号墳にいたっては、照合できない。このように出土場所(古墳)が定かでないものも多いが、旧出土遺物のうち実測できたものをできるだけ紹介する。なお、鏡、鉄器類、玉類については、鉄器類(刀、鉾、馬具、鋸先、鉄鏃)の一部以外は所在不明のため今回は報告しない。石器については、Ⅲ5(2)cを参照していたきたい。

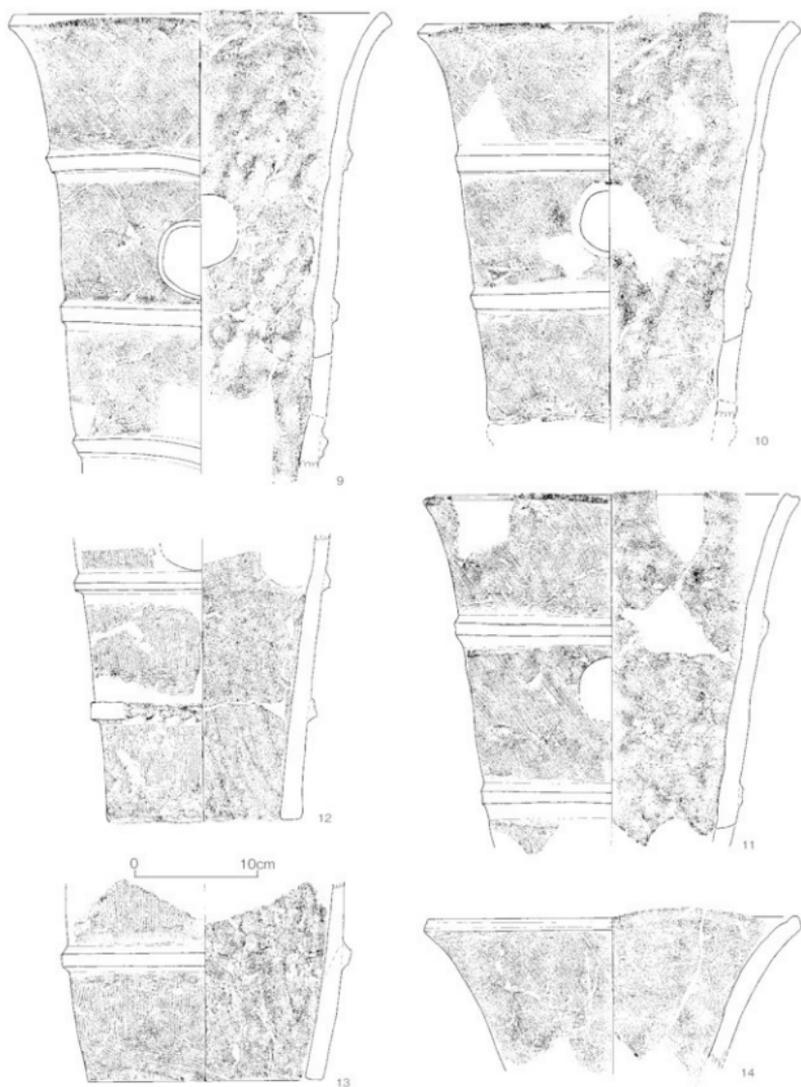
### 1. 埴輪(第61～68図)

1～7、9～13は円筒埴輪である。1は完形に復元できる。口径31cm、底径19cm、器高38cm、3条突帯で形態は台形状のものやM字状に近いもの、やや扁平なものがある。口縁部と3段目の外面は1次調整のタテハケの上に2次調整のヨコハケを施し底部と2段目はヨコハケを省略する。底部外面端は横方向のナデでハケを消している。内面はナデである。2・3は口縁部に突帯がめぐるものである。突帯の幅は2cmのものと1.5cmのものがあり、2の外面はヨコハケである。両者とも須恵質である。4は口径が35cmに復元され突帯は現状で3条あるが、突帯間は他と比べるとせまい。突帯は中央のくぼんだM字形のものと三角形のものがある。また、外面はすべてに目の細かいヨコハケが見られ、内面はナデである。5は口径25cmに復元され、外面はヨコハケ、内面はナデである。6は楕円形に歪んでおり、口径は21cmと他と比べると小さい。外面は静止痕のあるヨコハケを1回で施している。ハケは細かい板状のものようである。内面はナデである。7は上2段に静止痕のあるヨコハケを1回で施し、下段はタテハケのみである。8の外面はすべてタテハケのみで、4段目に円孔があることから朝顔形埴輪と推測される。9～11は口径30.5～31cm程に復元され、外面は斜め方向のタテハケである。12・13は外面にタテハケが見られ、底部端は横方向のナデで12はハケを消し、13はヨコハケ状になっている。12の最下段の突帯には押圧技法らしきものが見られる。14は朝顔形埴輪の口縁部で、口径30.5cm、外面は斜め方向のタテハケ、内面はヨコハケである。

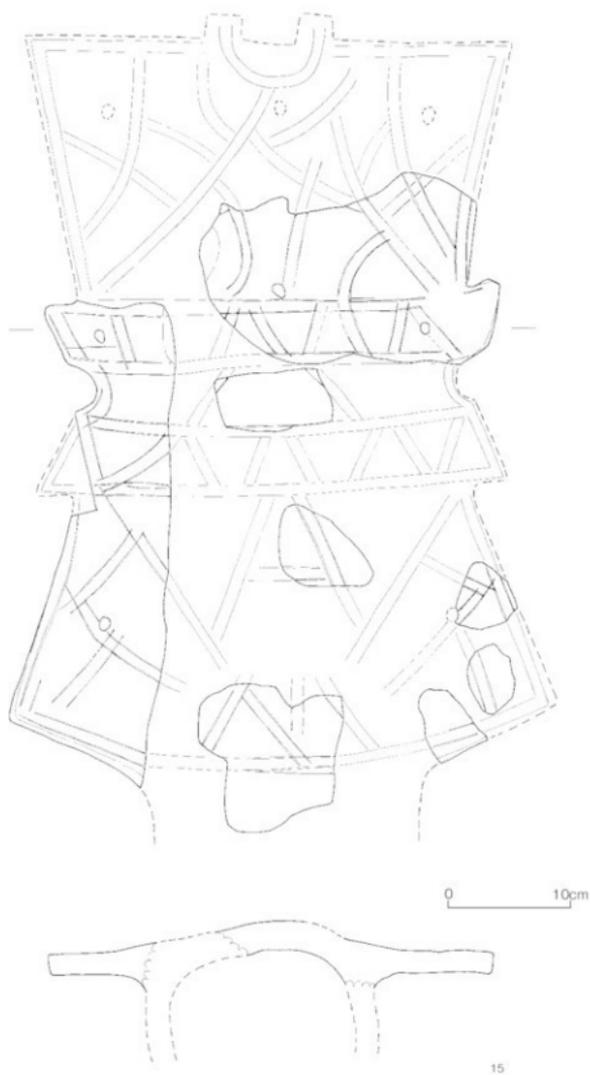
15～45は形象埴輪である。15～26は石見型盾形埴輪で15は破片から復元している。左右対称の鰭がつく形態で、中央のえぐれている部分を中央帯と呼びその上を上段帯、上段面、下を下段帯、下段面と呼称する(註1)。上段面の中央は他の破片から2個の角状突起に復元している。文様構成は明瞭でないが、16・17などから推測して復元している。ほは外郭に沿って2重の線刻がめぐり、円弧状の2



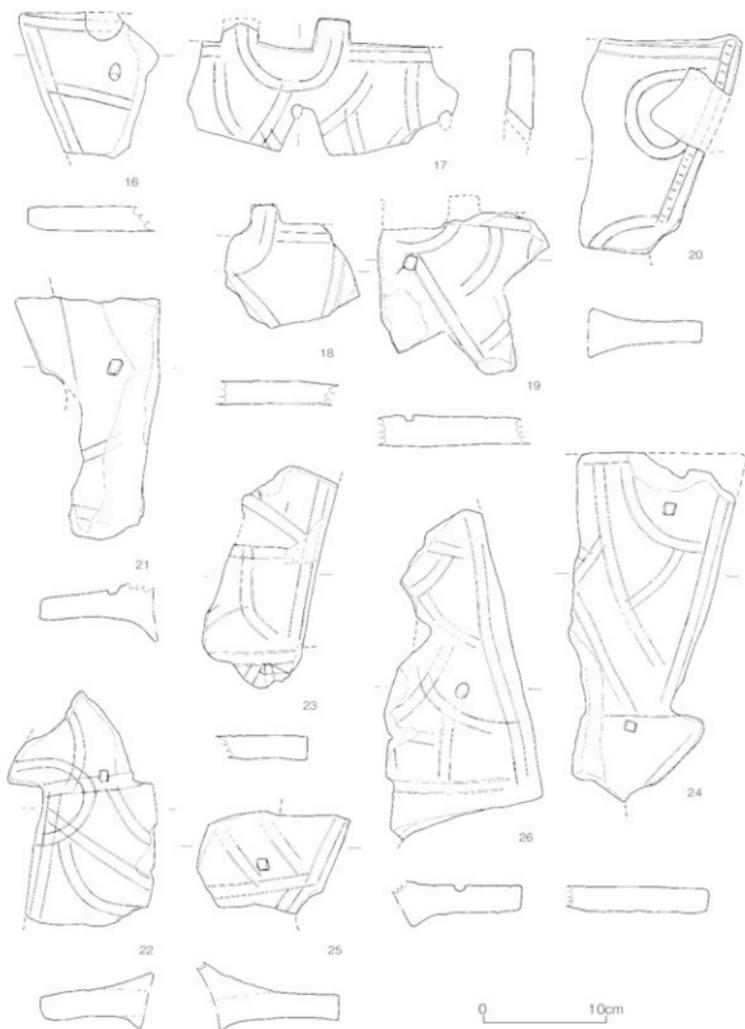
第61圖 旧調査出土遺物(1)(埴輪、S=1:4)



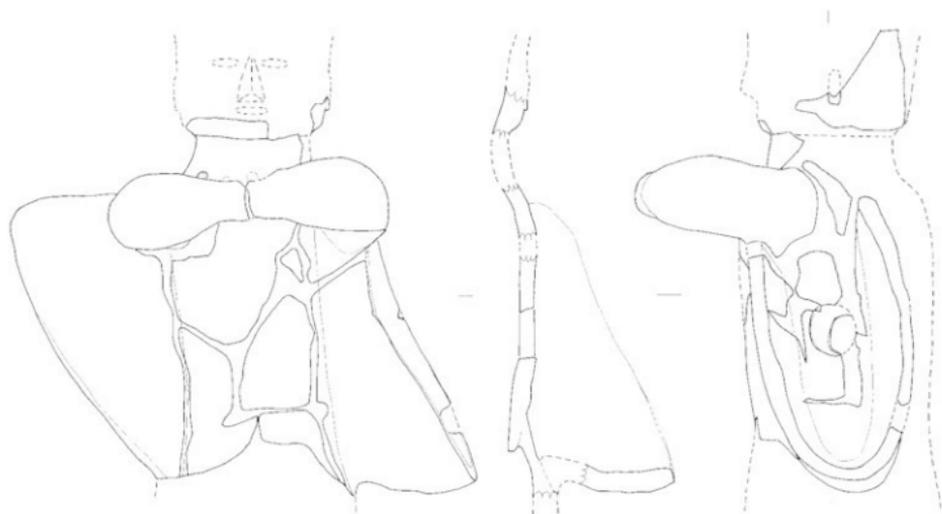
第 62 図 旧調査出土遺物 (2) (埴輪、S = 1 : 4)



第63図 旧調査出土遺物(3)(埴輪、S=1:4)

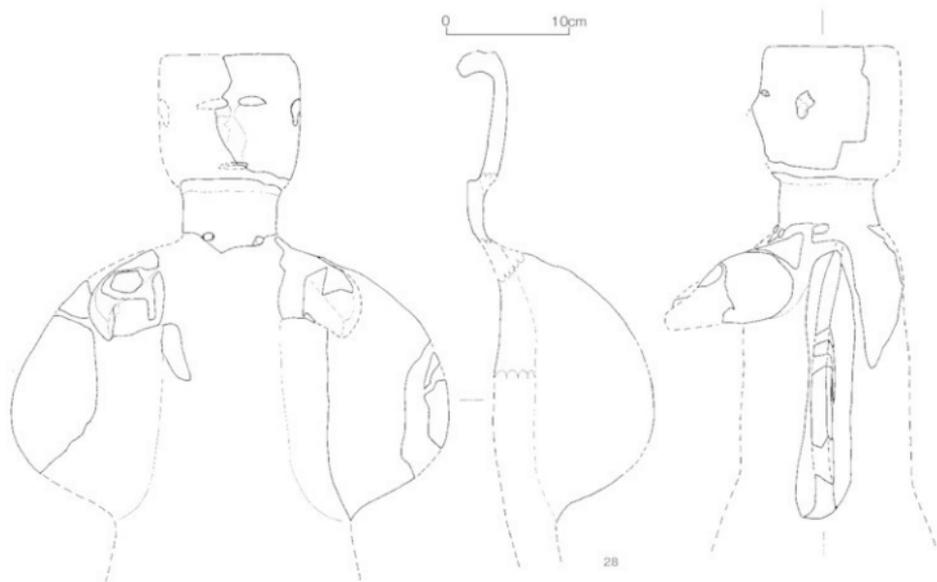


第64図 旧調査出土遺物(4)(埴輪、S=1:4)



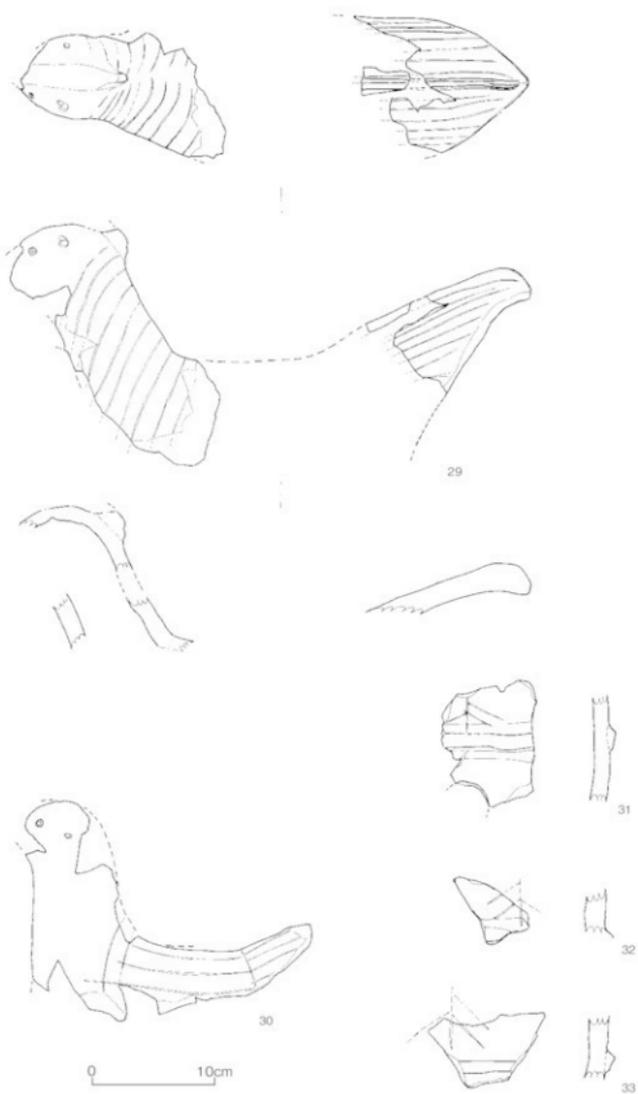
27

0 10cm

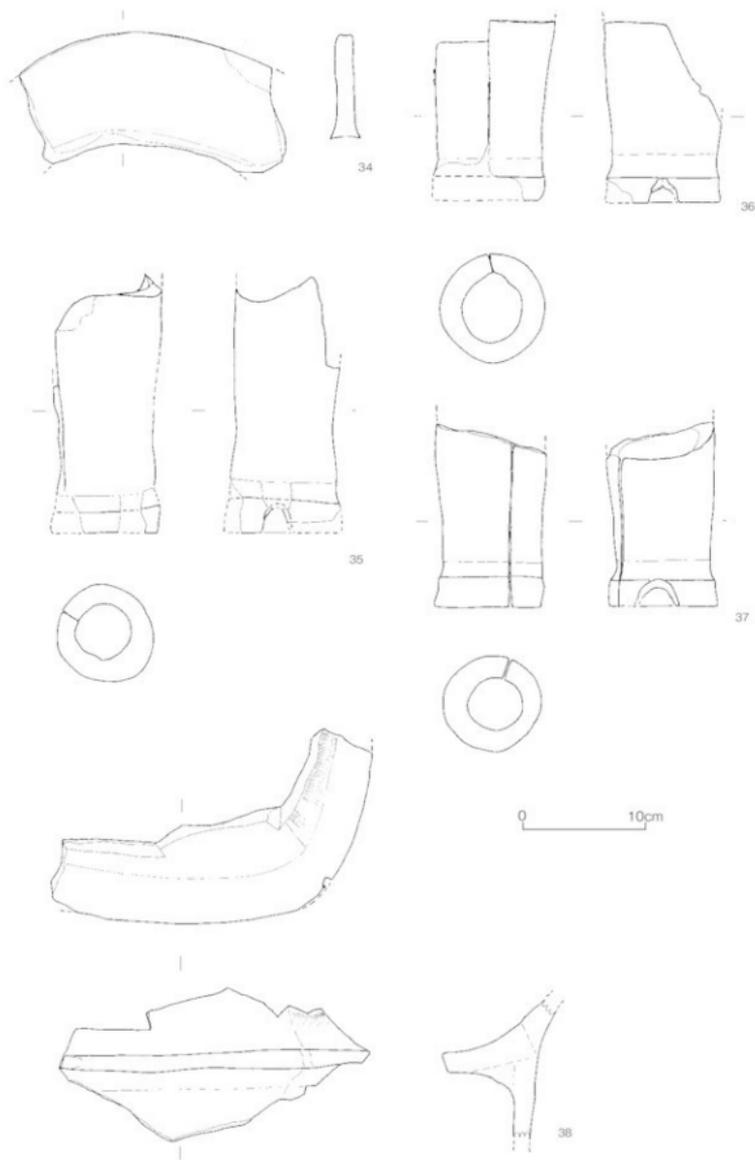


28

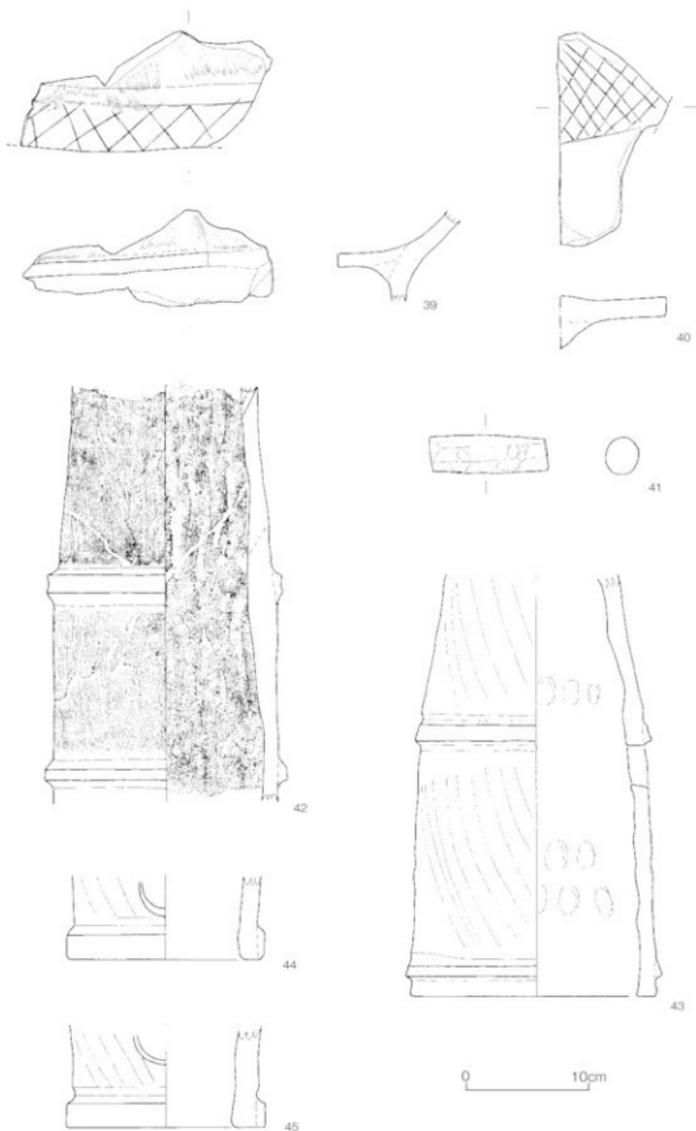
第65圖 旧調査出土遺物(5)(埴輪、S=1:4)



第66圖 旧調査出土遺物(6)(埴輪、S=1:4)



第 67 図 旧調査出土遺物 (7) (埴輪、S = 1 : 4)



第 68 図 旧調査出土遺物 (8) (埴輪、S = 1 : 4)